

琉球空手のルーツを探る事業 調査研究報告書

平成 27 (2015) 年 3 月

浦添市教育委員会

序 文

本報告書は、沖縄振興特別推進市町村交付金を活用して、平成24年度から平成26年度まで実施した「琉球空手のルーツを探る事業」の成果をまとめたものであります。

本事業は、空手と中国武術との関連性を明らかにするため、文献および現地調査を実施してまいりました。その調査の中で、五祖拳や白鶴拳などの南派少林拳や嵩山少林寺にて北派少林拳の視察を行い、空手と比較することができました。

本報告書には、文献および現地調査の集大成として開催された「空手のルーツを探るシンポジウム」にて発表されました先生方の基調講演、研究報告等を掲載しております。ご一読の上、空手および中国武術の研究状況についてご理解いただければと思います。

本報告書が、空手に興味を持つ市民をはじめ、多くの方々に活用され、空手のルーツに関する議論が深められ、かつ沖縄と中国とのさらなる交流の進展に寄与することができれば幸いです。

末尾になりますが、現地調査およびシンポジウムの実施にあたって、琉球空手のルーツを探る調査検討委員会の宮城篤正委員長他の各委員、周焜民国際南少林五祖拳連誼總會主席他の中国武術の研究者及び武術家、泉州市人民政府外事僑務弁公室、泉州少林寺、泉州市武術協会、鄭州市人民政府外事僑務弁公室、嵩山少林寺、鄭州市武術協会他の方々に厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

浦添市教育委員会
教育長 池原 寛安

例 言

1. 本報告書は、沖縄振興特別推進市町村交付金を活用した「琉球空手のルーツを探る事業」の成果を収録したものである。
2. 本事業は、平成 24 年度から平成 26 年度まで実施した。平成 24 年度は浦添市教育委員会文化部文化課の直営、平成 25 年度・平成 26 年度は株式会社スペースチャイナに業務を委託して事業を実施した。
3. 事業を実施するにあたり、浦添市と友好都市である中華人民共和国福建省泉州市の泉州市人民政府外事僑務弁公室、泉州少林寺、泉州市武術協会、国際南少林寺五祖拳連誼總會主席の周焜民氏、永春県永春拳協会、泉州市劍影実験学校、泉州師範学院、泉州海外交通史博物館よりご協力を賜った。また河南省鄭州市の鄭州市人民政府外事僑務弁公室、鄭州市体育局、嵩山少林寺、鄭州市武術協会、登封少林鷺坡武術専修院よりご協力を賜った。記して感謝申し上げます。
4. 本報告書の第 3 章「空手のルーツを探るシンポジウム」の第 3 節・第 4 節は、平成 27 年 1 月 25 日の発表内容を加除修正および若干の内容を追加した。
5. 本報告書の「特別寄稿」は、苏瀛汉氏（泉州市武術協会副主席）より「空手のルーツを探るシンポジウム」に際して寄稿されたものである。記して感謝申し上げます。
6. 本報告書の第 3 章第 3 節基調講演および第 4 節研究発表（論文）の翁氏論文の一部、特別寄稿の日本語論文は、中国語論文からの翻訳である。
7. 本報告書中の委員・執筆者・参加者の役職等は当時のものである。
8. 本報告書に関する問合せについては、下記へお願いします。

浦添市教育委員会文化部文化課

〒 901-2501 浦添市安波茶 1-1-1 TEL:098-876-1234（内線 6216・6217）

目次

序文
例言

第1章 事業概要

第1節 上位計画との位置付け	1
第2節 事業の目的	1
第3節 事業体制および調査検討委員会の構成	1

第2章 事業報告

第1節 中国現地調査（概要）	3
(1) 平成24年度	
(2) 平成25年度	
(3) 平成26年度	
第2節 空手のルーツを探る中国泉州市招聘団滞在経過（概要）	12
第3節 琉球空手のルーツを探る調査検討委員会議事録（概要）	14
(1) 平成24年度	
(2) 平成25年度	
(3) 平成26年度	

第3章 空手のルーツを探るシンポジウム

第1節 プログラム	34
第2節 演武型紹介	35
第3節 基調講演	
沖縄空手道と泉州南少林拳の源流に関する一考察	
周焜民	40
第4節 研究発表（論文）	
(1) 福建南拳の歴史と文化及び国内外伝播の研究	
翁信輝	49
一. 福建南拳について	
二. “五祖拳”、“南少林五祖鶴陽拳”の歴史と文化	
三. 福建南拳の国内外への伝播研究（国内外共同研究の希望）	
四. 福建南拳と琉球唐手の伝承	
五. まとめ	
(2) 中国武術・琉球唐手（空手）文献概観	
宮城 篤正	52
序章	
一. 中国の兵法・武術関係文献	
二. 『紀効新書』に就いて	
三. 『武備志』に就いて	
四. 『沖縄伝武備志』に就いて	
五. 沖縄・浦添関係文献再考	

六. 「聞え浦添」で素手による武術が発達	
(3) 首里手系空手と「中国少林武術」及び「白鶴拳・五祖拳」との比較	
津波 清	61
一. 中国武術との出会い	
二. 調査と分析	
三. 沖縄空手の発祥に関する一考察	
(4) 近世琉球の唐手	
田名 真之	64
一. はじめに	
二. 近世の唐手（空手）関係資料	
三. 諸芸の伝授、稽古	
四. おわりに	
(5) 剛柔流、上地流、五祖拳、白鶴拳の型「三戦（サンチン）」に関する一考察	
嘉手苅 徹	69
一. はじめに	
二. 剛柔流、上地流の三戦の定義について	
三. 4つの三戦の特徴について	
四. 4つの三戦の比較から	
五. 今後の課題	
(6) 沖縄空手の型名称についての一考察	
盧 姜 威	81
一. はじめに	
二. 沖縄空手の型名称の特徴	
三. おわりに	
第5節 討 論	88

特別寄稿

永春白鶴拳と沖縄空手道の源流

苏 瀛 汉	92
一. 王打興の武芸が福建全土（四府）に伝わる	
二. 林世成が三度琉球に敷衍する	
三. 歴史の破片を繋ぎ合せ、引き続き長幅の歴史を伝承する	

資料編

琉球空手のルーツを探る事業に関するメディア掲載記事一覧（抄）	102
恵贈文献一覧	103
調査票	105

第1章 事業概要

第1節 上位計画との位置付け

琉球空手のルーツを探る事業は、平成24年度から平成26年度に沖縄振興特別推進市町村交付金事業を活用して実施した事業である。この交付金は、「沖縄21世紀ビジョン基本計画（平成24年5月 沖縄県）」を上位計画とするもので、「沖縄振興特別措置法（平成十四年三月三十一日法律第十四号 最終改正：平成二六年六月一八日法律第七二号）」の中で定められている「沖縄振興基本方針（平成24年5月11日 内閣総理大臣決定）」に基づき、沖縄県知事が策定する沖縄振興計画として位置付けられている。

上位計画における本事業の該当箇所については以下のとおりである。

（1）沖縄振興基本方針

「Ⅲ 沖縄の振興に関する基本的な事項」「3 教育・人材の育成及び文化の振興に関する基本的な事項」「(2) 文化の振興 沖縄は、古くから中国、東南アジア諸国等との交易・交流を通じて形成された文化に、戦後の米国からの影響等も加わり、国際色豊かな独自の文化を育んでいる。こうした独自の文化の保全・継承とともに、新たな文化の創出を図るため、文化の担い手の育成や文化活動を支える基盤の形成、文化の発信・交流、クリエイティブ産業の振興等を目指す」

（2）沖縄21世紀ビジョン基本計画

「第3章 基本施策」「1 沖縄らしい自然と歴史、伝統、文化を大切にする島を目指して」「(4) 伝統文化の保全・継承及び新たな文化の創造」「エ 文化の発信・交流 沖縄文化の発展や他文化に対する理解を育むため、多彩な沖縄文化を内外に発信するとともに、文化交流を推進します。（中略）さらに、“空手の発祥地沖縄”を世界に発信するため、（中略）取り組みます。」

第2節 事業の目的

本事業は、浦添グスクを居城とした中山国察度王代の1372年に始まる琉球と中国間の交流の中で、中国伝統武術が空手の形成過程で影響を及ぼしたとの推察のもとに、文献調査や技や型の類似性など現地調査をおこない、沖縄伝統の文化の一つである空手の振興、および浦添の歴史文化の振興を図ることを目的としている。

第3節 事業体制および調査検討委員会の構成

平成24年度は浦添市教育委員会文化部文化課の直営、平成25年度・平成26年度は株式会社スペースチャイナが事業管理業務を受託して事業を実施している。事業の実施にあたって「琉球空手のルーツを探る調査検討委員会」を設置しており、委員として学識経験者および空手に造詣のある方から5名委嘱した。

調査検討委員会の構成は次頁のとおりである。

平成24年度 委員長 宮城 篤正 (前沖縄県立芸術大学学長)
副委員長 田名 真之 (沖縄国際大学総合文化学部教授)
委員 津波 清 (浦添市教育委員会教育長)
" 嘉手苺 徹 (早稲田大学大学院スポーツ科学研究科)
" 盧 姜 威 (沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員)

事務局 浦添市教育委員会文化部文化課

平成25年度 委員長 宮城 篤正 (前沖縄県立芸術大学学長)
副委員長 田名 真之 (沖縄国際大学総合文化学部教授)
委員 津波 清 (浦添市空手道連盟会長)
" 嘉手苺 徹 (早稲田大学大学院スポーツ科学研究科)
" 盧 姜 威 (沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員)

事務局 浦添市教育委員会文化部文化課
株式会社スペースチャイナ (本業務受託事業者)

平成26年度 委員長 宮城 篤正 (元沖縄県立芸術大学学長)
副委員長 津波 清 (浦添市空手道連盟会長)
委員 田名 真之 (沖縄国際大学総合文化学部教授)
" 嘉手苺 徹 (早稲田大学大学院スポーツ科学研究科)
" 盧 姜 威 (沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員)

事務局 浦添市教育委員会文化部文化課
株式会社スペースチャイナ (本業務受託事業者)

第2章 事業報告

第1節 中国現地調査（概要）

（1）平成24年度

①調査期間：平成25年1月20日（日）～平成25年1月24日（木）

②調査地域：中国福建省福州市および泉州市

③調査参加人数：3名

④調査概要

中国福建省福州市および泉州市などにて関係者と面談し、琉球空手のルーツを探る事業の趣旨と事業計画を説明して事前調整を行った。その結果、同事業への理解を得ることができ、同事業に概ね協力いただける旨の返事をいただいた。

⑤参加者名簿

NO	氏名	役職等(抜粋)
1	津波 清	浦添市教育委員会教育長
2	盧 姜 威	沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員 沖縄空手道協会四段
3	下地安広	浦添市教育委員会文化部長（事務局）

⑥平成24年度中国現地事前調整日程

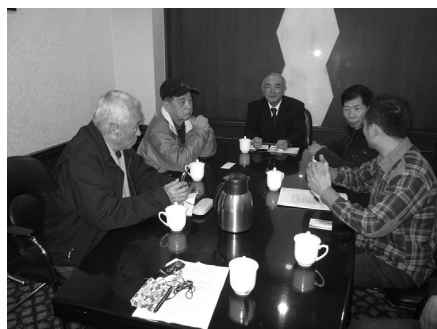
平成25年1月20日（日） 出発

平成25年1月21日（月）

事前調整 福州市武術協会 郑仁氏（福建省武術管理中心首任主任）、林沅敦氏（福州市武術協会委員）

泉州師範学院 林华东氏（泉州師範学院副校長）、高云程氏（泉州師範学院副院長）
杨秋生氏（泉州師範学院文学与伝播学院副院長・副教授）、谢传生氏（泉州師範学院外国語学院副院長・副教授）、许琦红氏（泉州師範学院外事弁副主任・副研究員）

泉州市人民政府 林锐氏（泉州市人民政府副市長）、李衛平氏（外事僑務弁公室主任）
倪景云氏（外事僑務辦公室副主任）、鄭文伟氏（泉州市教育局局長）
吴永江氏（泉州市体育局副局長）、陳懷穎氏（外事僑務弁公室科長）
黄建伦氏、方明育氏（外事僑務弁公室）



福州市武術協会



泉州師範学院



泉州市人民政府

平成 25 年 1 月 22 日 (火)

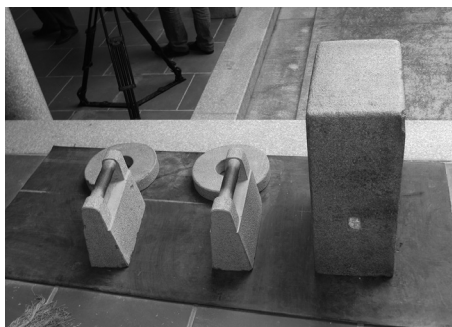
事前調整 永春白鶴拳史館

陈坚宏氏 (永春県人民政府副県長)、苏永文氏 (永春県人民政府外事
事務弁公室副主任)、陈弘氏 (中国作家協会会員)、苏瀛汉氏 (泉
州市武術協会副主席)、潘成庙氏 (泉州市武術協会名誉副主席)、潘
琼其氏 (泉州市武術協会委員)、郑晓嵘氏 (永春白鶴拳鵬翔研究会
執行会長)、曾显权氏 (永春県永春拳協会常務副秘書長)

泉州市海外交通史博物館



永春白鶴拳史館 (関係者一同)



鍛錬具



中国側の演武



中国側の演武



沖縄側の演武



泉州市海外交通史博物館にて

平成 25 年 1 月 23 日 (水)

事前調整 泉州市武術協会

泉州少林寺

周焜民氏 (国際南少林五祖拳連誼総会主席)、伍少杰氏 (泉州市武術
協会主席)、常定氏 (中国泉州少林寺方丈)、张晓峰氏 (山外山國術
館館長)

平成 25 年 1 月 24 日 (木) 帰国



泉州少林寺 (関係者一同)

(2) 平成25年度

①調査期間：平成25年10月27日(日)～平成25年11月3日(日)

②調査地域：中国福建省福州市および泉州市

③調査参加人数：15名(オブザーバー参加者1名を含む)

④調査概要

中国福建省泉州市において泉州少林寺、永春白鶴拳史館ほか関連施設を訪問し、古式の中国武術とされる「五祖拳」や「白鶴拳」のほか、棍などの器械について、空手との比較調査を行った。

また、河南省鄭州市では関係者と面談し、琉球空手のルーツを探る事業の趣旨と事業計画を説明して事前調整を行った。その結果、同事業への理解を得ることができ、同事業に概ね協力いただける旨の返事をいただいた。

⑤参加者名簿(※調査団長、※※調査副団長)

NO	氏名	役職等(抜粋)
1	宮城篤正 ※	前沖縄県立芸術大学学長、浦添市空手道連盟顧問、範士九段
2	田名真之 ※※	沖縄国際大学総合文化学部教授(歴史学) 沖縄県文化財保護審議委員
3	津波 清	前浦添市教育委員会教育長、浦添市空手道連盟会長、範士九段
4	嘉手苺徹	早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士後期課程 日本武道学会空手道専門分科会理事、練士七段
5	盧 姜 威	沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員 名桜大学非常勤講師、沖縄空手道協会四段
6	大城信子	沖縄空手道小林流大信館本部道場館長 沖縄県空手道連合会常任理事、教士八段
7	渡久山盛要	浦添市空手道連盟理事、沖縄小林流空手道協会理事、範士九段
8	宮里栄助	浦添市空手道連盟理事、沖縄船越小林流空手・古武道協会理事 教士八段
9	阿波根昌義	浦添市空手道連盟理事、沖縄硬軟流空手道協会理事長、教士八段
10	比嘉武宏	浦添市市議会議員 沖縄小林流協会、教士八段、浦添市空手道連盟事務局長
11	新垣美保	小林流大信館本部道場 (オブザーバー参加)
12	下地安広	浦添市教育委員会文化部長(事務局)
13	渡久地政嗣	浦添市教育委員会文化部文化課文化財係長(事務局)
14	佐藤未雲	株式会社スペースチャイナ代表取締役(事務局)
15	村田さくら	株式会社スペースチャイナ(事務局)

⑥平成25年度中国現地調査および事前調整日程

平成25年10月27日(日) 出発

平成25年10月28日(月)

調査経過 泉州市到着

翁信輝氏(集美大学体育学院大学院准教授)と面談

記念式典(浦添市・泉州市友好都市締結25周年記念)にて演武



翁氏と調査団



記念式典会場



記念式典会場(関係者一同)

平成25年10月29日(火)

調査経過 泉州少林寺 周焜民氏(国際南少林五祖拳連誼總會主席)、王家声氏(泉州市体育局局长)、伍少杰氏(泉州市武術協会主席)、常定氏(中国泉州少林寺方丈)、徐清輝氏(泉州市武術協会副主席)、张晓峰氏(山外山國術館館長)

泉州市劍影実験学校 庄昔聰氏(泉州市劍影実験学校校長)、庄善务氏、莊昔义氏、蔡普弾氏、江中声氏(泉州市劍影実験学校)



泉州少林寺



沖縄側の演武



中国側の演武



劍影実験学校入口・歓迎の様子



劍影実験学校にて意見交換会の様子



劍影実験学校にて意見交換会の様子

平成25年10月30日(水)

調査経過 辜氏家廟

翁公祠武術館

永春白鶴拳史館

陈弘氏(中国作家協会会員)、苏瀛汉氏(泉州市武術協会副主席)、

潘成庙氏（泉州市武術協会名誉副主席）、潘琼其氏（泉州市武術協会委員）、苏君毅氏（泉州市武術協会委員）、苏君玉氏（泉州市武術協会委員）、曾显权氏（永春県永春拳協会常務副秘書長）



辜氏家廟



方・曾二師の道場跡



位于永春县五里街镇金峰山麓东
六個的方 曾一師道場跡
方・曾二師の道場跡



翁公祠武術館入口



翁公祠武術館祭壇（1928年創設）



永春白鶴拳史館



現地テレビ局の取材



沖縄側の演武



中国側の演武

平成25年10月31日（木）

調査経過 泉州師範学院

海外交通史博物館、王连茂氏（泉州市海外交通史博物館名誉館長）と意見交換

※ここから調査団を鄭州市行組（A団）と帰国組（B団）へ分離



沖縄側の演武



沖縄側の演武



泉州師範学院演武者の演武



泉州師範学院演武者の演武



泉州海外交通史博物館



王连茂氏と意見交換

平成 25 年 11 月 1 日 (金)

事前調整 鄭州市体育局および 李庆山氏 (鄭州市体育局局長)、 聂艳华氏 (鄭州市体育局人事处处长)、 刘善民氏 (国際武道研究協会名誉会長)、 李菲氏 (鄭州市武術協会秘書長)

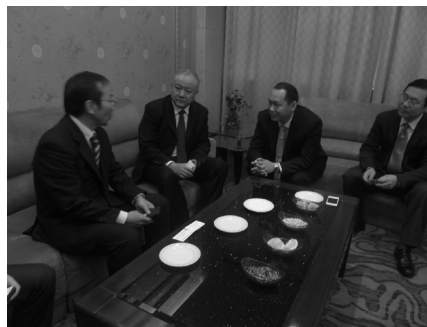
(A 団) 鄭州市武術協会 鄭州市人民政府外事僑務弁公室 李陶然氏 (外事僑務弁公室主任)、 张树忱氏 (外事僑務弁公室副主任)、 高瑜氏 (外事僑務弁公室处长)、 冯耀国氏 (外事僑務弁公室)

登封少林鷺坡武術專修院 王德克氏

※ B 団は帰国



鄭州市体育局および武術協会関係者



鄭州市外事弁公室と事前調整



登封少林鷺坡武術專修院



登封少林鷺坡武術專修院



登封少林鷺坡武術專修院鍛鍊



登封少林鷺坡武術專修院鍛鍊

平成 25 年 11 月 2 日 (土)

事前調整 嵩山少林寺、延勤氏 (嵩山少林寺執事) と面談

平成 25 年 11 月 3 日 (日) 帰国



事前調整後、延勤執事と

(3) 平成26年度

①調査期間：平成26年10月18日（土）～平成26年10月23日（木）

②調査地域：中国河南省鄭州市

③調査参加人数：14名（オブザーバー参加者7名を含む）

④調査概要

中国河南省鄭州市において嵩山少林寺ほか関連施設にて武術者と、鄭州市第四十七中学体育館にて第十回中国鄭州国際少林武術祭参加者の演武を視察。空手との関連性やその影響等調査を行った。

⑤参加者名簿（※調査団長、※※調査副団長）

NO	氏名	役職等(抜粋)
1	宮城篤正※	元沖縄県立芸術大学学長、浦添市空手道連盟顧問、範士九段
2	津波 清※※	前浦添市教育委員会教育長、浦添市空手道連盟会長、範士九段
3	嘉手苺徹	早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士後期課程 日本武道学会空手道専門分科会理事、練士七段
4	盧 姜 威	沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員 名桜大学非常勤講師、沖縄空手道協会四段
5	大城信子	沖縄空手道小林流大信館本部道場館長 沖縄県空手道連合会常任理事、教士八段 (オブザーバー参加)
6	渡久山盛要	浦添市空手道連盟理事 沖縄小林流空手道協会理事、範士九段 (オブザーバー参加)
7	比嘉武宏	浦添市市議会議員、沖縄小林流協会 浦添市空手道連盟事務局長、教士八段 (オブザーバー参加)
8	護得久朝文	浦添市市議会議員、文教委員会委員長 浦添市空手道連盟理事 (オブザーバー参加)
9	仲里邦彦	浦添市市議会議員 (オブザーバー参加)
10	與儀清春	那覇市文化協会理事 (オブザーバー参加)
11	久部良和子	沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課主査 (オブザーバー参加)
12	下地安広	浦添市教育委員会文化部長（事務局）
13	佐藤未雲	株式会社スペースチャイナ代表取締役（事務局）
14	村田さくら	株式会社スペースチャイナ（事務局）

⑥平成26年度中国現地調査日程

平成26年10月18日(土) 出発
鄭州市到着

平成26年10月19日(日)

調査経過 鄭州市人民政府外事僑務弁公室 李陶然氏(外事僑務弁公室主任)、張樹忱氏(外事
僑務弁公室副主任)、馮耀國氏(外事僑務弁公室)

武術祭開幕式(嵩山少林寺)



鄭州市外事弁公室



武術祭開幕式会場入口



武術祭開幕式

平成26年10月20日(月)

調査経過 嵩山少林寺 延竣氏、延鵬氏、延晨氏、延照氏、延山氏



方丈院の様子



西方聖人殿での調査



日本僧邵元の碑文



白衣殿武術関係壁画(明代)



嵩山少林寺図書館館内蔵書



演武会場



沖縄側の演武「ナイハンチ」



沖縄側の演武「ジオン」



中国側の演武「八歩連環」



中国側の演武 「炮拳」



中国側の演武 「二指弾」



中国側の演武 「朝阳拳」

平成 26 年 10 月 21 日 (火)

調査経過 河南博物院

武術祭競技 (鄭州市第四十七中学体育館)

鄭州市体育局および 李伟建氏 (鄭州市武術協会副主席)、 聂艳华氏 ((鄭州市体育局人事处处长)、 李菲氏 (鄭州市武術協会秘書長)



河南博物院



競技会場の様子



競技演武「梅花拳・梅花炮拳」



競技演武「梅花枪」



競技演武「永春伏虎拳・永春红砂手」



鄭州市体育局および鄭州市武術協会

平成 26 年 10 月 22 日 (水) 帰国

第2節 空手のルーツを探る中国泉州市招聘団滞在経過（概要）

①**招聘期間**：平成27年1月23日（金）～平成27年1月27日（火）

②**招聘者数**：6名 [泉州市5名、集美大学（厦門市）1名]

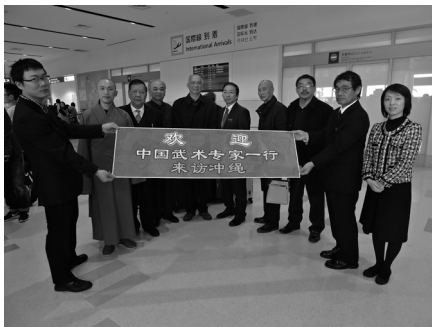
③**招聘者**：周焜民（国際南少林五祖拳連誼總會主席）
常定（中国泉州少林寺方丈）
徐清輝（泉州市武術協會副主席）
苏瀛汉（泉州市武術協會副主席）
姜雄雄（国際南少林五祖拳研究会副会長）
翁信輝（集美大学体育学院大学院准教授）

④平成26年度 空手のルーツを探る中国泉州市招聘団滞在経過

平成27年1月23日（金）

滞在経過 那覇空港到着

浦添市長表敬訪問



那覇空港国際線ターミナルにて



浦添市役所正面玄関にて



浦添市長表敬訪問

平成27年1月24日（土）

滞在経過 首里城公園視察

浦添ようどれ視察

沖縄県立博物館・美術館視察

福州園視察



首里城公園視察



沖縄県立博物館・美術館視察



福州園視察

平成27年1月25日(日)

滞在経過 空手のルーツを探るシンポジウム



関係者打ち合せ



子ども達による演武



基調講演(周氏)



研究発表(翁氏)



討論



シンポジウム後

平成27年1月26日(月)

滞在経過 沖縄空手道小林流大信館道場視察
伊祖武芸館視察



大信館道場にて



伊祖武芸館にて



伊祖武芸館にて

平成27年1月27日(火) 帰国

第3節 琉球空手のルーツを探る調査検討委員会議事録（概要）

（1）平成24年度

①第1回調査検討委員会

日時：平成24年11月27日（火）14時～16時

場所：浦添市役所行政棟7階701会議室

参加者：7名

委員4名（宮城篤正、津波 清、田名真之、盧 姜 威）

事務局3名（下地安広、松川 章、瑞慶覧長順）

次第：

- 一．委嘱状の交付
- 二．教育長あいさつ
- 三．委員長および副委員長の選任
- 四．委員長および副委員長あいさつ
- 五．議事
 - (1) 事業概要について
 - (2) 琉球空手の研究概要について
 - (3) 事前調査について

配付資料

- ・事業概要説明資料
- ・琉球空手のルーツを探る事業調査検討委員会設置要綱
- ・琉球空手のルーツを探る事業委員名簿
- ・平成24年度琉球空手のルーツを探る中国調査計画（案）
- ・琉球空手に関する文献目録（抜粋）

議事：（○印は委員の発言、△印は事務局の発言）

- 一．調査検討委員会設置要綱について
調査検討委員会委員より承認を得た。
- 二．委員長および副委員長の選任について
委員の承諾をもって委員長に宮城篤正氏、副委員長に田名真之氏が選任された。
- 三．事業概要について
調査検討委員会委員より承認を得た。

四. 琉球空手の研究概要について

△事務局：(「琉球空手に関する文献目録(抜粋)」の説明)

○宮城委員：民俗学と歴史学を組み込んだ新しい学問体系が空手研究には必要である。以前に、中国で「ナイハンチ初段」を演武したら、中国の武術家からは古式の型と言われたことがある。

○津波委員：中国の寺院跡など遺跡を調査する必要があるのではないかと。中国武術と空手の型の比較、それぞれの鍛錬器具・武具・呼吸法・鍛錬法などを比較することで、相違を明らかにし、その発祥にせまられるのではないかと。あわせて古文献調査も必要ではないかと。

○田名委員：琉球王府は、中国の宮中等での儀式(しきたり)のうち必要であるものを取り入れており、御冠船踊の中に「たうて」(唐手)の存在が確認されることは、中国においても存在していたと考えられるが、なぜそれを導入したのか。

御座楽は冊封使に見聞させるために演じられたものであり、「たうて」(唐手)が御冠船踊の一つとして記されているのであれば、中国で演じられていた宴会の出し物として、民俗学的視点で捉えることも必要である。

中国の影響下にあった近隣国(朝鮮・タイ・ベトナム等)の資料も収集する必要がある。また、武術は軍の技術であり、その指導が必要であることから、一子相伝的な技術ではない。

○盧委員：空手の型の呼称として『大島筆記』で確認できる一番古い型は、「クーサンクー(公相君)」がある。

棒術が一つのKeyとなっている。棒は古くは棍(こん)と呼ばれた。棒術は古くより存在し、その動きは空手の型を彷彿とさせる。

1867年頃の御冠船踊の記述中に、「たうて」(唐手)の名称がある。

△事務局：次回調査検討委員会までに、先生方の研究可能なテーマを考えていただければと思います。

五. 事前調査について

△事務局：(「平成24年度琉球空手のルーツを探る中国調査計画(案)」の読み上げ)

○盧委員：調査地として福州も含めてはどうか。現地調査の期間は4泊5日では短いのではないかと。

△事務局：福州への調査について、本年度の事前調査の成果を踏まえて、今後の委員会の中で検討いたします。

②第2回調査検討委員会

日時：平成25年2月28日（木）14時～16時

場所：浦添市役所議会棟1階102会議室

参加者：8名

委員4名（宮城篤正、田名真之、津波 清、盧 姜 威）

事務局4名（下地安広、當間眞榮、松川 章、瑞慶覧長順）

次 第：

- 一. 委員長あいさつ
- 二. 第1回調査検討委員会議事録
- 三. 中国事前調査報告
- 四. 次年度調査方針についての意見交換
- 五. その他報告事項
- 六. 閉会あいさつ

配付資料：

- ・第1回調査検討委員会議事録
- ・現地事前調整報告資料
- ・翻訳候補資料目次
- ・琉球空手のルーツを探る事業調査検討委員会設置要綱

議事：（○印は委員の発言、△印は事務局の発言）

- 一. 第1回調査検討委員会議事録について
調査検討委員会委員より承認を得た。

- 二. 次年度調査方針についての意見交換

△事務局：（事前調整の報告）

○盧委員：今後の調査として、従来の演武などの交流だけで終始するのではなく、各調査地先で、空手の型を中国武術の型と照合して名前を決める作業を入れた方がよいのではないかと。

○津波委員：今回見た中国拳法の型は空手の型と共通するものがあり、古い形態を留めているのではないかと。いずれにせよ、次回は時間をかけて意見交換を行いたい。

○宮城委員：短い期間であったが、泉州少林寺や泉州師範学院、永春県白鶴拳史館、泉州市海外交通史博物館など、多くの場所で研究者や武術家と会い、今後につながる事業協力の回答をいただいたことが成果であった。

○田名委員：中国武術全体の構成図があって、中国武術の各流派がその中のどの位置づけになるのか、白鶴拳についても福建省ではどういう位置づけになっているのか、それがどのようにして広まったのか、これらの課題を解決するために現地研究者とコンタクトを取った方がよい。沖縄から沖縄空手と中国武術との全体像を把握することは難しいと思う。今回事前調整で色々な方とお会いしているはずなので、現地協力者を探して、共同で研究した方が効率的である。

研究方法として色々なやり方があると思う。沖縄空手の型と中国武術の型との比較によって共通項を見つけていく帰納法的方法もあるが、沖縄の型と中国の型各々の時代別に歴史性（流行や主流）を探り、型の見た目は違っていても、同時代資料として比較するという

方法もある。

- 宮城委員：今までは型と型との表面的な比較作業に主眼が置かれてきたと感じる。
- 盧委員：中国での現時点での研究はある程度進んでいる。ただし、ほとんどの研究が明国以前の武勇伝ばかりで、中国武術の古い型がどのように変化しているのかといった視点が欠けている。

中国では白鶴拳が一つの「流派」として存在する。沖縄空手の場合、上地流は一つの拳種であるが、剛柔流は白鶴拳の流れを含め、色々なものが混じっている。他の流派はそうでもなく、特に首里手系は「サイファ」、「パッサイ」といっても流派によって違った動作が存在する。中国武術でいうところの流派は、沖縄空手の流派とは次元が違う。中国では、一流派一種類の拳種を使っているが、沖縄では色々なものが混じっている。型の中一つ一つを分解し、各々の拳種を当てていくことが大事ではないか。

- 津波委員：永春県に現存している武術は、だいぶ現代的な印象を受けるが、技術的な系譜の解明、また沖縄古武道との関連調査も必要である。
- △事務局：少林寺について、泉州市は、嵩山少林寺が発祥であるという説が主流であります。福州市へ行くと、それは違うと主張します。福建省の自治体間で少林寺の起源についての考え方が違うことがわかりました。

学術的な視点をもって、一步引いて調査するのがいいと考えます。

- 宮城委員：それがよい。沖縄文献関係は沖縄の研究者で、中国文献関係は中国の研究者を窓口にして探してもらうのがよい。
- △事務局：調査の方法として、委員各々にテーマ毎に役割を分担してもらうか、あるいは委員全員で包括的に進めるかを決めてもらえないでしょうか。
- 宮城委員：役割を分担することは難しいと思う。私は、田名委員と文献を検討していく。また技については、津波委員や嘉手苺委員、盧委員が検討していく。こういう風に共同で調査しないとできないのではないのか。
- 盧委員：私自身でできる仕事として、中国武術の技法名を復元することは可能と考える。
- 津波委員：ぜひ盧委員に技法名の復元作業をやってもらいたい。中国方言は独特の表現があり、沖縄の方言にも大きな影響を与えているようなので、空手の型名称にも同様なことが言えるのではないか。



第2回調査検討委員会

(2) 平成25年度

①第1回調査検討委員会

日時：平成25年10月1日(木)14時～15時(委員会)
15時30分～(中国現地調査演武者合同練習)

場所：浦添市役所行政棟7階702会議室(委員会)

参加者：11名

委員5名(宮城篤正、田名真之、津波 清、嘉手苺徹、盧 姜 威)
事務局 浦添市3名(松川 章、渡久地政嗣、瑞慶覧長順)
スペースチャイナ3名(佐藤未雲、池宮一樹、村田さくら)

次 第：

- 一. 開会のあいさつ
- 二. 調査検討委員会委員および事務局紹介
- 三. 調査検討委員会設置要綱について
- 四. 委員長および副委員長の選任
- 五. 委員長あいさつ
- 六. 調査検討
 - (1) 今年度の業務について
 - (2) 現地調査の方法について
- 七. 事務局連絡
- 八. 閉会のあいさつ

※ 15:30～中国現地調査演武者合同練習(浦添市民体育館)

配付資料：

- ・第1回調査検討委員会次第
- ・琉球空手のルーツを探る事業調査検討委員会設置要綱
- ・調査検討資料今年度業務について(別紙：中国調査交流日程案、中国調査交流参加者名簿)
- ・調査検討資料現地調査の方法について(別紙：中国武術・琉球空手調査票案、浦添市側武術演武者と演武型リスト)

議事：(○印は委員の発言、△印は事務局の発言)

- 一. 調査検討委員会設置要綱について
調査検討委員会委員より承認を得た。
- 二. 委員長および副委員長の選任について
委員の承認をもって委員長に宮城篤正氏、副委員長に田名真之氏が選任された。
- 三. 調査検討について
現地調査日程案について
○津波委員：現地調査5日目に視察する泉州師範学院では、武術交流か意見交流どちらかにし
ぼって行った方がよいのではないかと。

- 宮城委員：他の訪問先では武術交流を行う予定なので、師範学院では意見交換でよいと思う。
- 津波委員：学校みたいに学科があるのか、指導を行っているのか等、情報がほしい。
集美大学教員である翁信輝先生と廈門市内で交流ができるのであれば、交流を行いたい。

現地調査の方法について

- △事務局：(配付資料中の) 調査票に関して、ご意見があればお願いします。
- 津波委員：調査票について、武術における項目のみあがっており、文献とか書家の調査が抜けているので、その表も(別途)作成していただきたい。
- 宮城委員：文献写真等の記入欄を調査票と一緒に付け加えてもよいのでは。
- 津波委員：調査票の紙は厚めのものを使用し、両面使用の方がよいと思う。
- 嘉手苺委員：調査票中に流派、型名、性別、道場、経験年数の記入欄を作成し、事前に中国側の演武者の情報をいただき埋めておきたい。
- 津波委員：調査票は裏表にして、現行案を裏にして、表(流派、氏名等)を作成してほしい。
永春白鶴拳史館の近くの道場を訪ねてみたい。そこで意見交換ができればよい。
- △事務局：現地調査の役割分担に関してご意見をいただければと思います。
- 津波委員：武術調査は、宮城委員を中心にして調査をおこない、後ほどお互いの流派の立場より意見交換を行うのはどうか。
- 宮城委員：津波委員の言うように行った方がよい。文献は田名委員を中心に行っていただく。



第1回調査検討委員会



中国現地調査演武者合同練習

②中国調査報告会

日時：平成25年11月14日（木）14時～17時

場所：浦添市役所議会棟1階102会議室

参加者：10名

委員4名（宮城篤正、津波 清、嘉手苺徹、盧 姜 威）

事務局 浦添市3名（下地安広、渡久地政嗣、瑞慶覧長順）

スペースチャイナ3名（佐藤未雲、池宮一樹、村田さくら）

次 第：

- 一. 開会あいさつ
- 二. 調査の経過
- 三. 現地調査のまとめ方について
 - (1) 技や型の類似性等
 - (2) 文献調査及び王連茂先生との意見交換について
- 四. 閉会あいさつ

配付資料：

- ・演武リスト及び中国演武者写真
- ・恵贈文献リスト
- ・調査票

議事：（○印は委員の発言、△印は事務局の発言）

現地調査のまとめ方について

△事務局：今回調査を踏まえまして、先生が感じたことがありましたら、先にお話しいただきたいと思います。

○嘉手苺委員：まず、コースと場所との位置、主に演武場で中国側の演武者のうち誰がどういう型をやり、年齢、流派等の演武情報をおさえていく必要があるだろうと思う。それから、演武されている方々以外の古いことをよく知っている方や、それぞれの組織の長、流派の継承者については基本的な情報として、まずはおさえておく必要があるかと思う。技や型の類似性など、具体的な部分については、委員の中での情報交換をしながらではないと、難しいと思う。何をどこまでできるのか確認しながら進めていけたらと思う。

○盧委員：中国側の型の技法名を入手した方がいいかと思う。今回の事業は、ルーツを探る目的なので、その比較が必要になってくるのではないかと思います。

○津波委員：南拳の中に「ナイハンチ」があると翁先生がおっしゃっていたが、実際に型をみてみないと沖縄に伝わっている型と共通性があるのかどうか分からない。名前は同じだけど、型とか表現の方法が全く違うとか、そういうものが見たい。これまでの情報からすると、特に首里手系の型のルーツを探るには、南拳を調べた方がいい。今度の白鶴拳関係の道場や武術館など訪れて、上地流系、剛柔流系は影響をうけているという印象があった。ただ呼吸法になると、まったく別になっているとも感じた。型の様式は、どちらかという上地流に近く、呼吸法は剛柔流に近いと感じた。そういう意味では、類似性が見いだせるかと思う。影響度からいうと、小林流よりは、上地系のほうが鮮明かと思った。あとひとつ古武術、武具そのものは向こうから伝わっているが、その使い方、技法からいうとまったく違う。

- 嘉手苧委員：結局、源流をたどっていく調査は、系統が分からないと厳しいと感じた。映像見るにしても、中国武術は変容が激しいことを念頭にいれないといけない。中国側にとって、武術は常に変容するものだと断言している。
- 宮城委員：中国の影響を受けながら、沖縄独特の型としての確立されたと思う。沖縄空手の中心になるのは型だとよく言われているが、白鶴拳の中でも、地域によって全く異なる。見た目で見ると共通点を探ると言うのは、大変難しいと感じる。技だけで共通点を探ると、本質を見失うのではないかと思う。原点に立ち返って、沖縄の文献を改めて、見直す必要があるのではないか。変化した技を、無理に沖縄空手に結びつけるというやり方ではなく、根幹を見失わない方法を考えなければいけないと思う。
- 津波委員：型の中で、中国の影響を受けたと思われる技術的な面もたくさんあるが、技術の体系としての型は沖縄で成立したのだらうと解釈した方がいいと思う。ただ、なんでもかんでも沖縄というわけではなく、技術的な面をみると、中国の強い影響があったと感じることができる。武術という点からすると、やはりひとつの体系化されたものがないと武術とはいえないだろう。
- 宮城委員：おもしろそうも調べないといけないと思う。地元の文献資料を見て、特に首里手系は、歴史が古くてわかりにくい、それが浦添の時代まで結び付けられるのかどうか、またそれが源流として繋がるのか、調べたいと思う。
- 嘉手苧委員：「手（ティー）」の話は、今調べているところだが、定義付けとか歴史的な位置づけが重要になってくると思う。文献そのものにも「手（ティー）」が使われて、その意味として沖縄在来の徒手武芸が使われていたのか問題になってくると思う。
- 津波委員：『沖縄伝武備志』の中に、手をつかうという単語が出ており、沖縄の「手（ティー）」に関する言葉が出ている。検証する必要があるが、用語として出ている。
- 盧委員：手は福州の方言でも手という言葉は、技を教えるとき、「一手」教えるという言い方がある。
- 津波委員：琉球空手のルーツを二段階に分けて、現代の型と、それ以前の型と連動させていく形で考えていくと理解しやすい。そうすれば、理論化できる可能性が大きくなると思う。
- 津波委員：棒の使い方について技術は違うが、理念はかなり似たような部分があった。技法からすると近い印象を受けた。「トンファ」は、型も使い方もあるが、それを使ってどう敵に対応する理念というのは共通する部分がある。



中国調査報告会

③第2回調査検討委員会

日時：平成25年12月25日（水）15時～17時30分

場所：浦添市役所議会棟1階102会議室

参加者：11名

委員4名（宮城篤正、津波 清、嘉手苺徹、盧 姜 威）

事務局 浦添市4名（下地安広、松川 章、渡久地政嗣、瑞慶覧長順）

スペースチャイナ3名（佐藤未雲、池宮一樹、村田さくら）

次第：

- 一. 開会あいさつ
- 二. 委員長あいさつ
- 三. 調査検討会議
 - (1) 中国調査交流報告
 - (2) 意見交換
- 四. 事務局連絡
- 五. 閉会あいさつ

配付資料：

- ・第2回調査検討委員会次第
- ・翻訳対象文献の目次
- ・第3回調査検討委員会日程候補記入用紙
- ・津波委員「琉球空手のルーツを探る事業の調査報告」
- ・嘉手苺委員「空手型『三戦』の比較」、「空手（剛柔流）と五祖拳、白鶴拳の比較について」
- ・盧委員「沖縄空手古武道の名称」、「沖縄空手の技法（上地流）」

議事：（○印は委員の発言、△印は事務局の発言）

調査検討会議について

- 津波委員：浦添市史に記載のある舞方（メーカタ）とはどのようなものか
- 宮城委員：浦添舞方と沢岬舞方がある（浦添市史第3巻より）。モーアシビーでは座を清めるためにおこなったという。内間の綱引きにも舞方があった。
- △事務局：舞方は男の人が踊るものでしょうか。内間にも舞方があって、男性が踊っているようだ。手の動きが空手に似ていると見えますが。
- 宮城委員：空手が舞踊化したものが舞方との見方もある。私は空手のルーツを探るヒントを他にも考えたい。
- 津波委員：首里手系の型名称の中に由来がわからないものが多い。近代になって優れた武人が輩出され、各々が流派を作り出したと考える。
- 盧委員：小林流系、上地流系と剛柔流は廃藩置県前後に福州へ渡った際の影響を受け、小林流系は羅漢拳の動きと近い。白鶴拳は羅漢拳からヒントを得たと考えられており、五祖拳は19世紀に白鶴・羅漢・猴・達磨・太祖を一緒にしたものと考えている。
- 津波委員：18世紀には唐手佐久川など具体的な名前の記述が見られるので、この頃首里手系の型の原型が成立したものと考える。小林流系の型の構成は沖縄的である。

- 嘉手苺委員：剛柔流にある「三戦（サンチン）」は3歩前進、3歩後退を基本とする。これは宮城長順が体系化したものであるが、これが五祖拳・白鶴拳にもあることに驚いた。この動きは五祖拳の前の拳法である太祖拳にあるかどうか。
- 宮城委員：上地流は明治末に上地完文が中国に渡って習得したのからできた中国的な要素が強いものである。しかし、現段階ですでに「沖縄化」している。剛柔流以前の流派はさらに「沖縄化」しているが、元々の型は想定しにくい。しかし古い型の中に若干オリジナルが残っていると考えることは可能だと思う。
- 嘉手苺委員：中国武術でも「手」、「歩」とつく型名はあるのか。
- 盧委員：「五十四歩（ウーサーシー）」など型名で使われる「歩」や「手」は1つの単位である。「三十六手（サンサーリユー）」は本質的には三十六の技がなければならない。
- 嘉手苺委員：空手は右手が上ではじまる場合が多いのに対して、中国拳法は左手が上となっているのはなぜか。
- 盧委員：上地流や剛柔流は受けからはじまる。台湾の白鶴拳は1人に対してずっと打っているイメージの型となっている。
- 宮城委員：上地流・剛柔流より首里手系はルーツを探ることは難しい。



第2回調査検討委員会

④第3回調査検討委員会

日時：平成26年2月16日（日）14時～17時

場所：浦添市男女共同参画推進ハーモニーセンター1階ホール

参加者：12名

委員5名（宮城篤正、田名真之、津波 清、嘉手苺徹、盧姜威）

事務局 浦添市4名（下地安広、松川 章、渡久地政嗣、瑞慶覧長順）

スペースチャイナ3名（佐藤未雲、池宮一樹、村田さくら）

※この調査検討委員会は公開とした。なお一般客42名の参加があった。

次第：

一．開会あいさつ

二．調査検討会議

(1) 中国調査映像放映

(2) 中国調査交流報告（発表順）

①田名真之 ②宮城篤正 ③盧姜威 ④嘉手苺徹 ⑤津波 清

(3) 委員による検討（コーディネータ：文化部長）

三．質疑応答

四．閉会あいさつ

配付資料：

- ・第3回調査検討委員会次第
- ・中国現地調査の様子（写真）
- ・宮城篤正委員「中国武術・空手文献 概観」
- ・田名真之委員「近世琉球の唐手」
- ・津波清委員「沖縄伝統小林流空手道と中国武術「白鶴拳・五祖拳」との比較」
- ・嘉手苺徹委員「空手及び福建南拳の型『三戦』における礼法、初動、終動の比較を通して」
- ・盧姜威委員「沖縄空手の型名称について」

※うち上段二つは一般客へ配布

議事：（○印は委員の発言、□印は文化部長の発言、●印は質疑者の発言）

委員による検討について

□文化部長：今日の報告会は当方が委員をお願いした先生方の発表を行っていただきました。委員の発表を踏まえて委員間での検討を20分程度行っていただきたいと思います。各委員の発表について各々専門的な立場で議論していただければと思います。

型の類似性について

○津波委員：中国語の型名について、似たような名称を挙げたが、福建の型名で首里手系の「ナイハンチ」などを見たことはないか。

○盧委員：実際、沖縄の型は見たことはない。「ナイハンチ」の中の手の動き、南拳の動きなど、関節技として使っているが、型として伝わっているもので古いものはない。全く似たような型を探すのは無理だと思う。技をひろって、比較していくしかないと思う。

型名称の表記について

- 田名委員：「ナイハンチ」の漢字の当て方が違うように、資料の中で見出せばいいが、言葉だけ伝わって、どの漢字を当てればいいのか問題になるものがある。流派によって型の漢字の当て方が異なるのはどうなのか。
- 津波委員：首里手系はもともと漢字を使っていない。言い方として、発音で「ナイファンチ」は伝わってくるが、それを漢字で書くことはほとんどなく、そういった意味ではもう少し学問的に追及しなければ何とも言えない。
- 田名委員：ひらがなやカタカナ表記で伝来した言葉を誰が漢字を当てたかが問題が生じる。戦前の段階で漢字を当てたのではないか。
- 盧委員：沖縄で、型の名前など基本的に発音として伝わっており、ひらがな表記になってしまおうと思う。漢字が違くと、発音はまったく違うものとなる。

型名に数字が用いられていることについて

- 嘉手苺委員：剛柔流・上地流・首里手系の型には、数字がつくタイプや「歩」がつくタイプ、「手」がつくタイプがある。沖縄に伝わる中国拳法の型名は、数字又は数字プラスの「歩」であり、型名の後ろに「手」は一般的に付かない。個人的な見解では、沖縄空手の総称として「手」というのは近代以降、沖縄空手（琉球拳法）の萌芽が見られる段階で、型名が沖縄の中で整理されたり、付け加えられたりしてこの問題が生じたと思うが、どうか。
- 盧委員：中国拳法の型名では、「歩」がついたり、「手」がついたりする名称はある。1つの技法の単位として使用している。『沖縄伝武備志』の後半に記載がある。
- 津波委員：『武備志』の技法の説明で、「黒虎の手法にて五十四歩に應じる」という言葉がでてくるが、それをみると五十四歩という言葉は、古い言葉ではないかと思う。
- 盧委員：三十六・五十四（壹百零八の半分なので融通の効いているように感じるが）・七十二・壹百零八など数字は型名に多用されているが、首里手系のうち五十四歩は龍を表現した拳法に見られるのであって、中国拳法のような虎ではない。数字の出る拳法＝1つの拳種とは限らない。龍の手法と虎のそれは手の構え方の違いに他ならない。

『武備志』と『沖縄伝武備志』について

- 田名委員：『武備志』と、『沖縄伝武備志』の大きな違いは何か。
- 盧委員：『武備志』は兵法書である。これに対して『沖縄伝武備志』は、高宮城繁先生が「沖縄に伝わる武備志であるから」という理由で、その題名を一般化させた。いわゆる『沖縄伝武備志』は、1930年に筆写された比嘉世幸本に題名は空白であったが、1934年に摩文仁賢和が書き上げたものに初めて「武備誌」というタイトルがつけられた。
- 田名委員：中国のなんらかの拳法書を写したと考えてもいいのか。
- 盧委員：写したと言うより、分析を行っている。宮城長順本を見る限り、王という人物が語ったものを記録したと見た方がいいかと思う。ただし、摩文仁賢和本にはそのような記載がないので、別系統であると考えます。
- 宮城委員：『武備志』の中には、『孫子』より引用した箇所がある。ナポレオンは『孫子』を座右の銘として手元においたという逸話がある。武田信玄の風林火山も『孫子』から引用している。『孫子』は有名な書である。船越義珍の『琉球拳法唐手』の中にも、『孫子』の言葉を引用している。『沖縄伝武備志』は正式な『武備志』ではない。
- 盧委員：中国の武術書は思想の話になってくるかと思う。百回戦って百回勝っても最善ではない。戦わないことこそが、最高のもの、武徳である。

- 宮城委員：それは『孫子』の中にある「彼を知り己を知れば、百戦殆うからず」「戦わずして勝つ」と同じである。これが武徳である。
- 津波委員：武徳という用語自体は松村宗棍が既に用いている。
- 宮城委員：田名先生の発表、嘉手苺先生の空手古武道辞典中の文献、糸洲安恒「糸洲十訓」、船越義珍「空手二十カ条」、安里安恒あたりを改めて検証する必要がある。

貫手と拳について

- 文化部長：そろそろ時間となりますが、各委員の中で確認しておきたいことがありますか。報告の範囲内をお願いします。
- 盧委員：なぜ沖縄空手では正拳突きが多く取り入れられているのか。中国で型を鍛える時は、最後に指を鍛えるといわれている。ティージクン（正拳）が上手になってから指を用いてやれと記述されている。宮城長順先生が指鍛えから拳に変えたのも危険が伴うものは避けた意図があるのではないか。これは中国拳法でも同じことがいわれている。
- 津波委員：泉州の諺では拳頭、拍手、音楽は泉州人の娯楽とされている。
- 盧委員：「拳頭」などは武術の総称である。
- 嘉手苺委員：確かに貫手と、拳の違いというものは大きく残っているかと思うが、剛柔流に関してほとんどの型が整理されている。もともと「三戦(サンチン)」や他の技も、貫手であったと口碑で聞いたりするが、近代の体育武道としての考えが影響しているのではないかと思う。当初、糸洲安恒が空手を学校教育に導入する際、危険な技と貫手を変えていくようである。目的がかわってくることで、技法も変わってくるのではないかと思う。
- 宮城委員：「ナイハンチ（初段）」は古流の型と多和田真淳先生がおっしゃっていた。「ナイハンチ（初段）」は開掌であって、拳を握っていない。唐手は、糸洲安恒以後大きく変化してきた。

委員長総括

- 文化部長：ここで各委員の発表を踏まえまして、委員長による総括をいただきたいと思います。
- 宮城委員：田名委員は歴史家の立場から冊封使資料や家譜資料、近世空手関係諸資料から報告してもらった。盧委員は『沖縄伝武備志』の分析や沖縄空手の型名称（福建語、閩南語、北京語）の比較をおこなった。嘉手苺委員からは五祖拳や白鶴拳の礼法、初動、技法の展開等について映像を使って検証した。津波委員からは五祖拳、永春拳、首里手の立ち方・「ナイハンチ」の型・突き・蹴り・受け・呼吸法など色々報告してもらった。私は中国武術文献に関して報告した。

この調査は相手があることなので、一方的には進められない。相互理解の上で一つ一つ進めていく。「おもろさうし」の「うらそえ」の部分、発掘調査結果など大局的見地から古琉球の「手（ティー）」がどのように芽生えたのか、次年度に引き継ぎたい。

質疑応答

質疑 1

- 質問者 A：松村宗棍と師匠の佐久川は北京で習ったという記録がありますが、北京調査へは行かれたのか、またこれから行く予定はあるのでしょうか。
- 盧委員：北京へは行っていませんが、北京で習ったととらえるよりも、北の拳法、南の拳法というようにとらえた方がよいのでは。来年度は、北少林寺への調査も予定をしています。

質疑2

- 質問者A:古流の「ナイハンチ」は鍵突きが貫手になっていて、最後の諸手突きが掌底になっているのでしょうか。それ以外に違いはあるのでしょうか。
- 宮城委員:太極拳だけが認められていた38年前の武術禁止の時代、河南省で中国の武術家と演武の見せ合いをしていたが、古流の「ナイハンチ(初段)」は、開掌であったと言われている。

質疑3

- 質問者B:
 - ・空手の文献に関して、『球陽』の中に阿波根実基暗殺の件があるが、空手(くうしゅ)をもって股を引きさいて、蹴りを入れると記載がある。その時の文献も参考になるのではないか。
 - ・北京の方で佐久川寛賀が三回行き、最後の時は松村宗棍を連れて中国へ渡っているが、どんな拳法を学んだのか。
 - ・皇帝の護衛は、その当時の最高拳法家が護衛をする。時代によって変遷はあるが、八極拳、八卦掌等と交流はあったのか。文献上で明らかにできるか、調べていただきたい。
 - ・沖縄に『武備志』との関わりまったくみられないというわけではなく、本部朝勇先生が指導した上原清吉先生の本部御殿手の中に北派の拳法八卦掌と近い、技法とか動作とかでてくるので、調べてみる価値があるかと思う。
 - ・北と南の拳法とは全然違う。北の拳法はペルシャのイラン系統の技術がはいつてきている。体の使い方にしても、トルコやペルシャあたりの共通する動作が沢山はいつてきている。それと琉球の拳法との関わりも知りたい。
 - ・中国の朝貢使節はたくさん来るが、沖縄の首里手の人達は、「ナイハンチ」を空手の基礎として大事に伝えてきたのか、「ナイハンチ」に関しての詳しい調査を展開して欲しい。
- 田名委員:
 - ・『球陽』に出てくる「空手」は、拳法の空手と一緒にすることに慎重にした方がよい。漢文表記なので「からのて」つまり「素手」という意味の方が近いのではないか。検討の余地がある。
 - ・北京の話は、近世において北京で修行しているという記録はほとんどない。圧倒的に福建で勉強している。中国の北側の拳法を学んでいたとしても、どこで学んだかっていう問題になると、北京で学んだ可能性は限りなくゼロに近い。福建でそれなりの時間をかけて学んでいる。北京以外どこで学べるのか、南の地域にそういう人達がいたのか、そういうような話につながっていくのかと思います。



第3回調査検討委員会

(3) 平成26年度

①第1回調査検討委員会

日時：平成26年10月3日(金) 15時～17時

場所：浦添市役所行政棟7階702会議室

参加者：11名

委員4名(宮城篤正、津波 清、嘉手苺徹、盧 姜 威)

事務局 浦添市4名(下地安広、松川 章、渡久地政嗣、瑞慶覧長順)

スペースチャイナ3名(佐藤未雲、池宮一樹、村田さくら)

次 第：

一. 開会

- (1) 事務局あいさつ
- (2) 調査検討委員会設置要綱について
- (3) 委員長および副委員長の選任
- (4) 委員長あいさつ

二. 検討事項

- (1) 今年度業務について
- (2) 中国調査について
 - ①鄭州国際少林武術祭について
 - ②調査日程案の説明
 - ③調査方法の検討

三. 閉会

事務局あいさつ

配付資料：

- ・第1回調査検討委員会次第
- ・琉球空手のルーツを探る事業調査検討委員会設置要綱
- ・今年度の業務について
[別紙：中国調査日程案、中国調査参加者名簿、中国招聘者の名簿(シンポジウム)
平成25年度第3回調査検討委員会発表タイトル一覧]
- ・中国調査について(別紙：第九回武術祭競技日程、第九回・第十回論文報告会原稿規程)

議事：(○印は委員の発言、△印は事務局の発言)

一. 調査検討委員会設置要綱について

調査検討委員会委員より承認を得た。

二. 委員長および副委員長の選任について

委員の承諾をもって委員長に宮城篤正氏、副委員長に津波清氏が選任された。

三. 今年度の業務について

調査検討委員会委員より承認を得た。

四. 中国調査について

調査方法の検討について

- 津波委員：中国鄭州国際少林寺武術祭の競技項目について、特に空手との関係で興味がある演武は、剛柔流と関係のある黒虎拳である。あるいは、古い部類に入る太祖拳との関係が示唆される太祖長拳も目で見てみたい。南拳と少林拳以外の伝統項目、特に咏春拳と五祖拳を見られたら非常にいい。こういった古いものを見ることによって、空手との関係も研究出来るのではないかと思う。ところでこれら項目は競技項目なのか。
- 津波委員：現在の若者が使っているものは派手で、古い型とはだいぶ違うと思う。変化はしていると思うが、古い型をできれば見たい。
- 嘉手苺委員：競技演武はそれに相応しいものに変化する。それよりも、系統がはっきりして、古いものを見ることが可能かどうか。嵩山少林寺等で交流ができるなら系統のはっきりしている古いものを見たい。
- △事務局：武術祭の競技項目について、ABCDE と組が分かれており、A は 12 歳以下、B は 12 歳から 17 歳、C は 18 歳から 39 歳、D は 40 歳から 59 歳、そして E は 60 歳以上の方が競技を行います。
- 宮城委員：60 歳以上の演武だと古いものである可能性はある。
- 津波委員：項目の中に伝統少林拳とあるが、その中で、年齢の高い方の演武であれば古い形式のものが見られる可能性が高いと思う。
- 嘉手苺委員：今まで調査に行く度に、演武の系統がはっきりしないものばかりであった。誰に師事してどのような修行をしたのかが知りたい。
- 津波委員：競技項目をみたら、中国のかなり古い拳法が含まれている。梅花拳や太祖長拳、黒虎拳等は古い文献にも残っている。演武科目を見て、どこに重点をおいて見ていくのか、委員方で意見交換会ができれば一番いいと思う。
- 宮城委員：私もそこが気になっていたところではある。
- 津波委員：昨年度鄭州市での事前調整はどうだったか。何か見せてもらったか。
- 盧委員：観光客が見られない道場を見せてもらった。ただ、武術の僧侶がいるエリアまでは行けなかった。今回、嵩山少林寺内の武術の僧侶方と交流会ができれば一番いいと思う。
- 津波委員：嵩山少林寺内に博物館及び類似する施設はなかったか。できれば鍛練具等を見たい。
- 盧委員：武術祭等で単に演武を視察するだけでなく、演武後の交流の場があった方が色々聞けるのではないか。



第1回調査検討委員会

②第2回調査検討委員会

日時：平成26年11月12日（水） 17時～19時

場所：浦添市役所行政棟4階企画調整会議室

参加者：12名

委員5名（宮城篤正、津波 清、田名真之、嘉手苺徹、盧 姜 威）
事務局 浦添市4名（下地安広、松川 章、渡久地政嗣、瑞慶覧長順）
スペースチャイナ3名（佐藤未雲、池宮一樹、村田さくら）

次第：

- 一. 開会あいさつ
- 二. 中国調査の報告
- 三. シンポジウムについて
 - (1) シンポジウムの流れについて
 - (2) 各員発表テーマについて検討
 - (3) 中国泉州市への依頼事項について検討
 - (4) 浦添市側演武者について
- 四. 事務局連絡
- 五. 閉会あいさつ

配付資料：

- ・ 第2回調査検討委員会次第
- ・ 琉球空手のルーツを探る事業中国現地調査報告
- ・ シンポジウムタイムスケジュール案
- ・ 平成25年度第3回調査検討委員会発表タイトル
- ・ 中国招聘者名簿（シンポジウム）
- ・ シンポジウム参加者案
- ・ 発表資料等の提出スケジュール案

議事：（○印は委員の発言、△印は事務局の発言）

シンポジウムについて

シンポジウムの流れ等について

- 宮城委員：シンポジウムの流れについて各委員より意見をどうぞ。
- 津波委員：子ども達の演武披露を検討してもよいのではないか。
- △事務局：沖縄側の演武の中で子ども達と大人とを分けて構成する形はいかがでしょうか。
- 津波委員：それでもよい。
- 田名委員：討論の形式によってシンポジウムの所要時間が変わると思う。発表者のみの討論になるのか、それともフロアを含めた話になるのか。討論に翁先生も参加するなら演武はしないほうがよいのではないか。周先生は討論に参加しないで基調講演のみがよいかと思う。また、会場から質問をどう受けるのか、質問用紙を配布するのか等色々あると思う。
- 嘉手苺委員：周先生、翁先生に加え、沖縄側から発表を5つ行えば、討論する範囲が広がってしまい收拾がつかなくなると思う。
- 田名委員：討論の中身をどうするのかによる。討論の中で発表の補足をしてもらっただけでも、相当な時間を使ってしまう。討論を行うのであれば柱をつくる必要があると考える。

中国武術と沖縄空手について話をするのであれば、周先生と翁先生に意見を伺う形になると思う。

- 嘉手苺委員：討論の部分では、歴史的なことや技法的なこと等テーマを絞って行う方がよいのではないか。
- 津波委員：剛柔流・上地流が「サンチン」を基本とし、小林流が「ナイハンチ」を基本とするように、沖縄側でも流派によって基本となっているものが異なるため、中国の先生方には、討論の材料として両方の型を見てもらう必要がある。

各委員発表テーマについて検討

- 津波委員：私の発表内容として、南少林寺にとらわれない泉州と浦添との関係を、文化という側面から話をおこなう予定。そこから広げて日本との関係、それから中国との関係を対比しながら空手の話もできるのではと考えている。
- 盧委員：中国側の先生方の発表内容は決まっているのか。
- △事務局：次第にありますとおり、中国泉州市への依頼事項について検討していただきたいと思います。本日の検討結果を踏まえ、中国側と調整を行います。
まずは沖縄側と中国側の報告を受けて双方で討論をしていただき、その後フロアから質疑を受けるといった形はいかがでしょうか。
- 盧委員：フロアから質疑を受けるとなると時間が足りないので、事前にアンケートをとる方がよいと思う。
- 田名委員：それをやるには発表後に休憩をいれて、その間に質問用紙を回収し質問を選ぶ作業を行うことになる。基調講演の資料も配布するのか。
- △事務局：配布します。
- 津波委員：周先生には、南少林寺を含めた「泉州における武術の展開、歴史」というテーマでお願いしたい。
- 田名委員：周先生には、軍隊との関係についても発表していただければと思う。また、武官と武術との関係についても触れていただければありがたい。
- 津波委員：周先生には泉州を中心に話をしてもらおうので、翁先生には「五祖拳（の歴史）」について依頼してはどうか。先生も思うところがあるはずだ。



第2回調査検討委員会

③第3回調査検討委員会

日時：平成27年1月14日（水） 17時～19時30分

場所：浦添市役所行政棟6階601会議室

参加者：13名

委員5名（宮城篤正、津波 清、田名真之、嘉手苺徹、盧 姜 威）

事務局 浦添市4名（下地安広、松川 章、渡久地政嗣、瑞慶覧長順）

スペースチャイナ4名（佐藤未雲、児玉啓子、池宮一樹、村田さくら）

次第：

- 一. 開会あいさつ
- 二. シンポジウム資料の確認
 - (1) シンポジウムタイムスケジュール
 - (2) 演武型リスト
 - (3) 基調講演および研究発表資料
 - (4) 一般配布資料
- 三. 委員による検討
 - (1) 発表資料の概要説明（各委員）
 - (2) 意見交換
- 四. 事務局連絡
- 五. 閉会あいさつ

配付資料：

- ・第3回調査検討委員会次第
- ・シンポジウムタイムスケジュール案
- ・招聘者滞在日程表
- ・演武型リスト
- ・基調講演資料および各委員発表原稿（基調講演資料については、翻訳途中のため未完である。）
- ・一般配布資料案

議事：（○印は委員の発言、△印は事務局の発言、□印は浦添市の発言）

委員による検討について

発表資料の概要説明

（各委員による発表概要の説明）

意見交換

- 宮城委員：委員からシンポジウムで発表する内容の概要説明をしてもらったが、それについて各委員より意見はあるか。
- 嘉手苺委員：盧委員の話の中で、マキワラの突き方は指導を受けないときちんとできないとあったが、確認したい。
- 盧委員：真似て（自家流で）鍛えることはある。
- 嘉手苺委員：マキワラの突き方に型があるということではないのか。
- 盧委員：そうだ。ただし『南島雑話』の中の絵については疑問に思うことがある。
- 津波委員：盧委員の話と関連して、沖縄の首里那覇の士族階級がやっていた唐手の型については、田舎に伝わっていないと考えられる。しかし田舎から首里に文字や算術等を学びに来る人がいたので、その際に唐手を見ていた可能性がある。「型」自体はそうではないが、

マキワラを突くというような鍛練法も田舎に伝わっていたと思う。

「手（ティー）」は本来型を指しているのではなく、拳頭打を含めた鍛え方の事を指していると考え。その後型が伝わることで変容していったと思われる。

- 盧委員：士族階級が、武芸の嗜みで皆空手ができたかというところでもない。
- 嘉手苺委員：戦闘の際、武器の方が役に立つことは自明であるが、拳を使って戦闘する場合、鍛錬を通してでないと使えない。また鍛錬する場合「型」として武術化されている必要があると思う。
- 津波委員：『南島雑話』にあるような絵があることから、18世紀の近世末から近代には「型」として広く伝わっていると思う。
- 盧委員：「型」として広がったか否かは、空手をどう定義づけるか次第である。
- 田名委員：嘉手苺委員の話の中に、「サンチン」の型が中国から沖縄に来た際に変化したということがあったが、このことについて聞きたい。流派に関係あるのかどうか。
- 嘉手苺委員：少なくとも剛柔流の「サンチン」に関しては、宮城長順が学校体育に取り入れる際に変化させたと考え。しかし師の東恩納寛量が持ち込んだ「サンチン」の状況が不明である。
- 津波委員：先程の「パッサイ」でもあったが、すべてにおいて変化をしている。「松村パッサイ」、「泊パッサイ」、「糸洲パッサイ」等あり、祖型として「パッサイグワア」というものもある。色んな「パッサイ」があるが、獅子口の動きに共通部分がある。しかし中に含まれる技の構成は異なっている。これについては、沖縄の武人達が独自に発展させていったもので、各々の得意な技が型名になったと考えられる。
- 宮城委員：空手は「無形」なので、これだけを論じるのでは見えてこない部分がある。さかのぼって空手の状況を考えるには、当時の美術工芸等の状況を含めて総合的に考える必要がある。久米島の君南風の漆器に1500年代のものがあるが、当時漆器は1700年代の製作が常識だったから驚きだ。

文化というのは層をなすので、何回かの文化伝播を通して現在の空手を形成していくと考える。浦添関係のおもろには戦があったことを連想させるおもろがあり、また考古学資料等から推理すると、グスク時代には、武器と共に素手による戦闘術も存在していたと考える。
- 津波委員：時代設定は難しいが、日本文化の影響と、中国文化の影響が重なって空手が成熟したものになったと考える。
- 田名委員：古い時代の沖縄は保守的で、外国から学んだものはその通りに行っていたと考える。明治時代になるとそれが変わっていったと思われる。
- 宮城委員：田名委員がおっしゃったこと具体例として、壺屋の陶器の中に香炉があり、中国のものとそっくりな形につくる例がある。盧委員が例に取り上げていた「パッサイ」だが、浦添は獅子舞、綱引き、棒術、闘牛、角力(すもう)が盛んであった。角力(すもう)は日本では古代からあり、このような力比べは文明が発達すると、体系化して空手や相撲になったと考える。
- 津波委員：ここで結論を出す必要はないが、今回の空手のルーツを探るシンポジウムで深めていく必要がある。



第3回調査検討委員会

第3章 空手のルーツを探るシンポジウム

日時：平成27年1月25日（日）13時30分～17時

場所：浦添市てだこホール（小ホール）

第1節 プログラム

主催者あいさつ 池原 寛安（浦添市教育委員会教育長）

来賓あいさつ 松本 哲治（浦添市長）

第1部 演武

子ども達演武（沖縄空手道小林流大信館道場門下生） <※は指揮者>

・基本動作

喜多佐介 喜多風介 豊里拓巳 富山修吾 富山沙希 上野紗紀 知花奈空 交野 伍
知念 翼 上野孝一郎 小栗那琉 知花陸翔 大城 唯 箱田紗々菜※ 箱田千紘
亀石さくら 亀石有咲 銘苅尚一郎※ 砂川淳紀※ 砂川淳平 大城翔健 大城 陸
真栄城光志 平良志緒 下地優斗 荒木 陸 荒木 壘 富名腰恵斗 大田長尚 金城正矢※
仲宗根駿 仲宗根朱里 宮良安都 富山怜温 仲村 昊 仲村昊成 高木雄矢 高木誠矢
吉永陽飛 運天翔永 玉那覇侑誠 神山芽菜実 宮里政弥 宮里祐吏 宮里茉莉 銘苅優花
知花奏空 知花泰空

・普及型Ⅱ

喜多風介 富山修吾 富山沙希 上野紗紀 上野孝一郎 知花陸翔 箱田千紘 亀石有咲
砂川淳平 大城 陸※ 荒木 陸 荒木 壘 仲村昊成 運天翔永 玉那覇侑誠 宮里茉莉
知花奈空

・普及型Ⅰ

喜多佐介 大城翔健※ 真栄城光志 平良志緒 下地優斗 大田長尚 仲宗根朱里 富山怜温
仲村 昊 高木雄矢 高木誠矢 宮里祐吏 知花奏空

・ピンアン五段

豊里拓巳 小栗那琉 大城 唯 箱田紗々菜 亀石さくら 銘苅尚一郎 砂川淳紀 知花優花
知花奏空 富名腰恵斗 金城正矢 仲宗根駿※ 宮良安都 吉永陽飛 神山芽菜実 宮里政弥
交野 伍 知念 翼

中国・沖縄の演武

- | | | |
|----------------|--------|------------------|
| ・十字戦（ジュウジセン） | 周 焜 民 | （国際南少林五祖拳連誼總會主席） |
| ・罗汉三战（ラカンサンチン） | 常 定 | （中国泉州少林寺方丈） |
| ・久留頓破（クルルンファー） | 嘉手苅 徹 | （沖縄剛柔流空手道協会常任理事） |
| ・瑞华战（ズイカセン） | 徐 清 輝 | （中国泉州市武術協会副主席） |
| ・ナイファンチ初段 | 渡久山 盛要 | （浦添市空手道連盟理事） |
| | 大城 信子 | （沖縄県空手道連合会常任理事） |
| ・八分寸法（ハチブスンポウ） | 苏 瀛 汉 | （中国泉州市武術協会副主席） |
| ・三十六（サンサーリュウ） | 阿波根 昌義 | （浦添市空手道連盟理事） |
| ・大战（タイセン） | 姜 雄 雄 | （国際南少林五祖拳研究会副会長） |
| ・津堅砂掛の棍（エーク手） | 宮里 栄助 | （浦添市空手道連盟理事） |

第2部 研究発表

基調講演

周 焜 民（国際南少林五祖拳連誼總會主席）
「沖縄空手道と泉州南少林拳の源流に関する一考察」

中国側発表

翁 信 輝（中国集美大学体育学院大学院准教授）
「福建南拳の歴史と文化及び国内外伝播の研究 “五祖拳”、“南少林五祖鶴陽拳”、松濤館流”、“剛柔流”を例として」

沖縄側発表

宮城 篤正（元沖縄県立芸術大学学長）
「中国武術・琉球唐手（空手）文献概観」
津波 清（浦添市空手道連盟会長）
「首里手系空手と「中国少林武術」及び「白鶴拳・五祖拳」との比較」
田名 真之（沖縄国際大学総合文化学部教授）
「近世琉球の唐手」
嘉手苺 徹（早稲田大学大学院）
「剛柔流、上地流、五祖拳、白鶴拳の三戦を比較して」
盧 姜 威（沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員）
「沖縄空手の型名称の一考察」

討論

閉会あいさつ 下地 安広（浦添市教育委員会文化部長）

第2節 演武型紹介

（1）五祖拳 十字戦（ジュウジセン）【演武者：周 焜 民】

十字戦は、五祖拳の伝統的な型で、最も古く、世間に幅広く伝播した型である。構えがしっかりしており、身近になってから攻める攻撃と防衛が一体型になっている。技は簡潔で勢いが猛烈であることが特徴とされている。足の運びは十字となり、狭い範囲で行い、拳の打ち方は近距離でまっすぐであることから、十字戦と呼ばれている。

十字戦は、五祖拳の代表的な型のひとつである。

（2）五祖拳 罗汉三战（ラカンサンチン）【演武者：常 定】

罗汉三战は、五祖門の羅漢派の拳法となっている。名前の由来は拳の形からきている。その特徴は三回進んで三回後退する。狭い範囲で行い、呼吸のリズムがあり、陰と陽の力は剛柔両方備わっている基礎拳法である。

「三戦（サンチン）に始まり、三戦（サンチン）に終わる」という諺もあり、三戦（サンチン）は羅漢派拳法の“母”であるという説もある。

（3）剛柔流 久留頓破（クルルンファー）【演武者：嘉手苺 徹】

久留頓破は、開掌による受けと裏拳、蹴りと肘当ての同時技など、相手と接近した状態から急所を攻める技が多く含まれている。

また、後方からの羽交い締めに対するはずし技、頭部による攻撃、蹴りに対する相手の足取りから急所当てなど剛柔流独特の技も見られる。

(4) 五祖拳 瑞华战 (ズイカセン) 【演武者：徐 清 輝】

瑞华战は五祖拳の鶴拳である。泉州市の僧侶である仰华氏が泉州崇福寺（そうふくじ）の住職、妙月僧侶に伝えたものだとされている。

瑞华战は鶴の纏（まとい）足で、中宮踏み、タイミング良く前進して攻めることが瑞华战の特徴である。

(5) 小林流 ナイファンチ初段【演武者：渡久山 盛要 大城 信子】

ナイファンチの型は、首里手系を代表する鍛錬型である。初段から三段まであり、その中でも初段は古伝の型と言われている。

上地流や剛柔流の「三戦（サンチン）」と同様に、首里手系のすべての型の基になる鍛錬型である。

(6) 五祖拳・永春白鶴拳 八分寸法（ハチブスンポウ）【演武者：蘇 瀛 漢】

八分寸法は永春白鶴拳の最も基本の手法である。

名前は手を使い八つの動作を行う事から命名された。腰を軸に前後左右の動作を繰り返し、自然体で力とタイミングを合わせて行う。型には騎馬立ちの進退、回転、足の運び及び飛び上がる等あり、全体的に鶴をイメージした動きになる。

手の動きが多く、足の運びも軽やかで、体の振動は力を入れるタイミングとぴったりしたのが特徴とされている。丹田から気を運び、息をためながら吐き出す呼吸法には、一定のリズムがあり、動きには剛柔両方備わっている。永春白鶴拳の風格と特徴を堪能できる武術の一つである。

(7) 硬軟流（上地流系） 三十六（サンサーリュウ）【演武者：阿波根 昌義】

上地流を創始した上地完文氏が、明治40年代に伝えた南派少林拳の古伝の型と言われている。上地流系の高度な鍛錬型である。八方に敵がいると想定し、それらに相対する動きは変幻自在な妙理があり、円と直線が交錯する演武線は非常に華麗であり、踏込はとてもダイナミックである。

(8) 五祖拳 大战（タイセン）【演武者：姜 雄 雄】

大战は五祖門の拳母と呼ばれている基本の拳法である。“三战（サンチン）、平马战（ヘイバセン）、大套三战（ダイトウサンチン）、鶴战（ツルセン）、天地人战（テンチ ジンセン）”を包括したものである。特徴は、騎馬立ち、力の貯め方、噛みしめ方、粘り方、呼吸リズム及び各種はじき、震え、攻め、押し込み、体を揺らして背中や肩の内側から力をだすことにある。長く鍛錬すれば剛柔の力が上手くさせるようになり、骨格臓腑が開通され、真の体作りになる。大战は内外の鍛錬ができる伝統的な武術である。

(9) 古武道 津堅砂掛の棍（エーク手）【演武者：宮里 栄助】

津堅砂掛の棍は、沖繩のエークを使う古武術である。特徴は、左へ体をさばきながら、逆切りと続けざまに上段流し受け、また逆切りして、その姿勢のままエークの先で右回りに円を描きさらに逆切りを行う技もある。轉身してからの横切りもある。また、砂かけによる目つぶしの技もあり、それが型名となっている。



五祖拳
十字戦 (ジュウジセン)



五祖拳
罗汉三战 (ラカンサンチン)



剛柔流
久留頓破 (クルルンファー)



五祖拳
瑞华战（ズイカセン）



小林流
ナイファンチ初段



五祖拳・永春白鶴拳
八分寸法（ハチブスンボウ）



硬軟流（上地流系）
三十六（サンサーリュウ）



五祖拳
大战（タイセン）



古武道
津堅砂掛の棍（エーク手）

第3節 基調講演

沖縄空手道と泉州南少林拳の源流に関する一考察

周焜民（国際南少林五祖拳連誼総会主席）

中国と琉球の友好往来の歴史は長い。中琉貿易はかつて、明清時代に世界の貿易圏の中で一躍重要な位置を占めていた。泉州は洪武3年に市舶司を設置し、永楽3年には来遠驛を開設した。それは市舶司のもとにおかれて、使節団を接待し、ならびに泉州港は琉球とのみ通行することと規定した。それから化成8年、市舶司が福州に移動するまでの百年余りの間に、泉州市は中国と琉球の中樞拠点として重要な役割を果たした。琉球に渡った使節及び往来客が琉球の風土人文、地理物産、文字言語等を中国に伝えると同時に、中国の民族文化を幅広く琉球に伝えた。交流は、商業、農業、科学、宗教、文化、芸術、建築、医学など広い分野に及んでいる。琉球は中国の民俗・風習の影響を受け、礼儀を重んじる「守礼の邦」になった。

これらの分野に関しては、信憑性の高い研究結果も出ている。しかし、研究者は、武術分野に関する研究結果は出でおらず、我々は、地方歴史の資料を捜索しても、直接関連のある資料等は見つけられずにいる。いままでの歴史学者は、今日我々の生活に及んでいる中国武術と日本空手道の関係について、重視しなかったと思われる。

ここでは、限られた資料と現存する拳法を整理するとともに、いささか私見を述べてみる。

一

唐手は琉球に伝わった伝統ある古武術であり、その名称は、古くは中国より伝えられたことを表している。

いわゆる「手（ティー）」と言うのは、泉州では「技手」を指し、それは即ち沖縄の『武備志』の中の「機手」を指しており、いまに至るも変化はない。

昭和4年、慶応義塾は「唐手」を「空手」と改称し、その前の大正13年には「空手道」研究会を創設した。「空手」という言葉は早くも明治38年の『空手組手編』に見られる。

泉州では、武器を持たない拳法を「空手拳」と称しており、また「空拳」とも言うが、この呼称は琉球と同じである。

前世紀の70年代より、日本から数十回に亘り、空手道の団体と武術家が泉州を訪れ、空手道の源流を探る調査、および泉州の武術会と交流を行った。

1990年、筆者は空手道剛柔流正道館の湧川幸盛氏のご招請により、泉州武術代表団20名を引率して沖縄を訪問したが、その時は、浦添市役所のご招待による「泉州市青少年武術代表団」も一緒に沖縄に到着した。日中双方とも市民会館において演武大会を開催し、沖縄の各道場からは400名余りの方が参加して演武を披露し、更に空手道連盟会長の比嘉佑直氏も自ら模範演武をされた。

私たちが驚いたことは、沖縄武術家の演武による空手道、唐手の「那覇手、首里手、泊手」は、技手（ティー）、騎馬立ち、腰の入れ方、呼吸法から剛柔相容れる技、攻め技の運用に至るまで、泉州南少林拳の伝統拳と驚くほど似通っているところであった。

多くの拳技、たとえば、「挑、掀、擒、開、蓋、関、拳、標、插、抱摔、弾」等、足技は「踢、掃、蹬（弓）」等、馬勢（立ち方）は「戦馬、角馬、四平馬、踢馬、屈馬」等、それぞれ酷似している。

いくつかの「型」は、泉州の伝統的な型とよく似ている。中でも「三戦（サンチン）」は最も似通っており、それは全て「拳母」として、手始めの型となっている。

泉州南少林には多くの拳種があり、拳の習い始めはみな「三戦」を学ぶ。（三戦は泉州以外の土地に伝わり、「三正」とも言われるが、泉州方言では「三箭」とも書く。）いわゆる「教徒之法、以必三戦為先」（生徒に教えるには、必ず三戦を先に教える）である。

太祖拳、達尊拳、羅漢拳、行者拳、白鶴拳、花拳、玄女拳、龍尊拳、虎尊拳等にもそれぞれ「三戦」があり、「三戦始、学到死（「三戦」より始め、それを死ぬまで修練する）」と言われている。この伝統は数百年に渡り、現在に至るも変わらない。

上述した諸拳は、もとは同系で、それらは互いに影響しあっている。「三戦」は即ちおおもとの拳であり、また派生した拳種、或いは流派の源でもある故、類似点や似通ったところが甚だ多いのである。

たとえば、沖縄空手道の剛柔流は清末から、代々伝わってきたのである。空手は演武の際には裸足で舞台上上がるが、かつて泉州人が拳を使うとき、ズボンの裾をまくりあげ裸足で行った事は、今では知られなくなっている。これは「四点金落地」（訳注：両足指とかかとの4点がしっかりと地に着いて四角形を形成する）や「五子朝天」（訳注：足指は天に向いて、地面につけないこと）の記述により検証される。これらの感覚の認識に、両地域の拳術の源流としての手がかりが表れている。

1970年代より、沖縄の空手界の各氏が福建泉州、福州等の地を訪れ、源流の調査を行った。調査に訪れた者の中には東京、大阪の武術家もいた。例えば、大西栄三、仲本政博、湧川幸盛、渡嘉敷唯賢、金城昭夫、宮城篤正らの諸氏は幾度も往来して調査を行っている。

感動的なことに、沖縄の剛柔流は幾度も中国へのルーツを訪ねる旅を行い、その結果、1989年9月に福州市で東恩納寛量の開宗の師を探し当てた。1852年に長楽県占郷岱辺村に生れた謝崇祥（如如）の跡地を尋ね当て確認し、そして福建体育センターにその「顕彰碑」を建立し記念とした。そのときに伝承されたのは鶴拳で、流派は鳴鶴拳に属している。

それ以前に、上地流も福建省武術協会と協力して調査を行った。その結果、1897年、上地完文氏が福州南嶼柴日村の虎尊拳の師である周子和の門下に於いて武芸を習い、帰国後に上地流空手道を創設したことを明らかにした。よって、上地流の源流と系譜ははっきりしている。この両種の拳は、みな福建南少林拳の系列であり、鶴拳は泉州府永春県で生まれている。

二

鶴拳、すなわち白鶴拳は永春拳とも称され、福州・閩北・閩東に伝わったのち、「鳴・食・宿・飛・縦」等の各流派に分かれた。剛柔流は、既に福州鳴鶴拳が源流であることを探り出しており、それによって、二百年余り前の清の康熙年間に、方七娘が鶴拳を創設したころにまで源流をさかのぼることができる。

方七娘は一説によると浙江省麗水の人で、また一説では福建省寧府の人であると言われている。康熙年間に父の方掌公（方慧石）に連れられて、永春に辿り着き、鶴の動きを拳にとり入れ、その地で拳を伝えた。

これは当時、南少林拳が盛んだったことから多くの人が集まっていた泉州に於いて、多くの使い手に採用され、個性的で鮮明な新しい動きとして風格が形成された。新しい拳種が現れるや、それは急速に広まることとなった。雍正13年、永春県は直隸州として昇格し、その地位は高まったものの、土地が狭く人の少ない貧窮した農村では決して変化は起こらなかった。県外に出て発展の活路を求める農民は数多く、後に「無永不開埠、無永不成市」（永「春」が無ければ、永「久」に商

業の埠頭（港）が開設されることはなく、永「春」が無ければ「永」久に市場が成立することはないの諺がでるほどだった。

その中で、拳の達人となった拳師は広く四方（東西南北）を漫遊し、自ずと永春拳の名声が広まることとなった。古くから伝わる「伝拳譜」によると、方七娘は28人の弟子に教え、彼らは才能を発揮し、皆拳の使い手となり「英俊」と称され、また前後して「五虎」も現れた。これら門下生は「精拳法、風声所播、一時趨赴衆徒者、蓋踵相接（拳術に精通し、名声が伝わる所となり、当時は喜んでこれに従い師事しようとする者が踵を接するほど圧倒的に多かった）」と言われた。

その伝承者の足跡は、近くは永春付近の村邑（村々）・泉州府の街から、遠くは閩の「上四府」にまで及んだ。省都の福州は人家が密集し、最も人間が集中していたため、足跡はさらに江西・浙江・広東にまで及び、拳を広めることとなった。

「曾四・辜喜・王打興・鄭礼・鄭寵・葉晋溪・鄭碧・鄭桶」等は永春白鶴拳を受け継ぎ伝え、その功績は偉大なものであった。特に鄭礼の足跡が最も広く、名声も最も高いものであった。『拳藝世傳序』には“彼にこれを学ぶものは「殊難盡筆」・「傳流世世」（殊に筆に尽くしがたく、拳は何世代にもわたって伝わった）。”とある。

1990年泉州武術代表団を結成して沖縄を訪問した際に同行した福州の余宝炎氏は謝崇祥（如如）の継承者で、筆者と懇談した。余氏は、鶴拳が永春より福州地域に伝わったという歴史的経緯について熟知しておられるばかりか、その際に「鶴拳が福州に伝わったのち一派が五派に分かれた」と言われ、「鳴鶴はすなわちその一つである」と明確に指摘された。

拳術にはその伝統的な安定性と閉鎖性があるが、必ずその伝播した地域の固有の文化の制約と影響を受け、また、学ぶ者の創造性によっても変化が生じ、互いに相生するという偶然性を備えている。光緒年間に活躍した謝崇祥（如如）の継承者潘嶼八の永春白鶴拳は、剛柔と呼吸法において骨身を惜しまず鍛錬を続け、新たな流派を生み出した。その氣息吞吐の運氣法は、鶴の鳴くがごとくであり、それを鳴鶴拳と名付けた。これは新たな創造であり、伝統からの突破である。

福州地域の「飛・鳴・食・宿・縦」の五鶴を除き、その他の地域では、さらに長技鶴・短技鶴・独脚鶴が出現した。また広東では「永春鶴」と「咏春拳」を区別している。

しかし、拳種には決して質の変化はなく、根底をなすものはやはり永春鶴拳である。剛柔流泊会の渡嘉敷唯賢氏は、数代にわたって伝わっている謝崇祥（如如）の鳴鶴拳譜『武備志』の写本を保存しており、その内容・構成・文字は閩南地域に伝わっている古い拳譜と完全に一致している。

拳史・拳理・拳術・転び打つ処方・銅人・子午流注十二時辰部位（体の中心線をまっすぐに保つ）・「六機（技）手」・「七不打」などは、『白鶴拳家正法』・『桃源拳術』・『白鶴仙師祖傳真法』・『白蓮寺秘傳鶴法』・『少林寺跌打秘書』・『白鶴祖藥方』・『白鶴仙正宗』などの古書の中で検証することができる。

たとえば『白鶴拳論』では、方七娘を先師として尊敬し、方七娘が拳を創ったことを描写しているが、物語のあらすじは各書とも同じである。：「かつて四叔より十分に拳法を学んだ」、「永春の諸家に伝授し、これをおおもととなす」、これが最も原文に沿っている。：拳法を論じて解脱の方法とあわせ、「手（技）を出すときは息をはき、手を変えるときは息を吸う」、「内節（上腕）は鉄の如く、外節（下腕）は綿のごとし」、「直破横、横能理直、柔宜剛取、剛則柔迎、進退虚実、吞吐浮沈、（まっすぐに出して横を破り、横は直を整えることができ、柔はよく剛を取りやすく、剛はよく柔を迎えうち、進退は虚と実を使い分け、氣息の吞吐には浮沈がある）」、「一步一步は根が生えたようにしっかり立ち、いかに押ししても動かない」、「散人力頭、接人力尾（人を散らすのに相手が力を及ぼさない（十分準備してない）先にしかけ、相手が力を使った後を受ける）」などの言葉がある。

これはみな泉州南少林でよく耳にする決まり文句であり、多くは明代の都督であった泉州人の俞大猷の著わした『劍経』より引用したものだ。

これより『武備志』は、もともと泉州永春の古譜だったものを、ただ整理してまとめたものであると推定できる。

三

また当然注意すべき事は、『武備志』の中に「論羅漢拳法」と羅漢拳の型である頭匡、二匡、三匡、四匡が納められていることである。鶴拳譜にどうして羅漢拳が入っているのだろうか？多くの人は意外に思うかもしれないし、あるいは紛れ込んだと思うだろう。実はそうではなく、泉州ではよく見受けられることで、「兼ねて学び、兼ねて通じる（同時にいくつも学ぶ）」という武術界において通常みられる現象である。

泉州南少林拳の拳種は多く、1980年代に武術の発掘整理した時のものが、まだ20種あまりも残っている。これらの拳種は異なる流派に属しているものの、多くは陽剛（明確な力強さ）の美に富み、氣息の吞吐浮沈・剛柔がそなわり、短打に長じ、実戦に優れて、拳風・技手・椿馬（立ち方）は似通っている。また身体運用、勁力の入れ方、氣息の運用も似ていて、双方を組み込んでそれを蓄積してきた可能性がある。

自らの武芸を豊かにするために、武術を修練する者はよく数種の拳法を兼ねて学んだ。少ないものは2・3種、多いものは4・5種も学び、これが長い時間をかけて定着していった。

五拳の一門である五祖拳は、白鶴拳ができた後に形成されたものだ。古い拳譜には先師の神位牌がある。ある譜にはただ「太祖・達尊・羅漢」のみ書かれており、またある拳譜では「一太祖・二達尊・三羅漢・四行者・五白鶴」と書かれている。さらにそれに「玄女」と書き入れている拳譜もあり、その発展の道筋を明らかにしている。その拳は、昔は人によっては取り入れられた事もあったが、けして多くはなかった。白鶴拳ができてからは、遂にそれを正式に五拳の中に取り入れるようになった。

要するに、『武備志』の原作者は、鶴拳と羅漢拳に通じていたということは疑いのないことであろう。しかも、相当の心得があり、羅漢拳を譜に書き写し整理する際に、異なる解釈をされるのを危惧し、敢えて始めの部分に「羅漢とはまた鶴なり」と書いたのであろう。

同時に、譜を持つ者は決して両拳をまとめて一つとしていたのではなく、併存させていた事が分かる。ひとつでは無く二つの拳であり、この譜には羅漢拳の頭匡から四匡まで記載されている。

泉州の『五祖拳譜』には羅漢派の頭節、二節、三節、四節、五節の五つの型が収録されており、由来があることが見て取れる。少なくとも清より民国を経て現在に至り、羅漢拳のこのグループは簡単な型から複雑な型までである。既に変化がみられるが、依然として異なる地域の人々の武術修練の中にはっきりと残っている。

更に推測して『武備志』をみると、これは選択して譜を書き取っている。一般的に考えると、東恩納寛量は謝崇祥（如如）に羅漢拳を学んだ後にこれを書き写したと思われる。その練功（修練）方法と技の内容は、当然彼の創設した剛柔流空手道の中にも融合されただろう。王岳登は「羅漢はまた鶴拳である」というが、現在では（朱と紫が互いに埋もれているような）はっきりしない状態である。また空手道のいくらかの型と手も区別が難しく、それは鶴拳であり、羅漢拳では無いとは言い難い。

これで五祖門の中の太祖拳と、空手道の関係も更に推測できる。太祖拳は五祖門の中で歴史がもっとも古い拳種であり、北宋の時代にまでさかのぼることができる。それは宋の太祖が命名し、明清から民国に至るまで泉州で最も盛んに行われ、泉州府の武術修練者の8～90パーセントが太祖拳派であった。

『紀効新書』によると「宋の太祖は三十二勢の長拳がある」とある。

『北拳彙編』では、「少林派はまた外家と称され、趙匡胤は元祖である。趙匡胤には凄技があり、秘匿して人には見せなかったが、酔った勢いで群臣にその奥義のうんちくを語った。彼はこれを悔やん

で、食べ物も喉を通らず語らなくなり、遂にその書を少林寺の神壇（神棚）の中に安置した。その（拳）法は硬攻直進に優れている。」とある。

現存する泉州太祖拳は、まさに「硬攻直進」がその風格の特徴である。泉州の太祖拳は趙匡胤を祖師として奉っており、その源には根拠がある。

南宋の高宗の初め、南に移り泉州の外宗正司となり、それが管轄する皇族の大部分が宋太祖の直系の子孫で、多い時は数千人にもものぼり、「昨今では十万の民が満ち、これが当時の龍種人（中国人）だ」と称された。それら皇族の伝えた太祖拳は、次第に民間にも流布し、数百年も衰えることがなかった。

目にするのできる鶴拳の古譜でも知ることができるが、鶴拳は太祖拳の基礎の上に発展してきた。方七娘の出身地が、浙江の南であろうと、はたまた福建福寧府であろうと、そこでは皆少林太祖拳が盛んであった。

『白鶴拳家正法』によると、七娘は「齡十六になると、少林拳の技を好んだ」とある。『白鶴仙正宗』は「方七娘は方賞（掌）祖師が太祖拳を鍛錬している際に…こっそりそれを見て習得した。」としている。清末明初の著名な五祖拳の師である乾（干）徳源の『五肢拳法』には、「太祖より何世代にも渡って伝わり白鶴が教えられ、今も残っている」とある。

現在でも白鶴拳の故郷永春では、依然としてある流派の中で力強い風格のある鶴拳を太祖派と称しているものがあり、鶴拳の発展過程の中で太祖拳はその基となっている。さらには「太祖化鶴拳」と言う流派が表れ、台湾で流行している。これより白鶴拳の中に太祖拳の要素を見ることができ、また空手道の剛柔流に対する影響も推測することができる。

沖縄剛柔流空手道保存会会長の湧川幸盛氏は、これまで何度も泉州少林拳の調査を行い、『泉州太祖拳と沖縄空手道』という論文を書かれた。文中で次のように書いている。「私はかつて泉州の崇福寺で若い僧侶たちが伝統的な太祖拳を演武するのを目にした。あの素朴で重厚な拳の突き、腰の力のいれかた等、沖縄空手道に存在するものと共通点が多いことにとっても驚いた。」

彼は著名な拳師である故蘇再福の『太祖拳譜』『太祖二十四勢簡述』を研究し、かつ演武を見たうえで、次のように述べている。「太祖拳の固守待進、後発制人（守りを固めて進む準備をし、後発して人を制す）は、沖縄空手道の基本的な考え方と共通点があり、これはおそらく空手道と泉州の南拳の根源に通じる証拠のひとつである。」

湧川氏の出した結論は、「沖縄・泉州両地の拳法を相互に比較してみると、以前はあまり十分に理解できなかった問題点或いは思いつかなかった事柄も、容易に解決した。」としている。

四

沖縄空手道あるいは「唐手」のルーツが、清の中ごろかあるいは晩期に留まるとすれば、長い歴史的な空白がある。多くの研究者は明の洪武29年に「閩人三十六姓」の三千戸余りの人が琉球に赴き、進貢事業を導き、武術の伝播に関係したとしている。しかし、ある研究者はこれに疑問を呈している。一つには確実な証拠がないこと、二つには琉球の「手」の形成年代には遠すぎることを挙げている。

筆者は、琉球の「手」自体の時代を区分するのは難しいと考えているが、「卜宅於久米村而居之」（久米に居を構えて住んだ）三十六姓・三千余の戸数は二、三百年の歴史では、ただ「敷文教（教育を広め）」、「通海事（海の道に通じ交易を行う）」のみであったらう。

茅元儀の『武備志』巻十四「海防」の記載では、「海の道を諳んじ、舟を上手に操って闘えるものは、みな漳州・泉州・福州・寧波の人で…船主・喇哈（海の道を整理する人）・かじ取りなどを輩出した。」とある。

三十六姓の中で、多くは泉州沿海の港出身の「上手に舟を操り闘える者」が選ばれた。彼らは武芸に優れ、海外の交通（航路）に熟知したものであった。当時琉球と明朝の関係は密接であり、頻繁

に来朝し、時には一年に数回も進貢した。

航海の途中、略奪や暴動は常に発生し、故に往来の際は大量の武器の装備と護衛が必要であった。泉州の武進士陳瑞芳、官閩安都司は、冊封使を護衛し、海上で海賊200名をとらえた。軍備の甲冑軍械（戦闘道具）を携えて行ったのだが、陳瑞芳は時を経て琉球で亡くなった。

三十六姓の筆頭である蔡氏の祖先は、泉州南安県の出身で、文武両道相備わった信望の厚い一族で、唐榮蔡氏の家譜には、「最推重望、英才接踵（最も推されて重用され、英才を次々輩出した）」、「掌中国往来貢典（中国往来の進貢儀式を取り仕切った）」とある。

日本のメディア報道によると、当の蔡氏一族には同じく三十六姓の鄭氏とともに蔡家拳と鄭家拳の二種類が伝わっているようだ。

そして、南安の蔡氏と南少林武術の伝播には重要な関係がある。嘉慶年間に蔡永兼の撰による『西山雜誌』では蔡延廣が少林派の武功を授けられ伝えたとされている。蔡氏一族は南明の鄭氏政権下で60人余の人が侯に封じられ、將軍の身分を授かり、その影響は泉南にまで及んだ。また「棄文航海、拓海興田（学問を修めて官僚になる道を捨て航海に従事し、海を畑のように開拓した＝海に生きた）」とされ、蔡騫は「ある寺で僧侶から武芸を学び、青い海原に飛躍し航海をした」とある。

蔡家拳、鄭家拳はどこからやってきて、現在まで続いているのか、検討する価値は大いにある。明清の冊封使節が琉球に出発する際は、各種の人員から武術の達人に至るまで、自ら選ぶことが許された。

使節の臣下及び従客や丁役も、琉球に在留している期間は、その地の各階層の人々と交流し、中華民族の文化、武芸を含めそれらを伝えることは、彼らの使命であり、また当然のことでもあった。

故に『日本空手道秘訣』では、沖縄の空手道が始まったのは明代の初めと考えるのである。「答礼使者自京城出、中国拳法遂跟着傳入。（答礼使節団は北京を出発し、海を渡って琉球に到着し、中国拳法もそれにしたがって伝わった。）」と述べている。

最も古い空手道文献『大島筆記』では、支那公相君（クーサンクー）に関するものがあるが、弟子をたくさん連れて沖縄に行き、一種の拳法を伝えたと述べている。

明代の成化15年、琉球もまた人を派遣してもっぱら福建、台湾などに行き、少林拳法を学んだ。これらの事例は数々あり、長きにわたっている。詳しくは語られてないが、資料は十分に検証できる。

筆者が明代における中琉即ち拳術交流の歴史を排除しない理由は、やはりその頃、中国武術の発展の成熟期であったからである。宋代の泉州人曾公亮の編纂した『武経總要』をうけて、明代の泉州俞大猷は『続武経總要』を編纂した。彼はまた、中国の棍鉞の精華を集め、拳法の理論をまとめた『劍経』を67巻出版した。『劍経』は中国最初の武術専門書であり、卓越した論述を行っている。

たとえば「剛在他力前、柔承他力後（人が力の準備ができてない前に剛の拳を出す、人が力を出した後に柔らかく受ける）」、「後人発、先人至（人が技を出した後に技を出す、人より先に至る）」、「乗他旧力略過、新力未発（人が力を出しきってそれがわずかに過ぎたすきに、まだ新しい力を出さないうちに）」、「致人而不致於人（人に当たるに人に害を及ばさない）」がある。これはいまに至るも南北各派の拳の流派が経典として奉っており、上述した太祖拳、白鶴拳、羅漢拳もけして例外ではなく、その影響は空手道にまで及んでいる。

沖縄空手道と泉州南少林拳の源流を、もしも一つの時代に求めようとするならば、十分な歴史的背景の資料と人文的な要素を基礎として考察するべきだと筆者は考える。

2014年12月20日於泉州

冲绳空手道与泉州南少林拳术渊源管窥

周焜民（国际南少林五祖拳联谊总会主席）

中国与琉球的友好交往历史，源远流长。中琉贸易在明清时期曾一度跃居世界贸易圈的重要位置。泉州于洪武三年置市舶司，永乐三年设来远驿，隶市舶司，接待贡使，并被规定泉州港只通琉球。及至化成八年市舶司迁福州的一百多年间，泉州一直处于中琉交往中的关键位置。奉使琉球的使臣和从客，将琉球的风土人情、地理物产、语言文字等介绍给中国人民，也广泛传播了中华民族文化。交流包括商业、农业、科学、宗教、文化、艺术、建筑、医学诸多领域，甚至影响到民风民俗，使琉球“易而为衣冠礼仪之乡”。这些方面已有很多令人信服的研究成果，但是，研究者在武术方面啬于笔墨，而我们在地方史料的搜剔也未找到直接的记载。当时的史学家似乎忽略了当今广泛进入人类生活领域的中国武术和日本空手道之间的联系。本文试就有限的资料及现存拳术作一点比较梳理，以为他山之石。

一

唐手是琉球流传有序的古武术，它的名称说明古代传之中国。所谓的“手”，在泉州拳术中指“技手”，也即冲绳《武备志》中的“机手”，至今犹然。昭和四年庆应义塾将“唐手”改称为“空手”，此前大正十三年他们曾创立“空手拳”研究会。“空手”一词最早见于《空手组手编》，时在明治三十八年。泉州称不持器械的拳套曰“空手拳”，亦叫“空拳”，与琉球同。自上世纪七十年代起，日本有数十次空手道团体与武术家访问泉州，作空手道源流调查，并与泉州武术界交流。1990年，应空手道刚柔正道馆涌川幸盛先生邀请，笔者率泉州武术代表团20人访问冲绳，同时到达的还有应浦添市政府邀请的泉州青少年武术代表团。日中于市民会馆举行演武大会，冲绳各道场四百余人出场表演，空手道联盟会长比嘉佑直先生还亲作示范。我们惊喜地发现，冲绳武术家表演的空手道、唐手包括那霸手、首里手、泊手，从技手、脚马、身腰法、吞吐气到刚柔相生、技击运用等，与泉州南少林传统拳术有惊人的相似之处。很多拳术技手如挑、掀、擒、开、盖、关、拳、标、插、抱摔、弹等，腿法如踢、扫、蹬（弓）等，马势如战马、角马、四平马、蹋马、屈马等，彼此十分肖似。一些“型”，与泉州的传统套路似曾相识。其中如《三战》最相近，皆为“拳母”与开手套路。泉州南少林很多拳种，学拳伊始，都是教习《三战》（传至外地，或叫“三正”，或以泉音写作“三箭”）。所谓“教徒之法，必以三战为先”，太祖拳、达尊拳、罗汉拳、行者拳、白鹤拳、花拳、玄女拳、龙尊拳、虎尊拳等各有《三战》，而且都有拳谚“三战始，学到死”。这一传统历数百年，至今未变。上述诸拳，本属同系，互有渊源，《三战》既是本门拳母，也是派生拳种或流派拳母，故相同相近之处甚多。冲绳空手道如刚柔流从确切的年代（清末）起，也一直是这样一代一代传承下来的。空手道表演时赤脚上场，殊不知泉州人打拳，过去也是卷裤管赤脚，并以此来检验是“四点金落地”还是“五子朝天”。这些感性的认知显露出两地拳术渊源的端倪。

从上世纪七十年代起，就有冲绳的空手界人士到福建泉州、福州等地寻根探源，探源者包括东京、大坂等地的武术家，如大西荣三、仲本政博、涌川幸盛、渡嘉敷唯贤、金城昭夫、宫城笃正等先生都是多次往返考察。尤其令人感动的是冲绳刚柔流十多次的中国寻根之旅，其结果是1989年9月在福州找到东恩纳宽量的开宗拳师、1852年出生于长乐县占乡岱边村的谢宗祥（如如）的踪迹，并予确认，在福建体育中心树立“显彰碑”以表纪念。所传为鹤拳，派属鸣鹤。在此之前，上地流在福建省武术协会配合调查下，查实1897年上地完翁拜在福州南屿芝日村虎尊拳师周子和门下学艺，归国后创立上地流空手道，其源流谱系清晰可稽。这两种拳，都属福建南少林拳系，而鹤拳，则诞生自泉州府永春县。

二

鹤拳，即白鹤拳，又称永春拳，传至福州、闽北、闽东后衍生出鸣、食、宿、飞、纵等流派。刚柔流既探源至福州鸣鹤拳，然则历史可更上溯二百多年至清康熙时代方七娘创立的鹤拳。方七娘一说为浙江丽水人，一说为福建福宁府人氏，康熙年间随父方掌公流徙永春，化鹤入拳，并于辜厝传拳。这在当时被视为南少林拳术渊藪的泉州，是采纳众长，风格个性鲜明的新举动。新拳种一出现，就得到迅速

传播。雍正十三年，擢永春为直隶州，地位上升，但地少人稠的贫穷农耕状况并未改变，外出求取发展的农民成千上万，以至后来有“无永不开埠，无永不成市”之谚。其中，有拳术一技之长的拳师“广游四方”，永春拳声名鹊起。据旧传拳谱记载，方七娘教有二十八人，皆成材，世称“英俊”，以后又有前后“五虎”，这些门生，“精拳法，风声所播，一时趋赴乐从者，盖踵相接”。其传人足迹，则近而永春附邑、泉州府城，远而闽之“上四府”，省垣福州人烟辐辏，最为集中，且及于江西、浙江、广东。曾四、辜喜、王打兴、郑礼、郑宠、叶晋溪、郑碧、郑桶等等传播永春白鹤拳承上启下，功莫大焉，而以郑礼行踪最广，名气最大，《拳艺世传序》谓从而学之者“殊难尽笔”、“传流世世”。

1990年与泉州武术代表团访问冲绳的福州余宝炎先生，为谢宗祥（如如）派下传人，在与笔者交谈中，不但对鹤拳自永春传至福州地区的历史甚为熟悉，而且明确指出鹤拳传至福州后，“一分为五”，鸣鹤即其一。拳术有其传统的稳定性和封闭性，但必定要受到传播地域固有文化的制约和影响，并因从学者的创造性而变异，具有相生相成的偶然性。活跃在光绪年间的谢宗祥（如如）继承潘屿八的永春鹤拳，在刚柔和吐纳上淬砺熔铸出新流派，以吞吐运气声如鹤鸣，名之鸣鹤拳，就是创新对传统的突破。除福州地区的“飞、鸣、食、宿、纵”五鹤而外，其他地方还出现长技鹤、短技鹤、独脚鹤等，广东则有“永春拳”与“咏春拳”之分。但是拳种并无质的变化，根蒂还是永春鹤拳。刚泊会渡嘉敷唯贤先生保存有流传数代、抄自谢宗祥（如如）的鸣鹤拳谱《武备志》，其内容、结构、文字与闽南地区流传的古拳谱完全一样。拳史、拳理、拳术、跌打验方、铜人、子午流注十二时辰部位、“六机（技）手”、“七不打”等在《白鹤拳家正法》、《桃源拳术》、《白鹤仙师祖传真法》、《白莲寺秘传鹤法》、《少林寺跌打秘书》、《白鹤祖药方》、《白鹤仙正宗》等古籍中都可得到验证。如“白鹤拳论”，尊方七娘为先师，描述七娘造拳，情节同于各本；评价“曾四叔学得十分拳法”，“归永春传授诸家，惟王为最”，最贴近原文；谈拳法、交接解脱之法，“手出则气呼、手转则气吸”、“内节如铁、外节如棉”、“直可破横，横能理直，柔宜刚取，刚则柔迎，进退虚实，吞吐浮沉”、“步步生根，任推不动”、“散人力头、接人力尾”等语，皆是泉州南少林耳熟能详的圭臬，且甚多自明都督泉州人俞大猷所著《剑经》衍化而来。可以推定，《武备志》本为泉州永春的古谱，只是经过了整理归纳。

三

还应引起注意的是《武备志》收入“论罗汉拳法”和罗汉拳套路头匡、二匡、三匡、四匡。鹤拳谱怎么会收入罗汉拳呢？许多人感到意外，或认为是竄入。其实不然，在泉州这是一种常见的兼学兼通的武坛现象。泉州南少林拳系拳种众多，上世纪八十年代在武术挖掘整理时尚存二十多种，这些拳种虽属于不同门派，但多富阳刚之美，讲究吞吐沉浮、刚柔相济，尚短打，利实战，拳风相近，技手相似，桩马相仿，身法、行劲、运气相同，兼容并蓄成为可能。为丰富自身武艺，习武者常兼习数种拳法，少者二、三种，多者四、五种，约定而俗成。一门五拳的五祖拳就是在白鹤拳生成后形成的。古谱刊有先师神位牌，有的谱只见“太祖、达尊、罗汉”，有的则是“一太祖、二达尊、三罗汉、四行者、五白鹤”，有的还列有“玄女”，显示其发展脉络，在昔随人所取，并无多寡之嫌，白鹤拳创立后，遂趋于五拳兼纳。要之，《武备志》的原作者，兼通鹤拳与罗汉拳应无疑义，而且很有心得，在抄录整理罗汉拳入谱时，为恐引起其他解读，还特意在开头就写明：“罗汉者亦鹤也”。同时，也看出持谱者并不是糅合两拳为一，而是共存之。无独有偶，此谱载录罗汉拳头匡至四匡，而泉州《五祖拳谱》则收录罗汉派头节、二节、三节、四节、五节五个套路，可见由来有自，起码自清经民国至今，罗汉拳的这组由浅入繁的套路仍然鲜活地存在于不同地区人们的演练中，虽然已有变化。作进一步推测，鉴于《武备志》是有选择性地抄谱，按一般情理，东恩纳宽量必是向谢宗祥（如如）同时学习了罗汉拳而后作此抄录的。其练功方法和技术内容应该也融汇在他创立的刚柔流空手道中。王岳登说罗汉亦鹤，实际上现在朱紫互湮，也很难区分空手道中的一些型和手，是鹤而非罗汉。

由此更推想到五祖门中的太祖拳与空手道的关系。太祖拳是五祖门中历史最悠久的拳种，追溯至北宋，以宋太祖命名，明清至民国于泉州最盛，府城习武者百分之八九十都是太祖派。明戚继光《纪效新书》谓“宋太祖有三十二势长拳”。《北拳汇编》记载：“少林派亦称外家，赵匡胤其开山始祖也。匡胤挟有奇技，秘而不示人，醉后尝与群臣言其奥蕴，寻悔之，又不欲食言，卒置其书于少林寺神坛中。其法以硬攻直进为上乘。”现存泉州太祖拳法正是以“硬攻直进”为风格特征。泉州太祖拳奉赵匡胤

为祖师，其源可稽。南宋高宗之初，移南外宗正司于泉州，所辖皇族都是宋太祖的直系后代，蕃盛时达数千人，有“满城都是龙种人”之称。皇族所传太祖拳，遂入民间，数百年不废。就经眼的鹤拳古谱可知，鹤拳是在太祖拳基础上发展起来的。方七娘的出身地，无论指浙南，抑或福建福宁府，都盛行少林太祖拳。《白鹤拳家正法》载：七娘“年登十六，好少林拳艺”，《白鹤仙正宗》则称“方赏（掌）老师祖亦习太祖拳也……七娘暗看而习之。”清末民初著名五祖拳师干德源的《五肢拳法》也说，“自太祖流传世代，继后白鹤教传遗今”。至今白鹤拳的故乡永春，仍有某派风格刚韧的鹤拳被指为太祖派者，而鹤拳在发展过程中，还出现过一支“太祖化鹤”，流传于台湾，从中可窥见白鹤拳中的太祖拳基因，因而也可推知对空手道刚柔流的影响。

冲绳刚柔流空手道保存会会长涌川幸盛先生曾经多次考察过泉州南少林拳术，撰写了《泉州太祖拳与冲绳空手道》一文。文中说：“我曾在泉州崇福寺亲眼目睹了该寺年轻僧侣们表演的传统太祖拳，那种质朴、厚重的拳术，撞和腰的用力方法等等，与冲绳空手道存在的共同点多令我十分惊讶。”他研究了已故著名拳师苏再福的《太祖拳谱》关于“太祖廿四势简述”并观摩表演，认为太祖拳固守待进、后发制人，“冲绳空手道基本上与此思路相同”，“这也许是空手道与泉州南拳源出一脉的证据之一”。涌川幸盛先生得出结论：“通过冲绳、泉州两地拳法的互相比较，以前不能充分理解的问题或意识不到之处，马上能迎刃而解。”

四

冲绳空手道或者说“唐手”的探源如果仅止于清中晚期，那么将出现很长历史时间的空白。有不少研究者都提到明洪武二十九年“闽人三十六姓”三千余户赴琉球导引进贡事，并联系到武术的传播。但也有研究者对此提出质疑，一是无确切证据，二是认为与琉球“手”的形成年代相去甚远。笔者认为琉球“手”本身就很难断代，不便据此推定“卜宅于久米村而居之”的三十六姓、三千余户在二、三百年间只是“敷文教”、“通海事”而已。茅元仪的《武备志》卷十四“海防”记载，当时福建“谙水道，操舟善斗，皆漳泉福宁人……船主、喇哈、舵公皆出焉”。三十六姓中有不少选自泉州沿海港口“操舟善斗”者，也即武艺精熟又通晓洋面水道的人。当时琉球和明朝关系密切，频频来朝，有时一年数贡。途次劫掠骚扰，经常发生，故往返皆须大量武装护卫。泉州武进士陈瑞芳，官闽安都司，护送册封使，即选巡洋缉匪兵丁二百名，随带盔甲军械，陈后病卒于琉球。三十六姓之首的蔡氏，其祖本出泉州南安县文武兼备的望族，唐荣蔡氏族谱记载“最推重望，英才接踵”，“掌中国往来贡典”。据日本媒体报道，该蔡族与同为三十六性的郑氏，现存有蔡家拳与郑家拳两种流传。而南安的蔡氏与南少林武术传播有重要关系，嘉庆间蔡永兼撰《西山杂志》称蔡延赓授传少林派武功，蔡氏一族在南明郑氏政权封侯拜将六十余人，影响及于泉南；又“弃文航海，拓海兴田”，蔡騫“从一片寺僧性空学武，飞跃于碧波千航之中”。蔡家拳、郑家拳从何而来，且能延续至今，很值得研究。明清册封使出使琉球，允许自选各色人员包括勇武之士，使臣及从客、丁役在琉球期间，与各界人士交往，传播中华民族文化包括传授武技，既是使命，亦在必然。故《日本空手道秘诀》认为冲绳空手道可能始于明代的原因，便是“答礼使者自京城出，渡海到琉球，中国拳法遂跟着传入”。最早的空手道文献《大岛笔记》还有关于支那公相君者，带领弟子多人渡海来冲绳，传授了一种拳法的称述。明成化十五年，琉球也曾派人专程到福建、台湾等学习少林拳法。凡此种种，涉及渊源，虽然语焉不详，但都足资考研。笔者之所以不排除明代中琉即有拳术交流的历史，还在于那一时期是中国武术发展的成熟期。继宋代泉州曾公亮编撰《武经总要》，明代泉州俞大猷又编撰《续武经总要》，并汇集中国棍钗精华，总结拳术理论，写成《剑经》出版。《剑经》是中国第一部武术专著，其精辟论述，如“刚在他力前，柔承他力后”、“后人发，先人至”、“乘他旧力略过，新力未发”、“致人而不致于人”等等，至今为南北各派拳门奉为经典，上述太祖拳、白鹤拳、罗汉拳概莫能外，影响及于空手道。冲绳空手道和泉州南少林拳术的渊源如果追寻到这一时代，是有充分的历史背景资料和人文因素为基础的。

2014年12月20日于泉州

第4節 研究発表（論文）

福建南拳の歴史と文化及び国内外伝播の研究 “五祖拳”、“南少林五祖鶴陽拳”、“松濤館流”、“剛柔流”を例として

翁 信 輝（中国集美大学体育学院大学院准教授）

一. 福建南拳について

（一）福建南拳の定義

福建南拳は、主に「戦派」を中心とする南少林武術である。

福建南拳は「戦派」と非戦派に区別され、さらに「戦派」は、三戦（サンチン）を中心とする流派とそうでない流派に分かれている。

（二）福建南拳の歴史源流

中国武術自体、もともと兵家が生み出したものである。その中で福建南拳における歴史源流の要素としては、大きく4つに分けられる。

まず1つ目に、福建の歴史（文化）は、百越文化を基軸とし、中原文化の伝播による影響によって形成されていることである。

2つ目に、元代から明代に発生した倭寇戦争の中で、兵家との交流がおこなわれ、福建南拳は生まれたということである。福建南拳の発生に影響を与えた型として、『紀効新書』に河南少林寺での「俞家棍」という流派の記載が残されている。これらの型は、倭寇戦争の勝利に貢献した俞大猷によって伝えられている。

3つ目は「反清復明」の後の歴史・事件に伴うもので、これを機に福建南拳が急速に広まった。

4つ目は民俗や民芸に伴って伝播したものである。これに関して中国武術の文献に記載がみられるのは宋～明代である。たとえば、泉州の「高甲戯」、唐代からの歴史を持つ舞踊「戈甲戯」である。獅舞は地域によって3つに分かれる。北京は金色の獅子、広東は白い獅子、福建は青い獅子である。青い獅子は「反清復明」を表して、清の軍隊と戦うことを意味する。そして、福建の獅舞は「劊獅陣」または「宋江陣」という。

宋代、「皇権不下県」の支配体制により、県以下は権力統治の外にあった。県以下は、村単位で「宗族」および民団で統治しており、その小さい単位で武術が発達・保存されていた。

空手の型の中に「チントー」という型があって、中国の行政区分である村の民団・「獅陣」の陣（チン）に発音の源流があると考えられる。もともと福建省の村々には「宋江陣」という組織があった。武術だけではなく、獅子舞など民俗芸能の担い手でもあり、お祭りなどで活躍する。その頭（かしら）となる人物が演武する型は「チントー（陣頭）」と言う。

「チントー」の型は特定の型ではなくて、その「陣頭が得意とする型」という意味である。実は五祖拳の中にも「朕頭（チントー）」という型がある。源流をたどっていけば、空手の「チントー」もどこかで「陣頭」につながってくるかも知れない。

（三）福建南拳の歴史形成

福建南少林拳の歴史形成の明確な記録として『海島逸志』（1806年出版）《武乞氏》がある。この文献にはインドネシアに関連する記録がある。オランダに攻められた際に、この島の人兄弟になった。また、船の航海で海賊に襲われたが、奪われたものを取り返してもらった。そのお

礼としてこの民族にその品物を差し上げたという話がある。この民族について、武術の先生を招いて、10歳以上の子どもに太祖拳、羅漢拳、鶴拳、猿拳を教えてもらっていたと記録があった。

「反清復明」運動の中で活躍したのは鄭成功である。鄭氏は厦門島と金門島を拠点としており、彼の元に武術の英雄が数多く集まった。当時福建省にいた人の多くが、新政府である清朝と戦ったが、その際、武術も発達したと推測できる。

清末から民国初期にかけて勢力が広がった義和団や、「小刀会」が福建南拳の発展に関係ある。

現代において中国武術は競技武術に特化している。日本のある研究者は現代の中国武術をみて、日本空手にみられるような伝統的な要素はないとしているが、これは誤解である。

1958年、中国では競技武術としての南拳を制定するため北京から国家武術協会チームが福建に派遣された。しかし当時、厦門と金門島間で戦争が勃発しており、チームは途中で広東省に派遣先を変更した。そのため、現代中国武術の競技南拳の基準を広東南拳とし、さらに競技にふさわしい現代風に変化した。そのため福建南拳は古い要素を保持し、空手と類似した風格となっている。

(四) 福建南拳の特徴

中国武術は「南拳北腿」といわれている。その中で福建南拳の特徴として3つあげられる。

まず1つ目は三戦（サンチン）である。三戦は「三戦にはじまり、三戦におわる、三戦練って死に至る」といわれている。

2つ目は、福建南拳は内家拳であり、つまり「後発制人」である。その特徴が生み出された理由として、地理関係や住んでいる人の体格等が挙げられる。南拳は、北拳に見られる飛び出したり大きな動作をしないことも特徴である。

3つ目は歴史関係である。また4つ目は文化関係である。

二. “五祖拳”、“南少林五祖鶴陽拳”の歴史と文化

(一) “五祖拳”、“南少林五祖鶴陽拳”の誤解と学術の区分

現在、福建南拳に関する研究はさかんである。福建南拳の代表的である五祖拳は、一般的に「太祖拳」「達尊拳」「羅漢拳」「猿拳」「鶴拳」に細分される。

現在普及している五祖拳は、南少林五祖鶴陽拳というカテゴリーにはまると個人的に考えている。現在の五祖拳は、古い要素が抜け落ちている。古い技術・文化を色濃く残しているカテゴリーとして南少林五祖鶴陽拳がある。

沖縄の「唐手」は古い福建南拳、つまり「太祖拳」「達尊拳」「羅漢拳」「鶴拳」の影響を受けている。

(二) “五祖拳”、“南少林五祖鶴陽拳”の歴史

- 1、“五祖拳”の歴史 “五祖拳”は、太祖拳、達尊拳、羅漢拳、猿拳、白鶴拳という
- 2、“南少林五祖鶴陽拳”の歴史
- 3、“南少林五祖鶴陽拳”の歴史伝承と形成

(三) “五祖拳”、“南少林五祖鶴陽拳”の文化（技術文化として）

- 1、“南少林五祖鶴陽拳”の風格特徴
- 2、技術体系 1) 功法 2) 拳套 3) 中醫骨傷科

三、福建南拳の国内外への伝播研究（国内外共同研究の希望）

（一）国内（河南省、広東省、湖南省など）の伝播

明代に河南省に伝播した「兪家棍」を兪大猷が伝えた。これは、もともと兵隊を訓練させるものである。

広東省には詠春拳があり、明から清代、民国に広がった。

詠春拳は伝播時には拳名がなかった。拳師の出身地から名称付けた。地元の人はこの名称を使っていない。

早稲田大学に在籍している馬晟氏は、湖南省の「巫家拳」等武術は福建省から伝播したとしている。

（二）国際的な伝播

1、東南アジア（インドネシア 1806 年『海島逸志』の記録：太祖、羅漢、猴、鶴）

インドネシアには4つの種類の福建南拳が伝播している。

2、琉球唐手

14世紀頃、琉球王国の古い時代に中華文化、宗教、武術が中国から伝播している。その中で「閩人三十六姓」が、武術を習得して琉球王国へ持ってきたと推測できるものが琉球唐手である。

3、“南少林五祖鶴陽拳”の伝播

南少林五祖鶴陽拳の団体「南少林五祖拳联谊总会」は、現在40カ国が加盟している。

四、福建南拳と琉球唐手の伝承

1、“小林流”、“松濤館流”について

“小林流”、“松濤館流”のそれぞれの型のルーツが判明している。たとえば、抜塞（ハツサイ）の型は太祖拳、鉄騎（ナイハンチ）は達尊拳、慈恩（ジオン）は羅漢拳、観空（クーサンクー）は冊封使がもってきたということである。

観空は大きい動作で、北拳の動作に近い。

2、“剛柔流”について

剛柔流は福建南拳の鶴拳が基本。いくつかの型には羅漢拳の要素も見られる。セーパイ、サンセーリュウなどがある。

3、“上地流”について

上地流は福建南拳虎尊拳が基本となっている。

五、まとめ

このようなシンポジウムは、はじめての試みであろう。これを機に幅を広げて、沖縄と福建との共同研究を始めていけたらと考える。また、空手の研究に関する、国際研究チームの発足できたらと考える。

そして「空手（クーデー）」もしくは琉球「唐手（トーデー）」の考え方に戻って、世界文化遺産の登録を進めてほしいと願います。

中国武術・琉球唐手（空手）文献概観

宮城 篤正（元沖縄県立芸術大学学長）

序 章

筆者が中国武術に関連して調査交流した事項を時系列的に示す。
（ただし武術以外の調査、視察等は省略した。）

1 「沖縄県各界代表友好訪中団」に参加する。

昭和 50 年（1975 年）7 月 野島副知事（顧問）比嘉佑直（団長）文化関係（島袋光裕、伊差川新、外間正幸、宮城篤正）他各界代表
当時は武術禁止の時代であった。また、嵩山少林寺も開放されていなかった。

2 浦添市史編さん「中国進貢使路の旅」（宮城団長）

昭和 56 年（1981 年）5 月

- ・比嘉昇浦添市長のメッセージ（日本文、中国文）持参
 - ・調査訪問先のコース（広州－福州－泉州－杭州－上海－蘇州－鎮江－南京－北京）
- ※『報告書』『写真集』があり、内容は省略する。

3 中日武術交流団（宮城団長）

武術交流団長 湧川幸盛氏

- ①平成 2 年（1990 年）5 月泉州市、福州市で交流演武大会開催（※演武大会リーフレット参照）
 - ②同年 8 月泉州市、福州市から武術家を招いて「日中武術交流大会」を開催（※演武大会カタログ参照）
- ※①・②共に新聞報道記事あり

4 琉球空手のルーツを探る事業

中国福建省泉州市へ調査研究武術交流団（宮城団長）
平成 25 年（2013 年）10 月（調査交流訪問先等省略）
※浦添市・泉州市友好都市締結 25 周年式典にも参加

5 琉球空手のルーツを探る事業

中国河南省鄭州市へ調査研究武術交流団（宮城団長）
①第 10 回中国鄭州国際武術祭視察
②登封県嵩山少林寺の調査・武術交流（宮城団長）
平成 26 年（2014 年）10 月 18 日～22 日（4 泊 5 日）
③「空手のルーツを探るシンポジウム」で発表ならびにコーディネーターを務める。
平成 27 年 1 月 25 日 浦添市てだこホール（小ホール）

一. 中国の兵法・武術関係文献

中国の長い歴史の中で絶えずくりかえされた幾多の戦争、そのたびに滅び起こった国々がある。

紀元前5世紀頃から前3世紀の戦国時代に代表される諸子百家、多くの思想家を輩出する。その中で兵法書も多く書かれた。

古典的、代表的なものとして『孫子』『呉子』^{うつりょうし}『尉繚子』^{りえいこうもんたい}『三略』^{りくとう}『司馬法』^{りくとう}『李衛公問対』^{りくとう}『六韜』を総称して武経七書という。

とりわけ『孫子』『呉子』はヨーロッパや日本の武将達にも大きな影響を与えたとされる。例えば徳川期の『孫子』の注訳者には山鹿素行、荻生徂徠、吉田松等が知られる。

※注 [中国の思想 10 『孫子・呉子・尉繚子・六韜・三略』 訳者村山孚 徳間書店 昭和40年参照]

二. 『紀効新書』に就いて

原本は未見であるが、手元に中国で復刻された『紀効新書』（人民体育出版社発行）や江戸時代に和刻本として刊行された『^{さんてい}刪定紀効新書』六冊揃、^{みずのとい}文久癸亥（1863年）版、また『和刻本明清資料集』第1集から第6集 [内第3集から第6集が武備志（1 - 4）古典研究会 汲古書院 昭和59年復刊発行等からその内容を知ることが出来る。なかでも、江戸時代に発行された『刪定紀効新書』は希覯本であり、研究者にとっては垂涎の書といえよう。

『紀効新書』全18巻の著者戚繼光 [？ - 1587（万暦15）年] は、明代北虜南倭の防禦に活躍した武将。字は元敬、諡は武毅。登州衛（山東）の指揮僉事の家生まれ（後略）（『東洋史辞典』京都大学文学部東洋史研究室編 創元社 昭和36年初版参照）

前述した中国で復刻された本の中では、特に巻第10 長兵短用説篇から巻第11 藤牌総説篇が空手関係者には有効であるとして、古くから研究されてきた。また、日本では江戸時代に発行された『刪定紀効新書』全6冊 弘化乙巳（注記1845年）、筆者手元には文久癸亥春補刻（注記1863年）版6冊本がある。版元はいずれも大村五教館蔵版とある。

1冊目には序、檄文、目録凡例、教習次第があり、その後紀効新書巻之一、巻之二までの内容となっている。

2冊目には巻之三、（手足篇）巻之四手足篇第四短器長用解、藤牌、腰刀製、長刀製、倭夷習法（和文）猿飛 猿回（云々）、鋭鉞製、狼筈製、長鎗製、末尾に渡邊敬輔是保訂正江戸門人中山晦三精校、江戸門人中山晦三精校、紀効新書巻之四終とある。

（注記）実はこの2冊目だけ東恩納文庫に所蔵されていたのを、今から37前年のある日、当時職員であった画家の具志堅以徳氏（故人）が私に教示、またそのコピーを許可して下さった。（手元のコピーの年月日を見ると昭和52年3月11日コピーするとのメモ書きがある）

この2冊目と次の3冊目が日本でも空手研究者が広く活用している資料である。

3冊目の内容は紀効新書巻之五から始まる。手足篇第五 大棒製の図解があり次に大棒解の説明、習法（總訣歌、解、總歩目解）の説明文、続いて二人による図解習法 [扁身中欄勢、大當勢（以下略す）] がある。

（注記）『松涛館五十年のあゆみ』 [昭和63年発行] には指導部長高木丈太郎「監修にあたって」廣西元信「棍」についての解説のあとに『刪定紀効新書三』から前述した手足篇第五の大棒製、大棒解、習法の図解が収録されている。ただし図解の分解説明は一切ない。）

続いて拳法解と図解（懶扎衣、金、鶏獨立など全部で32勢）がある。（注記）『松涛館再建十周年記念論文集』昭和60年発行に収録されている。まず内扉の題字『刪定紀効新書』全六巻の写真その下に戚繼光の略歴、次頁に戚繼光・紀効新書関連年表、次頁から拳法解、図解（32勢）、奥付を収録している。

更に次頁には拳法解の和訳文、図に付された説明文の和訳文がある。

なお、他に大塚忠彦著『中国、琉球武芸志』（ベースボールマガジン社 1998年発行）には「宋太祖三十二勢長拳分解」和訳文、また二人の人物による動作で技の解明を試みている[同書(p56-119)]。更に第五編三十二勢長拳と「琉球伝武備志」四十八図対比分解(p121-253)もあるが一応ここではふれない。

また、『刪定紀効新書』4冊目から6冊目に就いてはすべて割愛した。

三. 『武備志』に就いて

筆者は、中国で刊行され茅元儀の『武備志』に就いては、未だに現物を実見する機会に恵まれていない。したがって、今回は『和刻本明清資料集』（古典研究会、昭和49年 汲古書院発行）第三巻から第六巻に二四〇巻が収録された資料をもとに記述する。

長澤規矩也氏の解題を参照すると、冒頭に「明茅元儀撰鵜[飼信之]（石齋）點、寛文四年（1664年）中野氏覆明刊本大100冊」とある。解題の文章は[昔から「文事有る者は必ず武備有り」と言はれているが、近時朝臣は宴樂に耽って武事を棄て、そのため北虜南倭を防ぐことができず（後略）]から始めている。

『武備志』は、天啓辛酉夏日防風茅元儀撰（明天啓1 西暦1621年）に刊行されている。内容は兵訣評18巻、戦略考33巻、陣練制41巻、軍資乘55巻、占度戴93巻の全240巻から成る。しかも、その中には日本国や西洋兵器の図解説があるのも珍らしく、兵書でありながら明清資料としての価値があると述べている。

長澤氏の解題では、著者元儀の生没についてはふれてなく、元儀の字（あぎな）は止生 歸安の人。古文作家茅坤（鹿門）の孫、茅國縉の子、明末翰林院待詔を経て、孫承宗の軍務に携わり、副總兵官として（後略）と説明している。（注記）本事業の調査委員盧姜威氏は諸橋轍次編『大漢和辞典』（大修館）から元儀の生没年は（1594-1644年）と明らかにしている。

茅元儀の『武備志』には先行する戚繼光の『紀効新書』の中に棒法や拳法、劍、鎗、牌などが転載されている事は既に指摘されていることである。

和刻本をもとにして具体例をあげると、『紀効新書』巻之五 手足編第五の大棒解と図解は『武備志』では拳とあり、二十五頁から三十四頁はすべて転載である。

手元の資料だけで比較するのは早計で他に多くの異本もあろうし、また中国出版と和刻本では図解の入れ替えがある。また細かい事をいえば人物の描き方やクツや髪など黒く塗ってあったり、ヒゲがあったり、なかったり相違点もみられる。

四. 『沖繩伝武備志』に就いて

戦前における先行研究は先学の著作に散見されるが、なかでも、摩文仁賢和著『攻防自在・空手拳法十八の研究』（昭和9年 空手研究社興武館発行）の後半に、附録武備誌を掲載してあることが特筆される。同資料は、摩文仁の恩師糸洲先生が支那の武備誌という拳法の書籍より写されたものを（云々）と説明している。

六氣手（昭林流）から図と説明（漢文）から始まり、孫武子云で終わっている。（P83-176）同書には「兵法の實の道 宮本武蔵（『五輪之（ママ）書』地の巻より）（P14-））が埋めくさとして掲載されている。摩文仁の出版以前には、富名腰義珍著『琉球拳法唐手』（大正11年（1922年） 武俠社発行）にも附録として『沖繩伝武備志』の中にある拳之大要八句、古法大剛論章、孫武子云、解脱法（拳闘術）が収録されている。

沖縄には、宮城長順が所有していた武備志を、弟子の比嘉世幸が昭和5年頃筆写した資料がある。

宮城長順本は戦争で紛失(?)したと思われるが幸い、比嘉世幸本は戦災を免がれ、戦後更に弟子の福地清幸が筆写した資料も現存している。剛泊会長渡嘉敷唯賢氏は、師の福地から『武備志』を譲り受け、それをもとに何度となく中国福建省へ調査研究におもむいた。福建省武術協会をはじめ、武術家の協力のもと20年余の調査研究の成果をまとめた本が『沖縄空手秘伝武備志新釈』(平成7年発行)である。現代語訳と技法の研究はまさに画期的であると評価されている。

次に特筆すべき研究成果は、盧姜威氏の「『沖縄伝武備志』の研究—沖縄空手との関わりを中心に—」である。彼は2005年度沖縄県立芸術大学大学院において波照間永吉教授指導のもと、比較芸術学専攻修士論文「沖縄伝武備志の研究」を発表後更に地道な調査研究を続け、2011年3月18日に、見事博士論文の審査をパスして博士号(芸術学)の学位を授与された。学位論文はA4版194頁、それに巻末資料143頁に及ぶ大冊である。論文は五章より構成され、各章毎に多面的(学術的)に研究成果が盛り込まれている。したがって、現在盧氏の論文によって『沖縄伝武備志』研究の水準はかなり高くなったといえよう。と同時に、本調査事業にもタイムリーで有効な研究成果であることを付言しておく。

過去に、中国との武術交流並びに空手のルーツを解明することに、とりわけ熱心に取り組んで来た主な空手家を挙げる。仲本政博氏、金城昭夫氏、東恩納盛男氏、渡嘉敷唯賢氏等がいる。また、その成果は下記の出版物の通りであるが、内容説明は省略する。

まず、仲本氏の『中国・沖縄空手古武道の源流』(1985年発行)。金城氏の『空手伝真録』[平成11年(1991年)発行]渡嘉敷氏は前述した武備志新釈の他に『中国武術調査新聞掲載論文集』[平成21年(2009年)発行]更に『中国福建武術友好交流と南少林寺(福清、莆田、泉州)』[平成22年(2010年)発行]東恩納氏は『剛柔流空手道史』[平成13年(2001年)発行。]

次に沖縄空手・古武道関係史料に就いて述べる。この件に関して、本事業調査委員である嘉手苺徹氏が既刊『沖縄空手古武道事典』[柏書房(株)、2008年発行]の第4編資料編「沖縄空手古武道関係史料」を執筆している。(同書P662-681)その中の「1、空手の原点を探る—近世以前の古史料」の項が本調査事業には有益である。

五. 沖縄・浦添関係文献再考

伊波普猷の「深く掘れ己(など)の胸中の泉 餘所たよて水や汲まぬごとに」の色紙(印刷物)が手元にある。裏には「この伊波普猷先生直筆の琉歌はニーチェの箴言「汝の立つ所を深く掘れ、其處には泉あり」を翻案したもので、比嘉春潮氏蔵『古琉球』再版(大正5年刊)の自序の末尾に書き込まれています。伊波普猷生誕百年記念会(沖縄)の説明シールが貼り付けてある。伊波に就いて説明するまでもなく、「おもろと沖縄学の父 伊波普猷」と称えられている偉大な沖縄研究学者である。浦添城跡の一角に伊波普猷(1876-1947年)の墓と顕彰碑(1961年8月建立)がある。

伊波の初期の論文「浦添考」[明治38年稿「琉球新報」所載、(昭和17年7月改稿)]があり『伊波普猷全集』第1巻平凡社昭和49年初版に収録されている。同論文は古くは伊波の代表的著作『古琉球』[明治44年発行、沖縄公論社(沖縄)]に掲載されている。その後、何回となく版を重ね、まさに沖縄研究者の必読の書といえる。「浦添考」には「明の天啓年間に編集した[おもろ双紙]にうらおそいとあり、後に縮まってうらそいとなり、遂に浦添の二字であらわされるようになった。(以下略す)」また、おもろを多く引用して論説している。例えば「糸ぞのいくさもい/月のかずあすびたち/ともゝとわかてだはやせ/いぢへきいくさもい/夏はしげちもる/冬は御酒もる」(15-18)とか「糸ぞ糸ぞのいしぐすく/あまみきよよがたくだるぐすく/糸ぞ糸ぞのかなぐすく」(15-15)。

英祖は舜天王統三代義本王の摂政をつとめていたが、糸ぞのいしぐすく（伊祖城）に居たといわれる。その城はアマミキヨが築いた城で、その古さがしのばれる。伊波はおもろに謡われた伊祖城は近隣を威圧していたと想像をめぐらせ、「義本王から位を譲られたのではなく、武力を以って舜天王統を威圧したのではないかと疑はれる」とも書いている。古琉球において、武力闘争がいかに多かったかという事が前提にある。各地の按司達は勢力拡大の為に常に戦っていたことは歴史書に書かれている。

なお『伊波普猷全集』第5巻[平凡社 昭和49年発行]に「古琉球の武備を考察して[からて]の発達に及ぶ」、同全集第7巻[平凡社 昭和50年発行]に「琉球史上に於ける武力と魔術との考察、護佐丸に就いての疑問より出発して」が収録されており、研究者にはよく知られた論文である。

他に東恩納寛惇や末吉安恭等は、富名腰義珍著『琉球拳法唐手』[大正11年刊]にカラ手に関する内容の序文を書きカラ手は支那伝来であり、慶長以後の事と考える。更には二つの禁武政策後の発達だとする。

仲原善忠は『大島筆記』や『大琉球航海記』など「文献に現れた空手」と題する論文を書いている。仲原も18世紀半から中国から沖縄に伝えられたとしている。

歴史学者はいずれも近世に中国から伝来したものと考察している。

『浦添市史』第二巻には、「浦添王統」物語や浦添関係おもろ、浦添関係古文献等が収録されている。おもろを執筆担当した池宮正治氏は、概説の中で「おもろは概して言えば祭式歌謡である（中略）歴史上の人物を讃美し、かつて経験した戦闘を歌っている（以下略）。」

前述の伊波普猷も古琉球のおもろにはかぶとやよろい、弓、鉾、鎗等いろいろの武器・武具が登場することを述べている。

六. 「聞え浦添」で素手による武術が発達

琉球（沖縄）の歴史書には浦添の地で最初の王権が確立されたといわれる。その浦添王統には舜天王（1187 - 1237年）と英祖王（1260 - 1299年）、察度王（1350 - 1395年）の三王統による政治、経済、文化の中心地として200年あまり栄え、特に察度王は1372年中国明へ使節を派遣、公的な外交関係、貿易関係を開始した。

古琉球時代各地域に按司がいて、常に武力闘争が行なわれたが、その中で最初に王権誕生の地浦添には武備が整えられていたと推察する。

浦添の時代を考察するには、浦添関係おもろや考古学的発掘資料、歴史的背景などから推理すると、王都「聞え浦添・鳴響む浦添」には兵士達による武器術と共に素手による闘争術（武術）が存在していたと考察する。

琉球空手のルーツを探る事業 シンポジウム

中国武術・唐手（空手）文献概観



浦添城跡からの眺望（2014年11月撮影）

2015年1月25日

発表者 宮城篤正



⑦ 『孫子・呉子・尉繚子・六韜・三略』
徳間書店 昭和40年発行

⑧ 『孫子』 訳者代表 村山孚
経営思想研究会 昭和38年発行（9版）

中国で出版された拳法関係書籍（その一部）
出版地（北京・台湾・香港 他）





◀ (明) 戚繼光著『紀効新書』
人民体育出版社 1988年発行

和刻本『刪定紀効新書』全六冊
大村五教館蔵版
文久癸亥春補刻



『武備志』
古典研究会『和刻本明清資料集』全六冊
(うち『武備志』は第3集から第6集)
汲古書院 昭和49年発行



◀ 『武備志 (誌)』 (いわゆる『沖繩伝武備志』)
比嘉世幸本
(1973年コピーする)

沖縄伝武備志並びに研究書 (その一部)



1



2



3



4



浦添ようどれ 尚寧王陵(左) 英祖王陵(右)
(2014年11月撮影)



伊波普猷霊園 (2014年11月撮影)



『大島筆記』全巻(復刻合冊本)
琉球史料研究会 (1958年~1959年発行)



永春白鶴拳館展示資料 (2013年10月撮影)



浦添市史 (全8冊) 1981年～1990年発行



少林禪寺 (拓本)

首里手系空手と「中国少林武術」及び「白鶴拳・五祖拳」との比較

津波 清（浦添市空手道連盟会長）

一. 中国武術との出会い

私が最初に中国武術と交流する機会を得たのは1984年である。那覇市と中国福州市が1981年(昭和56年)5月20日那覇市と福州市の友好都市締結がなされ、そのよしみもあり、1984年(昭和59年)10月27日「中国・沖縄交流武術大会」が那覇市民会館大ホールで開催された。私はこの大会に「沖縄伝統古武道保存会(文武館)」の一員として参加する機会を得たのである。

以後1996年(平成8年)7月26日に開催された那覇市制施行75周年・福州市友好都市締結15周年記念事業「中国・沖縄交流武術大会」まで、数回にわたり中国武術と交流する機会があった。このような交流をとおして、中国武術と首里手系空手との関係について検討する機会があったが、なかなか核心にせまる分析と結論を得るまでに至らなかった。首里手系空手と中国武術との関係をより深く調査し分析する機会を得たのは2012年4月からである。

2012(平成24年)年度から3年計画で浦添市が企画した「琉球空手のルーツを探る事業」で、中国泉州市の武術協会及び泉州市の南少林寺、嵩山少林寺を訪問する機会を得た。この事業は沖縄空手と中国武術との関係について学術的に研究することを目的としており、両者の関係性についてどこまで検証することができるかを課題とした。

二. 調査と分析

(1) 泉州市における調査

2013年(平成25年)2月及び10月の2回泉州市において「白鶴拳」「五祖拳」との比較研究、武術交流、文献調査を行った。首里手系空手では「五十四歩」など「型」の名称で中国武術の影響を受けたと思われるものが多いが、一致するものはなかった。首里手系空手の中に「セーサン」という型がある。これは唯一「白鶴拳」の「十三太保」に類似する名称であるが、呼吸法・拳の使用法に大きな差異が認められた。首里手系空手の鍛練型として「ナイハンチ」があるが、これに類似する鍛練型は「五祖拳」「白鶴拳」の中には見い出せなかった。

演武線は首里手系空手とも共通するものがあった。手技では首里手系空手は「ティヂクン(正拳)」を活用しての突き、受け、肘当てなどが多用されるが、白鶴拳や五祖拳では開掌による護身技や攻撃技が多用されている。

器具を使用しての鍛練法として、沖縄空手は「マキワラ」を使用して「ティヂクン」を鍛えることが一般的だが、「白鶴拳」の本部道場「永春白鶴拳史館」や「南少林寺」では「マキワラ」に相当する鍛練具はなかった。体練すなわち相対しての小手鍛えなどは、共通するものが見られた。

首里手系空手と白鶴拳、五祖拳とは型の成り立ちに大きな差異が認められ、独自の発展過程を得て現在に至っていると思われる。

(2) 嵩山少林寺における調査

2014年(平成26年)10月18日~22日の間、嵩山少林寺視察及び修業僧との武術交流、第10回中国鄭州国際少林武術祭競技会視察を行った。嵩山少林寺は案内者の延宏法師に、映画やテレビなどのマスメディアで紹介された堂内や拳法を修練している壁画などつぶさに解説していただいた。嵩山少林寺は唐の時代、王朝の窮地を救った13人の僧侶の話はあまりにも有名だが、以来さまざまな変遷を得て現在に至っている。延宏法師の案内で僧侶たちが修業した堂内で実際の鍛練法について指導を受けた。僧侶たちが力強く足で踏み慣らした、すさまじい鍛練の跡が印された煉瓦敷き

の床は空手を修業する者の心を取りこにした。首里手系空手の鍛練型であるナイハンチの鍛練法と足を内側に振り上げてから力強く踏み込む鍛練法には、非常に共通する要素があった。立ち方も騎馬立ちであり、ナイハンチの立ち方と共通している。ただナイハンチの型に共通する套路は確認できなかった。しかしこの鍛練法は14世紀以前に泉州や福州に伝播し、首里手系空手に影響を与えたと思われる。時期は確定することはむつかしいが、沖縄と中国の国交が開始された14世紀後半福州や泉州の人々（久米三十六世）が移住しており、このころすでに伝播したとも考えられる。

達磨大師は僧侶の仏教修業に耐えうる体力養成のために、拳法を奨励したといわれている。松濤館流開祖富名腰義珍や沖縄小林流開祖知花朝信は、脆弱な身体を鍛練するために空手を始めたといわれている。富名腰や知花の師である糸洲安恒も、心身を鍛練する目的で空手を奨励している。拳法や空手の修業は社会的貢献や厳しい仏教修業に耐えうる心身の鍛練を目的としている点で共通する。

第10回中国鄭州国際少林武術祭競技会では古流の拳法の競技も観戦したが、沖縄空手とはまったく異質なものであった。ただ演武線は少林寺の修業僧の演武同様、横の動きを中心にしており、この点ではナイハンチの演武線と一致するものがあつた。

以上の分析から、嵩山少林寺における拳法の鍛練法が泉州に伝播し、首里手系空手のナイハンチの鍛練法に影響を与えたと考えられる。ただ型の構成は類似するものがないところから、後日沖縄独自で開発されたものと推測する。

(3) 文献調査

「琉球空手のルーツを探る事業」に伴い、泉州市武術協会より『五祖拳譜』『泉州南少林文存』、また鄭州市武術協会より『第9回中国鄭州国際少林武術節』『鄭州体育』の寄贈を受けた。『泉州南少林文存』には泉州における武術の発展史などの研究成果が克明に収録されており、事業受託者の「スペースチャイナ」に一部翻訳していただいた。泉州は中国における南の玄関口として栄えたところであり、仏教はもとよりキリスト教、イスラム教なども伝来したところである。港町という性格上常に海賊対策を強いられ、宋の時代に少林武術も伝来したようである。北宋年間に詠まれた詩に「泉南到處少林風」がある。沖縄と国交を開始した1372年ころは、すでに少林武術が盛んに行われていたことがうかがえる。沖縄の朝貢船や留学生が約100年間中国への玄関口として利用したのが泉州であった。琉球国の渡航者が泉州に滞在した期間に、中国武術に接する機会があつたことは容易に推測できる。

三. 沖縄空手の発祥に関する一考察

首里手系空手と中国武術とはどのような関係があるのだろうか。究明されるべき課題として常に私を悩ましてきたテーマである。『沖縄空手 秘伝「武備志新釈」(渡嘉敷唯賢、1995.11.20)』には「五十四歩」「邵霊寺流」「邵林寺流」などの沖縄空手に関連する用語も登場するが、手技や薬方に関するものであり、「型」に関連する内容が皆無である。また、パッサイやチントウなど中国語や福州語と関連する研究報告もあるが、パッサイは獅子舞との関連語、チントウは「型の名称」「拳法家の最高の型」の二つの意味に解釈できるという報告など、首里手系空手が中国伝来の拳法であると結論づける根拠は出てこないのである。

沖縄は12世紀のグスク時代に按司と呼ばれる群雄が割拠し、14世紀に北山、中山、南山の勢力圏に統合される三山時代を迎える。「おもろそうし」に中山の英祖王のことを謡った「おもろ」がある。武者姿のたくましい英祖王を讃えるもので、日本中世の武士の武者姿のいでたちを想起させる。このころ、大和武士の闘争術の影響が色濃く表れていたことをうかがわせる「おもろ」である。

このように、沖縄の置かれた地理的・歴史的・文化的背景を考慮に入れると、首里手系空手は日本の武士団の闘争術の影響や泉州・福州を介して影響を受けた中国武術が融合し、独自の武術として発展してきたのではないかと考えられる。そしてその源流の地は、最初に中国と国交を開いた中山の拠点「浦添」であったと考えている。



嵩山少林寺にて武術交流の様子



招聘者の方々と「津波道場」にて交流の様子



招聘者の方々と「津波道場」にて記念撮影

近世琉球の唐手

田名 真之（沖縄国際大学総合文化学部教授）

一. はじめに

今日、「空手」といえば沖縄発の武道として、世界に知られており、伝統空手、競技空手等々の愛好者は数千万人に及ぶとされている。琉球・沖縄で数百年に亘って脈々と受け継がれてきたとされる唐手は、琉球の歴史と連動しながら節目節目において多くの物語を生んできた。尚真王の首里城への武具の集積—古琉球の刀狩り云々や薩摩侵攻の後、武具の所持が禁止された—禁武政策、等々である。こうした物語が広く知られる一方で、近世の琉球にあって、同時代の唐手（空手）に関する史料はそれほど多くはない。というよりむしろほとんど無いといった方がいいだろう。つまり、先の物語は多分に近代になってから、唐手が空手として、普及し、認知されていく過程で生み出されていったのであろうと考えられるのである。

本稿では、近世琉球における唐手関係史料について論じていく。史料自体はよく知られており、目新しいものではないが、その時代や社会背景も踏まえて、改めて子細の検討を行い、近世琉球における唐手の位置づけについて考えてみたい。

なお、検討する史料は、①大島筆記 ②薩遊紀行 ③打花鼓（島袋全発論文）の3点である。その後に、近世琉球での諸芸の位置づけを踏まえて、王国にとっての唐手、人々にとっての唐手についてコメントすることとする。

二. 近世の唐手（空手）関係資料

まずは「大島筆記」からみていく。同書は土佐藩の儒者である戸部良熙が、宝暦12(1762)年に同藩の柏島に漂着し、宿毛の大島に廻送されてきた琉球船の潮平親雲上盛成らを事情聴取した記録で、琉球や中国に関する様々な情報を聞き取りした貴重な史料である。

その中に、武術に関わる「公相君の組合術」の一説がある。以下のような記事である。

先年、組合術〈良熙謂、武備志載する所の拳法ときこゆ〉の上手とて、本唐より

公相君〈こうしゃんきん〉〈是は称美の号なる由なり〉弟子を数々つれ渡れり。其わざ左右の手の内、何分一つは乳の方を押え、片手にてわざをし、扱足をよくきかす術也。甚瘦く弱々としたる人でありしが、大力の者無理に取付たるを其俛倒したる事など有しなり¹。

「組合術の名人の公相君（こうしゃんきん）が中国から弟子を伴ってやってきた。その技は、片手でわざをし、またよく足をきかす術である。」といい、「組合術とは、『武備志』に載っている拳法と聞いている。」また「公相君とは美称である、つまり号であって本名ではない」としている。

公相君なる人物が弟子を連れて琉球にやってきて、組合術という拳法を披露した、演武してみせた、ということになる。では公相君とは何者だろうか。可能性として考えられるのは、冊封使節中の武官である。というのも、漂着事件の6年前に冊封使が琉球に渡来しているからである。1756年の尚穆王の冊封使節団（正使全魁、副使周煌）は、総勢459人で、うち兵役が168人となっていた。なおこの冊封は、問題が多く厄介な使節団であった。というのも、2隻の冊封船は来琉時に嵐に遭って、正使ら一行の船は久米島で座礁、島民の働きで全員無事救助され同年7月に那覇に到着した。もう一隻は嵐の中、中国へ戻っていたが、12月に到って来琉した。2隻とも翌1757年2月に帰国している。

公相君が正使一行と来琉していれば7ヶ月、もう一隻の方なら2ヶ月余りの滞在となる。ところで随行の兵士等は滞在中、正使等の宿舎である天使館近くの演武場で訓練していたとされる。ということは、公相君が武官であったとすれば、配下の兵士等の訓練で、組合術を披露することもありえたのではないかと、さらに言えば琉球側への武術の伝授の可能性も大いに推測されるだろう。

ところで、公相君が冊封使節関係者以外とする推測が成り立つかという点、その可能性はほとんど無いといっている。たとえば漂流民だったとすると、漂流民取り扱い規程により、泊村に仮収容所が設置され、門番をおいて四六時中監視下に置かれたのであり、監視付きでの周辺の散歩は許可されたものの、演武などとても行えなかったはずである。それに地元民との接触は禁止であり、限られた役人のみが接触しえた、そういった状況下で、「大島筆記」の記録と結びつけるのは無理であろう。

次に「薩遊紀行」(1801年)である。同書は肥後藩士の手になる物で、その人物が薩摩に遊んだ際に、那覇の薩摩藩在番奉行所に勤務したことがある水原熊次郎なる薩摩藩士から聞いた琉球の話をもとめたものという。その中に、唐手と目される「手ツクミ」のことが出てくる。関係記事は以下の通りである。

琉球、劍術、ヤハラノ稽古ハ手ヌルキモノナリ。唯突手ニ妙ヲ得タリト云、其仕形ハ拳ヲ持テ何ニテモ突破リ、或ハ突殺ス、名ツケテ手ツクミト云、右ノ手ツクミノ術ヲ為スモノヲ、薩ヨリナパツメノ奉行所ヘ召テ瓦七枚重ネヲ突セラレシニ、六枚迄ハ突碎シヨシ、人ノ顔ヲ突ケハ切タル如クニソゲル、上手ニナレハ指ヲ伸シテ突ヨシ²。

「琉球は劍術やヤハラ（柔術）の稽古はたいしたことはない」「但し…突手に優れているという、拳でもって何でも突き破り、或いは突き殺す、名付けて 手ツクミという」「瓦を7枚重ねて突かせたら6枚迄は突き砕いた…」とある。これは明らかに唐手を指しているとみていいだろう。「手ツクミ」と称しているが、これは琉球の方音の「ティーツクン」（手で突く）の意であろうと解されている。この時点で「唐手」との呼称はまだ存在していないということだろうか。体系的な武術として「唐手」は未だということなのだろうか。とはいえ、那覇詰めのある在番奉行所の役人たちに「手ツクミ」のことが知られていたからであろう、上手な者を呼んで瓦割りを実演させている。ところで、琉球では劍術や柔術はたいしたことが無い、というくだりは、琉球の士も劍術や柔術の訓練をしてはいるがたいしたことはない、と解されよう。首里の上級士の屋敷に弓場が設けられていたり、八重山の頭クラスの家系に弓術や劍術の指南書が残されていたりと、琉球の士が武術の稽古を行っていたことは知られているが、「薩遊紀行」の記述は「手ツクミ」も士の武術として取り組まれていたということを表しているといえるのではないかと。

最後に、島袋全発の論文「打花鼓」中の史料についてである。同史料は1867年、尚泰王の冊封を無事終えた翌年、首里、那覇など地区ごとに祝宴が催されたようで、久米村が御茶屋御殿で尚泰王臨席の下、披露した演舞・演劇の番組表である。その中に歌舞音曲と並んで、武術の演目がみえている。以下武術の演目だけ引用すると以下の通りである。

籐 牌	真栄里筑親雲上
鉄尺並棒	真栄里筑親雲上／新垣通事
十三歩	新垣通事
棒並唐手	真栄田筑親雲上／新垣筑親雲上
ちしゃうきん	新垣通事親雲上
籐牌並棒	富村筑親雲上／新垣通事親雲上
鉄 尺	真栄田筑親雲上
交 手	真栄田筑親雲上／新垣通事親雲上

車 棒 池宮秀才
壺百〇八歩 富村筑親雲上

「打花鼓」(『島袋全発著作集』)³

王やその他高官が臨席する場で披露される出し物 21 演目中、上記の 10 演目が唐手や古武道となっている。演武者は真栄里筑(登之)親雲上<鄭氏>、新垣通事<林氏>、新垣通事親雲上<林氏>、真榮田筑親雲上<阮氏>、富村筑親雲上<?>、池宮秀才<鄭氏>の6名である。いずれも久米村士と目され、久米村でも中国由来の武術が伝承されていたことが分かる。しかし、「棒並びに唐手」とあり、「十三歩」や「壺百〇八歩」等と並列扱いとなっている。「唐手」自体が一つの「型」を表しているのだろうか。また「棒」が他の「型」などとの組み合わせとされていることも特徴的なのではないか。「鉄尺並びに棒先の「棒並びに唐手」、「藤牌並びに棒」などである。あと他の首里や那覇、泊などの祝宴の番組表は知られてないが、概ね久米村と同様の演目であったろうから、いずれでも唐手が演じられたと考えていいのではないだろうか⁴。

三. 諸芸の伝授、稽古

近世の琉球王国において、国用に役立つ諸芸の伝授、稽古等々について見ていくと、以下のような事例を挙げることができる。

- 「羽地仕置」に士の若者の身につけるべき諸芸として学文、算勘などと並んで、医道や庖丁(料理)、茶道、立花、唐楽、馬乗方などが挙げられている。
- 康熙2(1663)年、尚質冊封の際、使節団に琴の名手の従客陳翼がおり、その演奏に感激した尚質王が、世子の尚貞ら3人への伝授を請い、天界寺などで2ヶ月以上にわたって学んでいた。(張学礼『中山紀略』「傳姓池原家家譜」)
- 嘉手納憑武の事績(『球陽』「関氏家譜」)
康熙23(1684)年、杭州において上司の命で白糸挽き拵え縮緬織り煮ることを稽古する
康熙25(1686)年、鹿児島において命を受けて、杉原(紙)の漉き方を学ぶ
康熙29(1690)年、中国揚州で煮貝のことを学ぶ
(螺鈿に用いる貝の真珠層を煮て剥離させる技術)
- 魏士哲高嶺親方(「魏氏家譜」「曾氏家譜」「向氏家譜」「蔡氏家譜」)⁵
康熙27(1688)年、副通事として渡唐した際、上司の命で、欠唇施術の法を学び、帰国後、世子尚益の施術に成功した。上司の四貢使(康熙25、27年の進貢正副使)が醵金し、魏士哲も醵金して、50余両を医師の黄会友に贈った。
- 「久米村日記」(島袋全発「打花鼓」より)
鄭氏池宮城筑親雲上の請願(口上覚)
謝恩使の従内として渡唐し、唐歌楽と唐踊を稽古したいので、許可願いたい。
- 「親見世日記」(島袋全発「打花鼓」より)
那覇四町中からの請願
伝承者がいなくなった謡拍子、大和狂言の稽古のため、三人を鹿児島に送り両人は5カ年滞在

で謡と拍子を、一人は3カ年滞在で大和狂言を稽古させたい。経費は自分持ちで稽古し、終了して帰国した後、十分に習得して所に用に立つとなれば、それなりの役職への任職をご配慮いただきたい。

- 「豊川家文書」(『石垣市史 八重山史料集1』所収)
 - 大和、首里、那覇伝来の各種指南書
 - 謡狂言 - 宝生流小謡集/謡囃子躍狂言組/諷抜 班女
 - 立花 - 生花四季華形聞書集/立花聞書集/盆栽絵
 - 馬関係 - 馬見様并道具名所/馬稽古聞書/在轡集
 - 弓術 - 日置流神道矢始/射法心得覚/日置流卷藁前之次第
 - 剣術 - 示現流磯月

以上の事例から言えることは、国の役に立つ諸芸や技術などについて、中国や日本から導入する場合、王府の命を受けてのケースもあるが、個人レベルで稽古のため中国へ行きたい、大和にに行きたいと申し出るケースも多々存在する。その場合、師を求めて相応の対価でもって伝授となるのが通常である。物になったら、王府が経費を支払うが、でなければすべて自腹となる。

四. おわりに

唐手—中国の拳法で、公相君ら使節団員らによる伝授の他、諸芸の習得ということで、進貢使節の一員として渡唐した際に、稽古した可能性が考えられる。この場合、一定の期間と相応の経費を要し、場合によっては、上司の命や自らの願い出にしる、国の役に立つ、国用のためといった理由付けが必用である。

中国や日本(鹿児島)で学んだ諸芸は公の場で披露される。唐棒は冊封使歓待の中秋宴等で演じられ、唐手は御茶屋御殿で王の臨席のもと披露されている。つまり国にとって必要欠くべからざる諸芸は、個人レベルの趣味の問題ではなく、国の諸芸なのである。翻って唐手も公の場で披露されるということは、国にとって必要な諸芸の一つとの位置づけも可能であるといえよう。となれば、王国時代にあっては個人レベルで型や技が一子相伝とか門外不出とかいうことは、考え難いだろう。流派も近代の産物であればこそ、異なる流派に同名の型が伝承されているのではないか。なお型について元は中国から伝来したものであっても、沖縄の空手にこそ唐手のオリジナルな型が遺されていると考えている。各流派合同での型の系統樹作りが期待される場所である。

空手の研究は、長い歴史と蓄積をもっている。その成果に学びつつ、中国側の研究者との交流も深めながら、新たな展開を期待したい。

注

1 『大島筆記』(『日本庶民生活史料集成第一巻』第一書房)

2 「薩遊紀行」(『史料編集室紀要 第31号』沖縄県教育委員会)

3 「打花鼓」(『島袋全発著作集』)

*六論朗読など学習プログラムを除く演劇、歌舞など諸芸 21 演目中の 10 演目

4 なお、演武者の位階呼称についてである。下位から、まずは秀才、ついで通事家は通事→通事親雲上と進んで親雲上となる。里之子家は里之子→里之子親雲上と進み親雲上に陞る。この原則からすると引用史料の6名中、真栄里、真栄田、富村の3人の筑(登之)親雲上は誤りとなる。

オリジナルの史料が残されていないためやむを得ず論文からの引用となっているが、久米村士での筑登之家は通事家となるため、通事親雲上でなくてはならないことを指摘しておく。

5 「魏氏家譜」(『那覇市史 第1巻6 久米系家譜』)

…四貢使、召(魏)士哲曰、此医術係 王世孫至要至緊、汝須盡心学之、士哲夙稟愚昧以不能精医術固辞、四貢使不允、於是急往醫師寓所問之、不見醫師有人語我云醫師黄先生欲歸其郷今在舟中、遂追之及河間、幸獲遇之、問其姓名具礼請教醫師曰吾是福建汀州府上杭県住人黄会友者也、有祖伝補唇奇方周旋四方療治欠唇、然此薬方一世一伝、雖親友不敢伝之、是吾祖宗之遺令也、士哲乃發誠心万求不允惟以異域之人、故固請教方而後允之、遂与黄先生結盟、居住別館昼夜孜孜学之、已閱二旬悉受其伝方、又得秘書一卷…

剛柔流、上地流、五祖拳、白鶴拳の型「三戦（サンチン）」に関する一考察

嘉手苺 徹（早稲田大学大学院）

一. はじめに

中国福建省地方に伝わる拳法は、河南省鄭州市にある嵩山少林寺の北派少林拳に対して、南（南派）少林拳（以下南少林拳）と称されている。南少林拳は、「教徒之法、以三戦為先」（生徒に教えるには必ず三戦を先に教える）や「三戦始、学到始」（三戦より始め、死ぬまで修練する）と言われるように、「三戦」（サンチン）は最も重要な基本型として位置づけられている¹。

泉州市永春県白鶴拳は、開祖伝説によれば、清朝康熙年間（1662 - 1722）に、福建省南少林寺の僧で少林十八羅漢拳の使い手である方慧石の娘、方七娘によって編み出されたとされる²。

また、泉州南少林寺五祖拳は、主に、太祖拳、羅漢拳、達磨（達尊）拳、猴（行者）拳、白鶴拳の五種の拳術を統合させて創出され、すでに千年以上の長い歴史を持ち、主に閩南地区から各地へ広まっていったという³。

沖縄で発祥した空手の流派である剛柔流、上地流は、南少林拳に学んだ沖縄人が、帰国後、新たに型を体系化し、理念を構築するなどして創造した空手の流派である。剛柔流は、東恩納寛量（1853 - 1915）に師事した宮城長順（1888 - 1953）が1930年ごろに創始し⁴、上地流は、上地完文（1877 - 1948）が1932年に「パンガキヌーン流空手術研究所」を創設し、1940年に名を改めて創始した⁵。東恩納、上地ともに1800年代末に、福州で南少林拳の修業を積んでいる。

本稿では、2013年度に実施された“琉球空手のルーツを探る事業”（浦添市教育委員会）において、福建省泉州市を視察した結果を参考に、泉州南少林寺五祖拳（以下五祖拳）、泉州市永春県白鶴拳（以下白鶴拳）、剛柔流、上地流の4つの拳種に共通する三戦の型（五祖拳、白鶴拳では「套路」を意味する）の比較を行い、南少林拳が琉球・沖縄へ伝播し、沖縄人によって主に近代以降、新たな型の創作や再構成が進められるとともに、型の定義づけ、到達目標、稽古体系を構築するなどして空手（「唐手」）⁶が創造されたことを三戦の類似点や相違点を考察して、今後の研究に必要な課題を見出すことを目的とする。

二. 剛柔流、上地流の三戦の定義について

剛柔流の三戦は、開祖の宮城による戦前期の1932年の文献では、次のように定義づけられている。

三戦は、「唐手の基本型にして、其の目的は身体をして定められた姿勢を取り、氣息の吞吐と力の入れ抜きを調和させ、堅固なる体格と武道的氣概を養成す」としている。「堅固なる体格」と「武道的な氣概」の養成という体育的な側面と武道的精神の両面から三戦の目的を掲げている⁷。

また、摩文仁賢和（1889-1952）は、「体育的方面から見ると、第一に筋肉を鍛えつつ力の平均を保ち、堅固なる体格と武道的氣概を養う事が出来る。第二に、氣息の吞吐と力の入れ抜きとを調和せしめ、第三に、耐久力を養成するに十分な効果が現れる」とし、「精神的方面より見れば、活々たる心の働きに依て観察力、判断力、思考力と云う様に訓練して、重みある人間を養成する事が出来る。依て修行者は初めての稽古が最も必要で重大である。静かによく心を落ち付けて練習しなければならぬ。姿勢動作が不良になると、それが習慣となりて之が矯正に困難となるからである」と、「体育的方面」と「精神的方面」から三戦の目的を述べている⁸。

摩文仁は、宮城の唱えた2つの目的をより詳しく、「体育的方面」から3つを挙げ、一つ目に筋力を鍛えつつ力の平均を保って「武道的氣概」を養成すること、二つ目に呼吸法と力の入れ抜きを調査させること、三つ目に持久力を養成することとして、「精神的方面」からは、生き生きとした心の働きの

よって「観察力」「判断力」「思考力」の訓練に役立ち、「重みのある人間を養成」することができること、「姿勢動作」を重視するなどを掲げている。これは、摩文仁がまだ「剛柔流拳法」を名乗っていたときのものだが、その後、袂を分かって糸東流を創始している。

ここで注意を要することは、宮城と摩文仁の唱える「体育」「武道」は、戦前期における学校体育の指針に沿っていることである⁹。1936年に「学校体操教授要目」が改正されると、「当時の国際情勢に対応する必要上からの身体修練と共に人格陶冶、精神訓練、統制的団体訓練の重視がなされた」¹⁰。そして、1941年に「国民学校令及び同施行規則」が公布されると、「体操科」は「体練科」と名称を変え、「武道」の比率が著しく増加し、「皇国民の錬成という立場から精神的側面の重視された体育指導が徹底されていくことになる」¹¹。つまり、剛柔流三戦の目的は、当時の社会情勢に呼応して兵士としての身体づくりと皇国民としての精神訓練に主眼を置いていったようすを推測することができる。

一方、上地完文によって沖縄にもたらされた南少林拳は、「パンガキヌーン流」として紹介され、戦後、1950年代に息子の上地完英（1911 - 1991）らによって新たに4つの型を創作するとともに技法の体系化が行われ、「三戦（サンチン）」伝承の歴史的経過を踏まえた上で、その理念や目的を明確にして定義づけが行われた¹²。

上地流三戦は、日本復帰（1972）後の1977年の刊行本では、次のように定義づけられている。

心・技・体の三つの次元において、それぞれきわめて重要な機能を担うもので、三つの目的を掲げる。第一に、厳しい体練や技練に耐え続ける根性を養成すること、第二に、諸技法の基本姿勢は凡て三戦に基立していること、第三に、基礎体力は三戦を修得する過程で自動的に身につくのであり、呼吸法と体練法は上地流独特の身体を築き上げる機能を持つこととまとめられている¹³。

さらに、近年では、流派から会派への分化が起り、両流派の三戦については、次のように解説される。

剛柔流系の三戦は、当初三步前進、回転三步後進、回転一步前進、一步後進して行うもので、呼吸法も素早く全て開掌の貫手であった。昭和期に入り、宮城によって三步前進、三步後退の演武法が編み出され三戦第一として普及し、東恩納寛量の三戦を三戦第二として指導させるようになった。宮城が剛柔流を名乗った頃には、開掌から閉掌の拳で諸手に構えた後、全ての挙動をゆっくりとした丹田呼吸法に変え、氣息の吞吐と挙動が重なるような演武法に統一された。演武時に集中すべき所は主に「臍下」「後頭」「臀部」3カ所に置く。これらは「臍下集力」「後頭集力」「臀部集力」として、顎を引き、後頭を立て、鳩尾を落として丹田に力を蓄え、臀部を引き締めるようにして行う、としている¹⁴。

上地流系の三戦は、心・技・体総合鍛錬の基本型で、技法上の五大目標は、(1)眼力の涵養、(2)呼吸法の修得、(3)集中力の錬成、(4)基本姿勢の確立、(5)強靱な体力の養成である。技法的には上地流系9つの型で多用される平手廻し受けと拇指拳突きを習熟をはかることである。また、三戦は開手で行い、一撃必殺・完全防御の技は含まれていない、としている¹⁵。

両流派とも三戦が、重要な基本型としての位置づけは変わらず定義づけが行われ、到達目標が掲げられていったが、技法と演武法は変遷していることが分かる。

三. 4つの三戦の特徴について

三戦の型の特徴を、(1)挙動の流れ、(2)演武時間、(3)立ち方、(4)運足、(5)呼吸法、(6)上肢・下肢の技法、(7)演武線、(8)鍛錬法（対練）、の主に8つの項目から類似点や相違点などについて整理を行った。

1 剛柔流系の三戦（図1参照）

- (1) 挙動の流れ①立礼、②構え、③（不動の姿勢）、④右三戦立ち、⑤諸手受け、⑥左中段突き、⑦左中段受け、⑧一步前進・左三戦立ち、⑨右中段突き、⑩右中段受け、⑪一步前進・右三戦立ち、⑫左中段突き、⑬左中段受け、⑭右中段突き、⑮右中段受け、⑯左中段突き、⑰左中段

受け、⑱右中段突き、⑲右中段受け、⑳左中段突き、㉑諸手貫手、㉒諸手つかみ引き、㉓諸手貫手、㉔諸手つかみ引き、㉕諸手貫手、㉖諸手つかみ引き、㉗諸手貫手、㉘一步後退・左三戦立ち、㉙諸手掌底突き、㉚一步後退・右三戦立ち、㉛諸手掌底突き、㉜構え、㉝礼、の全33挙動。

【図1】 剛柔流系三戦の演武の流れ（演武者 喜久川 政成氏）

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
立礼	構え	* 不動の姿勢	右三戦立ち	諸手受け	左中段突き	左中段受け	一步前進・左三戦立ち	右中段突き	右中段受け
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
一步前進・右三戦立ち	左中段突き	左中段受け	右中段突き	右中段受け	左中段突き	左中段受け	右中段突き	右中段受け	左中段突き
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
諸手貫手	諸手つかみ引き	諸手貫手	諸手つかみ引き	諸手貫手	諸手つかみ引き	諸手貫手	一步後退・左三戦立ち	両手掌底突き	一步後退・右三戦立ち
31	32	33	* 「不動の姿勢」をとらない場合もある。 ** 全日本空手道剛柔会編『剛柔流空手道』全日本空手道剛柔会、2005年を一部改編して、嘉手苅徹が作成した。						
両手掌底突き	構え	礼							

- (2) 演武時間は約95秒。
- (3) 立ち方は全挙動を通して三戦立ちである。
- (4) 運足は、全挙動を通してすり足で行う。
- (5) 呼吸法は、吸気と呼気が挙動と重なるように同時に行われ、長く吸い長く吐き、呼吸音が出ると同時に発声を行った腹式の丹田呼吸法である。
- (6) 技法上の特筆すべき点は、拳と貫手が併用されていて、蹴り技は含まれていないことである。
- (7) 演武線は、I字型で、三步前進、三步後退を行う。
- (8) 鍛錬法において、演武者は、①目は正面を注視、②顎を引く、③両肩を下げる、④胸を張り、腹筋群をしめる、⑤脊柱を真っ直ぐに伸ばす、⑥広背筋、大円筋等、背筋群を締める、⑦両

肘を両脇へ引き、一拳分間をあける、⑧前腕を外側へ捻り、拳を力一杯握る、⑨肛門の括約筋を締める、⑩大殿大殿筋と大内転筋を内側に締める、⑪両肘ともに内側へ曲げて締め、大殿筋を内側へ締める、⑫足指を広げ、足指と足裏を地面に蛭のごとく密着させるなどに留意する。指導者は、技の流れに沿って、直接演武者の体に触れて個別の課題を意識させ、次に筋肉を締めさせ、次第に個別の意識を統一させ、肩をほぼ垂直に叩き下ろすなどして鍛えを行う¹⁶。

2 上地流系の三戦（図2参照）

- (1) 挙動の流れ①不動の姿勢、②礼、③不動の姿勢、④直立ち、⑤下段諸手貫き、⑥三戦立ち、⑦三戦中段貫き、⑧三戦前進・中段貫き、⑨三戦中段貫き、⑩三戦前進・中段貫き、⑪三戦前進・中段貫き、⑫三戦反転、⑬三戦中段貫き、⑭三戦前進・中段貫き、⑮三戦前進・中段貫き、⑯三戦前進・中段貫き、⑰三戦反転、⑱三戦中段貫き、⑲三戦前進・中段貫き、⑳三戦前進・中段貫き、㉑三戦前進・中段貫き、㉒中段諸手貫き、㉓中段諸手貫き、㉔中段諸手貫き、㉕轉身、㉖輪受け、㉗拇指拳諸手突き、㉘轉身、㉙輪受け、㉚拇指拳諸手突き、㉛轉身、㉜輪受け、㉝拇指拳諸手突き、㉞仏礼の姿勢、㉟不動立ち、㊱礼、㊲不動立ち、の全37挙動。

【図2】 上地流系三戦の演武の流れ（演武者 上地 完英氏）

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
不動の姿勢	礼	不動の姿勢	直立ち	下段諸手貫き	三戦立ち	三戦中段貫き	三戦前進・中段貫き	三戦中段貫き	三戦前進・中段貫き
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
三戦前進・中段貫き	三戦反転	三戦中段貫き	三戦前進・中段貫き	三戦前進・中段貫き	三戦前進・中段貫き	三戦反転	三戦中段貫き	三戦前進・中段貫き	三戦前進・中段貫き
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
三戦前進・中段貫き	中段諸手貫き	中段諸手貫き	中段諸手貫き	轉身	輪受け	拇指拳諸手突き	轉身	輪受け	拇指拳諸手突き
31	32	33	34	35	36	37	* 上地完英『精説 沖縄空手道—その歴史と技法』上地流空手道協会、1977年を一部改編して、嘉手苅徹が作成した。		
轉身	輪受け	拇指拳諸手突き	仏礼の姿勢	不動立ち	礼	不動立ち			





















- (2) 演武時間は約 60 秒。
- (3) 立ち方は、全挙動を通して三戦立ちである。
- (4) 運足は、全挙動を通してすり足で行う。
- (5) 呼吸法は、短く鋭く意識的に吐き、吸息は吐息の反動作用で腹式で行い、とくに意識することなく、ごく自然に鼻腔を通して行う。吐息音が表に出る腹式の呼吸法である。
- (6) 技法上の特筆すべき点は、貫手と拇指拳が併用されていて、蹴り技は含まれていないことである。
- (7) 演武線はT字型で、三步前進、反転三步後退、反転三步前進、轉身を3回行う。
- (8) 鍛錬法においては、演武者は、入門当初は楽な気持ちで軽くやるのが肝要であり、全身の力を抜いて、力むことなく、ごく軽く姿勢、立ち方、足歩の運び、眼の位置、歩幅、手の位置、手の出し方・引き方、腹背の在り方、肩の下げ方、胸の張り方、呼吸の仕方等々の概要を学ぶことに努める。入門後4、5ヵ月ごろより、指導者が個々人の体力、筋力の発達に応じて、腹筋に拳を当てたり、腹面を突いたり、膝関節の3、4寸下(ふくろはぎ)に、背後より下段足刀で蹴り下ろすようにして踏み当て鍛錬を施したりする¹⁷。

五祖拳と白鶴拳では、五祖拳を泉州少林寺方丈常定氏、白鶴拳を泉州市武術協会副主席蘇瀛漢氏が演武を行っているビデオから画像を作成し、そこで示された各挙動(式)の名称とその解釈を採用した。

3 五祖拳の三戦 (図3参照)

- (1) ①立正、②平馬起式、③左過躰、④平馬双鋤、⑤右過躰、⑥平馬双捺、⑦平馬双擗、⑧右過躰双沙吞入、⑨平馬吐出請拳、⑩双挑、⑪右過躰吞入、⑫平馬吐出双座節、⑬進右馬手挿
- ⑭座節、⑮吞吐、⑯昇馬双挿、⑰座節、⑱吞吐、⑲昇馬双挿、⑳座節、㉑吞吐、㉒退馬双挿
- ㉓座節、㉔吞吐、㉕退馬双挿、㉖座節、㉗吞吐、㉘退馬双挿、㉙座節、㉚吞吐、㉛退馬双関
- ㉜留馬架右脚双開、㉝昇馬打節、㉞躰手削、㉟左手切、㊱右手掬、㊲退馬架右脚 孩兒抱摔
- ㊳收拳、の全38式(挙動)¹⁸。

【図3】 五祖拳三戦の演武の流れ (演武者 常定氏)

第一段									
第一式	第二式	第三式	第四式	第五式	第六式	第七式	第八式	第九式	第十式
									
立正	平馬起式	左過躰	平馬双鋤	右過躰	平馬双捺	平馬双擗	右過躰双沙吞入	平馬吐出請拳	双挑
準備・立正、閉塞立ち	初動	左前進受け	立馬の体制より左右の足刀で押切る	右前進受け	立馬の体制、両足を軽く払う	立馬の体制、双方攻め、封じる	呑入、右方前進	吐く吸う、片手拳を平手にあてる	左右の攻め
第一段		第二段							
第十一式	第十二式	第十三式	第十四式	第十五式	第十六式	第十七式	第十八式	第十九式	第二十式
									
右過躰吞入	平馬吐出双座節	進右馬手挿	座節	吞吐	昇馬双挿	座節	吞吐	昇馬双挿	座節
右前進、氣息吐く吸う	並行立ち、氣息吐く、双方	右方前進	抑制	息を吸って吐き出す	両足払い	抑制	息を吸って吐き出す	両足払い	抑制

第二段									
第二十一式	第二十二式	第二十三式	第二十四式	第二十五式	第二十六式	第二十七式	第二十八式	第二十九式	第三十式
吞吐	退馬双挿	座節	吞吐	退馬双挿	座節	吞吐	退馬双挿	座節	吞吐
息を吸って吐き出す	後退両足払い	抑制	息を吸って吐き出す	後退両足払い	抑制	息を吸って吐き出す	後退両足払い	抑制	息を吸って吐き出す

第三段							
第三十一式	第三十二式	第三十三式	第三十四式	第三十五式	第三十六式	第三十七式	第三十八式
退馬双関	留馬架右脚双関	昇馬打節	躰手削	左手切	右手挽	退馬架右脚 孩児抱挿	収拳
後退受け	右足懸け両方	打って抑える	手刀払い	左手刀払い	右手拭い	後進右足懸け、 子供が両手を打つ	収拳、終動

* 常定「三戦」『泉州少林寺五祖拳拳譜系列』DVDから画像を嘉手苺徹が作成した。

- (2) 演武時間は約 90 秒。
- (3) 立ち方は、初動と終動に「猫足立ち」、左右の「前屈立ち」があり、広めの「平行立ち」、前爪先を内側に向ける「三戦立ち」などが見られる。三戦立ちの前足はわずかに内側に向け、後足は前足に対して平行である。何れも両脚に均等に体重が乗っているように見られる。
- (4) 運足は自然な歩法で行う。右足は常に前にあり、前進は、右足が先に前へ移動し、左足が後を追って進む。後退は左足が先に移動し、右足が後になる。移動足は内から外へ半円を描く。
- (5) 呼吸法は、呼吸音が表に出て、発声を伴った腹式で行う。
- (6) 技法上特筆すべき点は、貫手と拳が併用されており、貫手の諸手同時技が多用されている。蹴り技は含まれていない。
- (7) 演武線は、I字型で三步前進、三步後退を含んでいる。
- (8) 鍛練法は、今回実見出来なかったが、意見交換では剛柔流系、上地流系と似た体に当てるなどがあるとの説明があった。

4 白鶴拳の三戦 (図 4 参照)

- (1) ①予備式、②起式請拳、③半月沈江、④孩児捧花、⑤双枝昭陽、⑥双龍探海、⑦双枝昭陽、⑧双龍探海、⑨双枝昭陽、⑩双龍探海、⑪双枝昭陽、⑫双龍探海、⑬双枝昭陽、⑭双龍探海、⑮双枝昭陽、⑯双龍探海、⑰双枝昭陽、⑱双龍探海、⑲双枝昭陽、⑳青龍出水、㉑青龍出水、㉒一枝梅花、㉓將軍出箭、㉔將軍出箭、㉕霸王開弓、㉖將軍出箭、㉗孩児抱關、㉘収式請拳、㉙半月沈江、㉚収式、の全 30 式 (挙動) ¹⁹。

【図4】 白鶴拳七歩三戦の演武の流れ（演武者 蘇 瀛漢氏）

第一段					第二段		
第一式	第二式	第三式	第四式	第五式	第六式	第七式	第八式
							
予備式	起式請拳	半月沈江	孩児捧花	双枝昭陽	双龍探海	双枝昭陽	双龍探海
準備（型用意の構え閉塞立ち）	初動（胸元で右拳を左拳で包護する構え）	半月川に沈む	子供が花を捧げる	両枝を太陽照らす	二匹の龍海に潜る	両枝を太陽照らす	二匹の龍海に潜る

第二段				第三段			
第九式	第十式	第十一式	第十二式	第十三式	第十四式	第十五式	第十六式
							
双枝昭陽	双龍探海	双枝昭陽	双龍探海	双枝昭陽	双龍探海	双枝昭陽	双龍探海
両枝を太陽照らす	二匹の龍海に潜る	両枝を太陽照らす	二匹の龍海に潜る	両枝を太陽照らす	二匹の龍海に潜る	両枝を太陽照らす	二匹の龍海に潜る

第三段		第四段					
第十七式	第十八式	第十九式	第二十式	第二十一式	第二十二式	第二十三式	第二十四式
							
双枝昭陽	双龍探海	双枝昭陽	青龍出水	青龍出水	一枝梅花	將軍出箭	將軍出箭
両枝を太陽照らす	二匹の龍海に潜る	両枝を太陽照らす	青龍海より出づ	青龍海より出づ	一輪の梅花	將軍矢を射る	將軍矢を射る

第四段					
第二十五式	第二十六式	第二十七式	第二十八式	第二十九式	第三十式
					
霸王開弓	將軍出箭	孩児抱鬪	収式請拳	半月沈江	収式
霸王弓を引く	將軍矢を射る	子供を抱えて闘う	請拳請拳	半月川に沈む	終動

* 蘇瀛漢「七歩三戦」『永春白鶴拳系列之二』DVDから画像を嘉手苅徹が作成した。

- (2) 演武時間は約 60 秒。
- (3) 立ち方は、初動と終動に肩幅程度の「平行立ち」、「猫足立ち」が見られる。「前屈立ち」では前足を真っ直ぐ向け、後足は 45 度程度に開いている。中腰の立ち方が多いが何れも両脚に均等に体重が乗っているように見られる。
- (4) 運足は、踏み足のように跨ぐ歩法で、前進は、右足が先に前へ移動し、左足は後を追って独特の踏み直す歩法である。後退は移動足が後足を越えて着地すると、前足は合わせて後

退し、踏み直す歩法である。移動足は内から外へ半円を描く。

- (5) 呼吸法は、呼吸音が表に出て、比較的小さい発声を伴った腹式で行う。
- (6) 技法の特筆すべき点は、貫手と拳が併用され、貫手の諸手同時技が多用されている。蹴り技は含まれていない。
- (7) 演武線はI字型で、三步前進、三步後退を含んでいる。
- (8) 鍛錬として、上体、小手、肘、蹴りの攻防を想定して当てなどがある。

四. 4つの三戦の比較から

ここでは、先述した4つの拳種の三戦の類似点、相違点などを整理して比較を行う（図5参照）。

- (1) 拳動の流れは、剛柔流系全33拳動、上地流系全37拳動、五祖拳全38拳動、白鶴拳全30拳動であった。拳動の表現の仕方、または名称のつけ方については、剛柔流系、上地流系は、一つの技名や攻防を行う身体部位の名称を組み合わせる動作の特徴を捉えて、表している。五祖拳、白鶴拳は、拳動を「式」「段」で区分し、一拳動は必ずしも一つの技を表してはいない。とくに、五祖拳や白鶴拳の解説では、拳動（式）には一連の技法に象徴的な名称が当てられ、複数の技が含まれていることが多い。この相違点は、空手と中国拳法の技法をとらえる上で重要な問題点である。

【図5】 剛柔流系、上地流系、五祖拳、白鶴拳の三戦比較一覧

	項目	剛柔流系	上地流系	南少林寺五祖拳	永春県白鶴拳
1	拳動数	33	37	38	30
2	演武時間	約95秒	約60秒	約90秒	約60秒
3	立ち方	三戦立ち	三戦立ち	五祖拳三戦立ち	白鶴三戦立ち
4	運足	すり足	すり足	右足前で、踏み足	またぐような踏み足
5	演武線	前進後退（回転式もある）	前進後退及び左右への転身を含む	前進後退	前進後退
6	呼吸法	腹式呼吸法・発声	腹式呼吸法・発声	腹式呼吸法・発声	腹式呼吸法・発声
7	上肢の技	拳と開掌による左右交互と諸手技の混合、貫手・掌底の同時技等	開掌による左右交互・諸手技の混合、貫手・拇指拳、輪受の同時技等	諸手技・開掌による同時技、手刀、開掌、貫手・掌底の同時技受け等	諸手技・開掌による同時技、手刀、開掌、貫手・掌底の同時技受け等
	下肢の技	蹴り技は含まれない	蹴り技は含まれない	蹴り技は直接的には含まれていない	蹴り技が直接的には含まれていない
8	鍛錬法	締めめの鍛錬	当ての鍛錬	—	上肘、下肘の当てなど
9	備考	空手着、裸足	空手着、裸足、	門派着、靴着用	僧着、靴着用

* 嘉手苅徹作成

- (2) 演武時間は、剛柔流系が約95秒と最も長く、次に五祖拳が約90秒、上地流系、白鶴拳が約60秒であり、約1分から1分半程度の範囲であった。4つの拳種の保有型の中では短めといえよう。剛柔流系が最も長いのは、できるだけ長く吸い、ゆっくり吐く呼吸法によるが、

4 拳種とも演武の場面に応じて変化する。

- (3) 立ち方は、剛柔流系、上地流系が「三戦立ち」を基本として、肩幅程度に足を開き、前足先を内側に向け、後足は真っ直ぐに向く点では共通するが、初動、終動に「構え」「不動の姿勢」「仏礼の姿勢」などがある。五祖拳及び白鶴拳における立ち方は、両者ともに演武中は幾分前傾になり、股関節は常に緩んでいるように見られた。五祖拳では空手でいうところの「猫足立ち」、左右の「前屈立ち」、広めの「平行（四股）立ち」があり、前足が内側に向く広めの「三戦立ち」、白鶴拳では肩幅よりやや広めの「平行立ち」、両脚に均等に体重がかかるような「猫足立ち」などが見られた。
- (4) 運足は、剛柔流系、上地流系ともに「すり足」だが、体を締める剛柔流系は「床に吸い付く」状態を意識させるのに対して、上地流系は「自然な三戦立ち」によって、素早くすり足を行う。裸足と着靴の違いもあるが、白鶴拳のまたぐように踏み直す歩法にも拳種の違いが現れている。五祖拳は、前進後退の際、常に右足が前にある。
- (5) 呼吸法は、剛柔流系が吸気と呼気を拳動に重ね、呼吸音が表に出る発声を伴った呼吸法で、上地流系は、短く鋭く意識的に吐き、吸息は吐息の反動作用で腹式で行い、とくに意識することなく、ごく自然に鼻腔を通して行い、吐息音が表に出る。五祖拳、白鶴拳も発声を伴う呼吸法であるが、それぞれの拳種に違いが感じられ、同じ呼吸法とは言い難い。理由は、同一の拳種ごとの比較では共通性を感じるものの、拳種間の比較では明らかに相違点と思われた。
- (6) 上肢・下肢の技法について、全体的な特徴として、五祖拳、白鶴拳、上地流系は諸手同時技が多用されている。剛柔流系にも諸手同時技は見られるが、初動の構えと後半部の開掌の貫手、掌底突きだけである。4つの拳種に共通するのは、蹴り技が表に出てこないことである。五祖拳、白鶴拳は、運足には「掛け足」や「引き足」、「踏み足」などを行う際に足技が含まれている。剛柔流系、上地流系の三戦の運足は、姿勢や技法を発現するための体をつくる三戦立ちに重きが置かれ、防御的な体練はあるが攻技は含まれていない。
- (7) 演武線は、剛柔流系、五祖拳、白鶴拳は前進後退のI字型で、上地流系は、轉身、左右への転回があるためT字型である。
- (8) 鍛錬法（対練）については、剛柔流系は、演武者に対して指導者が技の流れに沿って、直接演武者の体に触れて個別の課題を意識させ、筋肉を締めさせ、次第に個別の意識を統一させることを目標に行うが、場合によって吐気の極めと同時に肩や腿を叩き、調和の度合いを見ることがある。
上地流系は、演武者に対して指導者が個々人の体力、筋力の発達に応じて、腹筋に拳を当てたり、腹面を突いたり、膝関節の3、4寸下（ふくろはぎ）に、背後より下段足刀で蹴り下ろすようにして踏み当て鍛錬を施したり等を行う。
五祖拳では、剛柔流系、上地流系と似た鍛錬法があるとのことであった。
白鶴拳は、互いに上体、小手、肘をぶつけ合ったり、蹴りの攻防に対しての当て（受け）などを行う。

本稿では、4つの拳種を主に8項目から見て、それぞれ特徴としてあげた点を参考に、類似点、相違点などを比較したが、今回の調査では外形的、概略的な内容に留まるといわざるを得ない。

それは、これらの特徴が技法の内実において、どのように異なるか、または共通するのかわかまでは分析することができていないからである。例をあげると、呼吸法や上肢・下肢の技法が、どのような身体操作によって行われているのか、また、高度な技法に高まっていく状態をどう判断するのかなどについて、今回の調査の実見や聞き取り、映像から解き明かすことは難しい。また、技法の分析方法や記述の仕方（技の言語化）の問題とともに重要な課題といえよう。

さらに、類似点、相違点の比較は、複雑な問題も孕んでいる。たとえば、剛柔流系と上地流系に限ってみても、上述したように型の定義づけや型そのものが変化してきたことである。また、流派は会派へと分化し、指導者による型の解釈や稽古体系などの違いが技法のあり方にも影響を及ぼしているからである。

今回開催されたシンポジウム²⁰の基調講演において、周焜民氏は『那覇手、首里手、泊手』は、技手（ティー）、あしわざ、身体腰の入れ方、呼吸法から剛柔相容れる技、攻め技の運動に到るまで、泉州南少林拳の伝統拳と驚くほど似通っているところがある」として、三戦については、「(泉州の)諸拳は、元々は同系であったが、互いに原型があり、『三戦』は即ち元の拳の源流であり、また派生した拳種、或いは流派（門派）の源流でもあるので、故に類似点や似通ったところが甚だ多い」と述べている²¹。泉州市の南少林拳の歴史的な経過と概要などを分かり易く指摘されている。とくに、三戦を基本型とする剛柔流系、上地流系との系統的な結びつきが深いことも推察される。

しかし、剛柔流系、上地流系の流会派に限らず空手や中国拳法の型は、その時代の社会状況、取り組み目的によって異なり、変化しているからである。その例として、競技化の問題を挙げることができる。空手も中国拳法も競技化が盛んであり、競技化は、多くの愛好家の関心や意欲を高めることに非常に効果的である。しかし一方では、技法はルールに規定され、ルールそのものも短期間で変更される実状がある。古くから受け継がれてきた型という場合、その観点を具体的に明らかにして具体的な分析を行う必要がある。このことは、空手の形成過程を近代沖縄、近世琉球と遡る際には、一層多角的な視点からの考察が必要であることを示唆している。

空手の型の比較・研究は、源流を探る手がかりとなるが、技法のあり方を明らかにする上で、元来の「武術」（相手をいかにして効率よく殺傷するか）としての性格、現代の「競技」（ルールに沿ってどう得点をとるか）化による変容、「武道」（技法の修得を通して精神的な修養を目指す）性の追求などをテーマに考察することも多い。主眼をどのように置いているのかによって議論する内容や方向性は異なってくる。「武術」「競技」「武道」が意味するところを、時期（時代）や取り組む目的を踏まえて、その内容を明らかにしていく必要があるからである。

さらに、日本の学校教育では、2008年度から中学校体育において、武道は体育の一部として必修化された。空手道も武道の領域の一種目として扱われている。文部科学省が出している学習指導要領では、「武道は、武技、武術などから発生した我が国固有の文化であり、相手の動きに応じて、基本動作や基本となる技を身に付け、相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことができる運動」であり、「また、武道に積極的に取り組むことを通して、武道の伝統的な考え方を理解し、相手を尊重して練習や試合ができるようにすることを重視する運動である」と位置づけられている²²。ここには、相手を殺傷することを目的とする「武術」としての側面は、含まれていない。日本の武道の指針となっている武道憲章に示された「武道は…術から道に発展した伝統文化」という定義の中では、「武術」は過去のものとして位置づけられている。

五. 今後の課題

「空手のルーツを探る」ことは、まず、中国拳法の琉球・沖縄への伝来と移り変わりについて何を根拠にして、どのような観点から論じているのかが問われることになる。

琉球・沖縄という狭い地域で育まれた文化としての空手を考えると、剛柔流系や上地流系に限定されることなく、他の流派を含めた空手とその源流となる中国拳法が、それぞれの時代においてどのような目的で取り込まれ、型を中心とした技法がどのように変わってきたのかを問題にする必要がある。1930年代に、宮城や摩文仁が空手を創造する際に唱えた三戦の目的とする「体育」や「武道」の概念は、現代の学校体育や日本武道協議会が制定した武道憲章に著された武道とは異なる²³。南少林拳を育んだ福建地方も中国の歴史の流れの中であって、南少林拳はその影響を受けて変化してきた

ものと思われる。

また、空手の中核を成している技法のまとまりとしての型は、一つの型全体を通してどのような身体操作を修得させようとしているのかという問題がある。これは、先述したように剛柔流系と上地流系の型の一挙動が主に一つの技や動作を表しているのに対して、五祖拳や白鶴拳の一挙動（式）では、主に一連の技法として象徴的な名称が当てられている。この違いをどうとらえるかということに繋がる。

「空手のルーツを探る」ことは、技法のまとまりとしての型を琉球・沖縄と中国の歴史的な状況とその関係を踏まえて検討して、多様な観点から型を分析し、日中の研究成果を比較、考察する必要があることを示唆している。

最後に、今回の4つの拳種は、演武型として見手（観客）を想定して行われた型の比較である。普段の稽古では、どの拳種も演武型にとらわれず、鍛錬の課題や熟練の程度などに応じてさまざまな方法で稽古は行われる。しかし、何れの拳種も演武型としての一つの様式を持っているという類似性がある。剛柔流や上地流は、近代沖縄において創造された。その形成過程において、たとえば、初動と終動における礼法をはじめ、柔道や剣道などの日本の武道の影響を受けて体系化されていった。その延長線上に「競技」化や「武道」化の問題は生じてきた。見手を意識した演武型としての様式が整ってくるのはその過程においてである。それでは、五祖拳や白鶴拳における演武型の様式や「競技」化の方法などはどのように形成されてきたのか。近代以降の日本と中国、そして沖縄との歴史的な経過の中で、空手（「唐手」）や日本の武道の影響を受けて、中国拳法が受容してきた側面はないのかどうか、この点も課題としてあげておく。

注

- 1 周焜民「沖縄空手道と泉州南少林拳の源流に関する考察」“空手のルーツを探る事業”シンポジウム基調報告、2015年。周焜民「三戦」『五祖拳譜』天行健出版社、2009年、p.1。
- 2 蘇瀛漢「永春白鶴拳史」『鶴道魁』創刊号永春怡雲武術研究会、2000年、p.35-37。
- 3 常定編『泉州少林寺』泉州少林寺、2012年。
- 4 「唐手術の威力」『沖縄朝日新聞』1930年11月11日付、宮城長順「剛柔流拳法」1932年、p.7。
「剛柔流」の流派は、宮城がまとめた「剛柔流拳法」1932年に詳しいが、1930年に弟子の新里仁安が明治神宮奉納武道型大会に出場した際に、現地で流派名を問われ窮したことから宮城によって「剛柔流」と命名されたとの口碑が残されている。
- 5 高宮城繁・新里勝彦・仲本政博編著『沖縄空手古武道事典』柏書房、2008年、p.161。
- 6 現在の空手（道）は、1936年頃まで「唐手」と呼称されていた。これは、中国文化に由来することを意味している。ここでは、引用以外は空手として表記する。空手の呼称の変遷については、嘉手苅徹「『手』から『唐手』へ」島村幸一編『琉球交叉する歴史と文化』勉誠出版（株）、2014年、p.354-364を参照。
- 7 前掲注(4)「剛柔流拳法」、p.1-2。
- 8 摩文仁賢和『攻防自在護身術空手拳法』大南洋社、1934年、p.57-58。
- 9 近代沖縄において唐手は、1900年頃から行政主導で学校教育へ「体操科」の一部として導入されたことによって、急速に県下全域へ普及した。その頃の新聞記事には、「唐手運動」の記載も見られる。（「北條侍従来県と総合運動会」『琉球新報』琉球新報社、1905年2月27日付、「那覇首里臨時総合運動会」同、1905年3月9日付、「昨三八年の県下教育の要大（一）」同、1906年1月1日付など）。
- 10 沖縄県体育協会史編集委員会編『沖縄県体育協会史』財団法人沖縄県体育協会、1995年、p.90。
- 11 前掲注(10)同
- 12 前掲注(5)『沖縄空手古武道事典』、p.161-162。
- 13 上地完英監修『精説沖縄空手道』上地流空手道協会、1977年、p.55-56。

- 14 前掲注(5)『沖縄空手古武道事典』、p.230-31。宮里栄一編『三戦』沖縄剛柔流空手道協会、1980年、p.24-29。
 - 15 前掲注(5)『沖縄空手古武道事典』、p.224-225。
 - 16 東恩納盛男『沖縄剛柔流空手道』圭文社、1981年、p.10-12。
 - 17 前掲注(13)『精説沖縄空手道』、p.57-58。
 - 18 常定「三戦」『泉州少林寺五祖拳拳譜系列之』。挙動(式)の流れ図は、DVDから画像を取り込み作成した。
 - 19 蘇瀛漢「七歩三戦」『永春県白鶴拳系列之二』。挙動(式)の流れ図は、DVDから画像を取り込み作成した。
 - 20 2016年1月25日に、浦添市てだこホールで催された「空手のルーツを探るシンポジウム」。
主催は浦添市教育委員会。
 - 21 前掲注(1)「沖縄空手道と泉州南少林拳の源流に関する考察」。
 - 22 文部科学省『中学校学習指導要領解説保健体育編』文部科学省、2008年、p.99。
 - 23 寒川恒夫『日本武道と東洋思想』平凡社、2014年、p.269-272。寒川は、数々の近代的国語辞典に著されてきた「武道」の解釈とその根拠を分析して、現在一般的に受け入れられている「武道憲章」が示す武道理解までにどのような武道概念の変遷があったのかを明らかにしている。
- ※ 本文中、五祖拳と白鶴拳の解説において日本語の翻訳については、株式会社スペースチャイナのご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

沖縄空手の型名称についての一考察

盧 姜 威（沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員）

一. はじめに

沖縄空手は、かつて「門外不出」の武術として限られた一部の人によって秘密裡に行われていたが、廃藩置県後、特に明治38年に当時の中学校をはじめ学校教育に取り入れられる¹ようになってから、徐々に公開されるようになった。これについては、すでに拙稿「近代沖縄"空手"の普及発展」² (2011年、『沖縄芸術の科学』23号)と「明治期の沖縄"空手"の事象—学校教育に導入前の事例を通して」³ (2013年、沖縄文化協会公開研究発表会)において述べている。その後、沖縄空手は日本武道の礼儀、作法、服装、段位制などの諸制度を取り入れ、今は世界中に普及発展を成し遂げている。

しかし、沖縄空手の歴史については、史資料が乏しいため、不明な点が多々存在している。例えば、沖縄空手の型（形）名称については、意味不明なものが大半を占めている（漢数字で表記されているものもあるが、呼び方について説明できないものが殆んどである）。

一方、沖縄空手と他の日本武道との最大の相異点は、体系化された型を有する点にあると言っても過言ではない。それ故、伝統的な沖縄空手の型名称の語源を特定することは、沖縄空手の全体像・ルーツを考える上においても、非常に重要なことであると思われる。

そこで、本稿では、沖縄空手の伝統的な型の名称について一考察を試みたい。

二. 沖縄空手の型名称の特徴

現在、沖縄空手は「しょうりん」流系、剛柔流系、上地流系、劉衛流などの流派がある。それぞれの流派には、また数多くの型が存在している。（これについては、『沖縄大百科事典』⁴と『沖縄空手古武道事典』⁵において整理されている）。現存の沖縄空手の型を一見すると、それぞれの型には、似通ったものもあれば、まったく別物の拳種を呈しているものもある。そのため、一つの流派に何種類もの違う拳種の型が存在しているようにも見受けられる。

沖縄空手の型の由来について、明治後半期に糸洲安恒（1831 - 1915年）によって創作された「平安」（ピンアン）の初段から五段の型をはじめとする沖縄で創られたものと、上地流系の「三戦」（サンチン）、「十三」（セーサン）、「三十六」（サンダイル・サンサーリュウ）などのように中国福州より直接持ち帰ったものを除いた、いわゆる古く沖縄に伝わる伝統的な型については、その由来はほとんどははっきりとしないのである。また、その伝統的な型名称の呼称も一種変わったような、日本語でも琉球語でもない呼び方をしていると思われる。漢数字で表されている「十八」（セーパイ）、「二十四」（ニーセーシ）、「二十八」（ネーパイ）、「五十四」（ウーセーシ）、「壹百零八」（スーパーリンペー）などについては、それぞれ漢数字に対応した呼称であると容易に想像がつくが、それ以外のカタカナで表されている型名称は、ほとんど意味不明のものとなっている。さらに、沖縄空手が日本本土に普及して以降、もともと意味不明なカタカナ表記の型名称に、さらに漢字の当て字をあてて、いっそう誤解を招くような型名称となっている。

沖縄空手の型名称の現状について、金城昭夫氏は『空手伝真録—伝来史と源流型—』⁶において次のように述べている。

「正確な文字で表しているのは、この『三戦』（サンチン）と、十三歩、十八歩、二十四歩、三十六歩、五十四歩、一百零八歩などの数字で表現された型名称ぐらいで、残りの四十余の型名称は、沖縄訛によって正しい発音が失われていたり、当て字の漢字を使用している」⁷。

金城昭夫氏は、1960年代後半から41年の間、125回余にもわたって、中国大陸と台湾に渡航して沖縄空手のルーツを探索してきた⁸。その研究の成果の一つとして、前述の『空手伝真録—伝来史と源流型—』が著されたのである。『空手伝真録—伝来史と源流型—』のなかに、沖縄空手の型名

について論述した部分が「型名称の原語考」⁹としてまとめられている。

「型名称の原語考」で取り上げられた沖縄空手の型は、那覇手系の型 11 種——1 サンチン、2 転掌、3 サイファ、4 セイサン、5 セイパイ、6 シソーチン、7 サンセイル、8 セイインチン、9 クルルンファ、10 スーパーリンペー、11 ペッチューリン、と首里手系の型 8 種——1 首里サンチン、2 ナイハンチ、3 首里セイサン、4 パッサイ、5 ニーセーシー、6 ウセーシー、7 白鶴、8 クーサンクー、と泊手系の型 5 種——1 ワンシュウ、2 ワンカン、3 ローハイ、4 チンテー、5 チントー、合計 24 種である。「型名称の原語考」では、沖縄空手の型名称の発音に着目して、福建方言の福州語と閩南語が深く影響していることを指摘した。(このことは、今後の沖縄空手の型名称の解明研究の方向性を指し示したものであろう)。しかし、金城昭夫氏は通訳を介して中国で沖縄空手の型名称の発音を調査したため、通訳を介した場合、時には必ずしも精確な発音がえられないのである。(実際、金城昭夫は、通訳の問題で苦い体験をした¹⁰という)。沖縄空手の型名称の発音は、どれだけ福建方言の影響を受けているのかを知るため、一度それぞれの発音を並べて比べてみる必要がある。

次はいくつかの沖縄空手の型名称(武具名も含め)をローマ字表記して、一覧表に並べたものである。

	型名称(武具名)	福州語	閩南語	中国語
1	san chin (三戦、サンチン)	san tsien (三戦)	sam cian (三戦)	san zhan (三戦)
2	se san, se- san, sei san (十三、セーサン、セイサン)	sei san (十三)	sip sam (十三)	shi san (十三)
3	sei pai (十八、セイパイ)	sei pai (十八)	sip pat (十八)	shi ba (十八)
4	ni- se- si- (二十四歩、ニーセーシー)	ni sei sei (二十四)	li sip si (二十四)	er shi si (二十四)
5	ne- pai (二十八、ネーパイ)	nei pai (二八)	li pat (二八)	er ba (二八)
6	u se- si (五十四歩、ウーセーシ)	u sei sei (五十四)	goo sip si (五十四)	wu shi si (五十四)
7	su- pa- lin pei (壹百零八、スーパーリンペイ)	so ba lin pai (壹百零八)	cit pah ling pat (壹百零八)	yi bai ling ba (壹百零八)
8	sai fa- (サイファー)	sai hua (獅法)	sai huat (獅法)	shi fa (獅法)
9	pa sai (パッサイ)	pa sai (拍獅)	phah sai (拍獅)	pai shi (拍獅)
10	si so- chin (シソーチン、ちしやうきん)	si sou tsien (蟋蟀戦)	sih sut cian (蟋蟀戦)	xi shuai zhan (蟋蟀戦)
11	nai han chin (ナイハンチン)	noy huan tsien (内反戦)	lai huan cian (内反戦)	nei fan zhan (内反戦)
12	nun tya ku (ヌンチャク)	luon tsai koun (両節棍)	nng cat kun (両節棍)	liang jie gun (両節棍)
13	sai (サイ)	tsai (釵)	chai (釵)	cha (釵)
14	tin be- (ティンペー)	tin pe (藤牌)	tin pai (藤牌)	teng pai (藤牌)
15	ton fa- (トンファー)	toy kuai (短拐)	tuan kuai (短拐)	duan guai (短拐)

上記の一覧表をみると、一目瞭然に、沖縄空手の型名称は、中国語よりも福建方言の閩南語か福州語の発音のほうが近い、という特徴をもっていることがうかがえる。さらに、「三戦」「十三」「二十八」などは、福建拳法の「型」名称として今でも使われているのである。

ところが、沖縄空手の型名称の由来、またその型はどの拳法の種類であるかを特定するには、型名称の発音だけでは不十分で、型の動作もみなければならないのである。

次では、沖縄空手のそれぞれの型について、発音と動作の両面から検討してみたい。

1、「パッサイ」について

(紙面の関係上、本稿では「パッサイ」という型のみを取り上げる。なお、図像 a は『空手道大観』¹¹ より、図像 b は www.youtube.com/watch?v=ViW-mwstJ78 より、図像 c は『沖縄空手古武道事典』より)。

「パッサイ」という型は、しょうりん流(小林流、松林流、少林寺流などを含む)系において伝統的な型の一つとして位置付けられている。現在、「泊パッサイ」「松村パッサイ」「糸洲パッサイ」などという呼称はあり、大同小異な型が存在している。例えば、第一動作(図像 a1、b1)は、同じく踏み込んで交叉立ちでの受けの動作となるが、受けの動作に手を添えているかいないかに違いがある。また、第二動作(図像 a2、b2)は、同じく「山字形」の構えをしているが、右足が前か左足が前かに違いがある。このほかにも、「中段横受け」「鉤手受」「双手揚受」「双手打込」など似たような技がおりこまれている。漢字表記には、「抜砦」「抜塞」などという文字を当てている。

「パッサイ」について、明治29年2月27日(旧暦正月十五日)に起こった「原国事件」¹² についての記事(『琉球教育』)に「パッサイ」の名称を確認する事ができる。また、その後の昭和13年、知花朝信(1885 - 1969年)は、「抜砦の型には松村派と糸洲派とがあるが、此處にその二つの中で松村派の抜砦の型を解説することにしたい。私は此の型を多和田氏より教傳を受けたもので、恩師糸洲先生より傳へられた抜砦は他の機會にゆづることとする」¹³ と述べていたことから、「パッサイ」は1930年代にすでに異なったものが存在していたことをうかがい知ることができる。

「パッサイ」の由来について、金城昭夫氏は長年中国で調査し、著書の『空手伝真録—伝来史と源流型—』において、主に①発音、②動作の両面から論を展開している。氏が最終的に出した結論は、「豹獅」から来ているのではないかと、なっている。

果たしてその通りであるか、ここで(恐縮ながら金城先生の調査研究に最大の敬意を表しつつ)検証してみたい。

まず、①発音において、金城氏は、次のように記している。

福建省の福州語では、「豹」は「バーッ」といい、泉州語では「パウ」という。

また「獅」は福州語、泉州語ともに「サイ」と呼ぶ。そこで「豹獅」は福州語で「バーッサイ」と言い、泉州語では「パウサイ」となる。

つまり、首里手パッサイは「豹獅戦」など、福州音、泉州音のどちらかの発音であり、それが沖縄訛りとなって「パッサイ」と呼称され定着したのではあるまいかと考えるものである。¹⁴

上記のように、金城氏は、「豹獅」の福州語と泉州語(閩南語)の発音の表記をカタカナで示しているが、これをローマ字表記になおすと、「バーッサイ」は「ba-sai」、「パウサイ」は「pausai」になる。ところが、実際福建において「豹獅」の発音は、泉州語(閩南語)では「pausai」となっていて、金城氏の指摘通りとなるが、福州語では、「ba-sai」とならず、「pausai」となっている(閩南語と同じ表記であるが、若干アクセントが違う)。

②動作において、金城氏は「パッサイ」の「第一動作」と「第二動作」を取り上げ、それぞれ「豹拳」と「獅拳」の特徴の表現であると説明している。

「パッサイ」の「第一動作」は、踏み込んでの受けの動作(図像 a1、b1)となっている。「第二動作」は、「山字形」の受けの動作(図像 a2、b2)となっている。

「パッサイ」において、確かに「獅」と思われる動作はいくつも見られる(詳細は後述)。ただし、

「第一動作」は金城氏の指摘の通り、「豹拳」の特徴であったとしても、「パッサイ」の全体を見ても、「豹拳」の独特の拳の握り方（沖縄空手の「平拳」と同様）、突き方、跳躍の動作はみられない。

「パッサイ」について、金城氏は「豹獅」ではないかと結論付けているが、動作の面からみて、「豹拳」の独特の拳の握り方、突き方、跳躍の動作がみられない、また「第一動作」の他に「豹拳」と思われる動作も挙げられていないこと、と前述の発音の問題を総合すると、「パッサイ」は「豹拳」の要素が非常に薄くなっているように思われる。

では、「パッサイ」の語源はどこからきているのか。これまで福建での調査で、ピッタリと当てはまるものが現れた。それが獅子舞をいう福州語と泉州語（閩南語）の「拍獅」（獅子舞について、中国では、「舞獅」は一般的となっているが、地方においてはいくつかの異なった独特な呼び方がある。例えば、廣東・台湾地方では「醒獅」、福州地方と泉州地方では「拍獅」という。また一昔まで、福建地方において部落の武術団が獅子舞を担当していた。そのため、獅子舞は芸能というより、武術そのものであるというべき。）である。理由として、以下に列挙す。

発音

「パッサイ」のローマ字表記は「pa sai」となっている。「拍獅」の福州語では「pa sai」となっていて、泉州語（閩南語）では「pah sai」となっている。一方、中国語では「pai shi」となっている。「拍獅」の中国語（「pai shi」）より福州語（「pa sai」）と泉州語（「pah sai」）の発音の方が「パッサイ」（「pa sai」）にピッタリと当てはまるのである。

動作

（本来ならば、動画を用いて説明した方が分かりやすいが、残念ながら、紙面形式においては、実現できないのである）。

第一動作（図像 a1、b1）、踏み込んで交叉立ちでの受けの動作。この動作について、「獅拳」のどの技にあてはまるかはまだみつけだすことができていない。しかし、獅子舞（「拍獅」）の時、踊り出す獅子（獅頭を担当する前の者）が頭を横うつようなしぐさは、この動作を想起させるのである。

第二動作（図像 a2、b2）、「山字形」の構えをしている動作。この動作は、「獅拳」の「獅子大開口」という技にあてはまる。獅子舞（「拍獅」）の時、獅頭を担当する前の者が獅頭を頭の上に構えるようなしぐさは、この動作を想起させるのである。

打ち落とすと突きの動作（図像 a3、b3）。この動作は、「パッサイ」の中で何回も繰り返し行われる動作である。「獅拳」の「金獅挿箭」という技にあてはまる。獅子舞（「拍獅」）の時、獅子が左右で球を弄ぶようなしぐさは、この動作を想起させるのである。

裏受けの動作（図像 a4、b4）。この動作は、「獅拳」の「砍臂」という技にあてはまる。獅子舞（「拍獅」）の時、獅頭を担当する前の者が獅頭を横へ振るようなしぐさは、この動作を想起させるのである。ただし、この動作は、「しょうりん流」系の他の型の中でもよく見かける動作なので、必ずしも「獅拳」の動作とは言い難いのであろう。

引き寄せ蹴りの動作（図像 a5、c5）。この動作は、「獅拳」の「采球勢」という技にあてはまる。獅子舞（「拍獅」）の時、獅子が球を抱えとって遊ぶ姿は、この動作を想起させるのである。

双手揚げ受けと双手打込みの動作（図像 a6・7、b6・7）。この二つの連続した動作は、「獅拳」の「金獅朝天」と「金獅双挿箭」という技にあてはまる。獅子舞（「拍獅」）の時、獅頭を担当する前の者が獅頭を上げたり下げたり前に出したりして、獅子の戯れる姿は、この動作を想起させるのである。

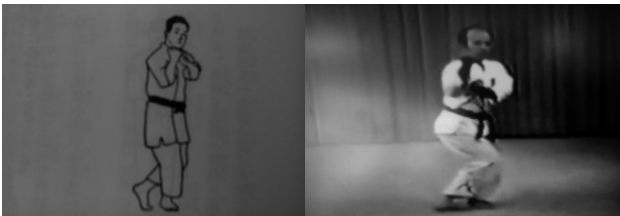
踏み出しての双手中段突きの動作（図像 a8、b8）。この動作は、「獅拳」の「日月排囊」という技にあてはまる。獅子舞（「拍獅」）の時、獅頭を担当する前の者が一步前に踏み出しながら獅頭を前に突き出すようなしぐさは、この動作を想起させるのである。

前屈での中段横受けの動作（図像 a9、b9）。この動作は、「獅拳」の「横攔」という技にあてはまる。

獅子舞（「拍獅」）の時、獅子が足を舐めるようなしぐさ（「獅子舐脚」という）は、この動作を想起させるのである。

猫足立ちでの鈎手受けの動作(図像 a10、b10)。この動作は、「獅拳」の「獅口」という技にあてはまる。獅子舞（「拍獅」）の時、獅子が周りを警戒する姿は、この動作を想起させるのである。この動作は、「パッサイ」の中において多用されている動作である。図像 b10 の動画は、鈎手受けを行いながら、猫足立ちの後ろ足を軸に、前足で半月を描くような動きもみられる。この動きはよりリアル的に、獅子舞を行う時の獅子が周りの様子をうかがいながら警戒する姿を表していると思われる。また、武術的要素から考えると、相手からの突きを片手でブロックして、もう一方の片手で相手の首元・目などを攻撃しながら、足で半月を描くように相手の足に引っ掛けて、相手を倒すことができるのである。

以上のように、「パッサイ」には、福建地方に伝わる独特な拳種「獅拳」の「獅子大開口」「采球勢」「金獅朝天」「金獅双挿箭」「横攔」「獅口」などの技法が多数みられるほか、獅子舞での獅子の戯れる姿、頭を突き出す動作、脚を舐める動作、周りを警戒する姿など、獅子舞を彷彿させる動作がみられるのである。



(図像 a1)



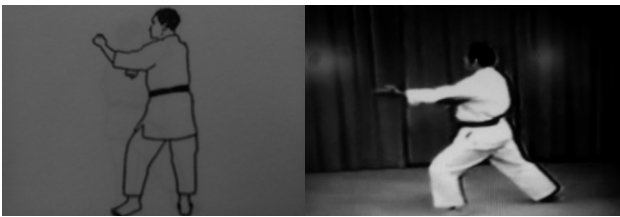
(図像 b1)



(図像 a2)



(図像 b2)



(図像 a3)



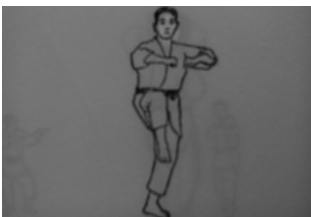
(図像 b3)



(図像 a4)



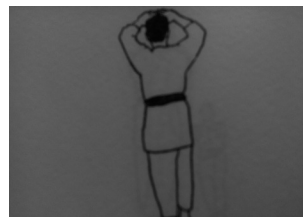
(図像 b4)



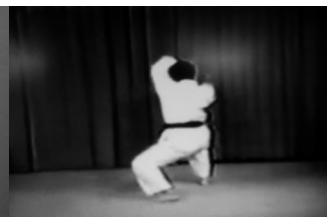
(図像 a5)



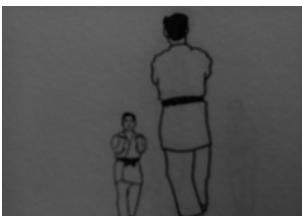
(図像 c5)



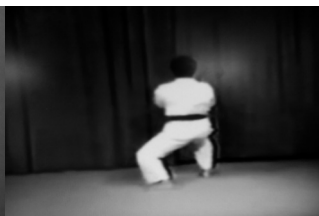
(図像 a6)



(図像 b6)



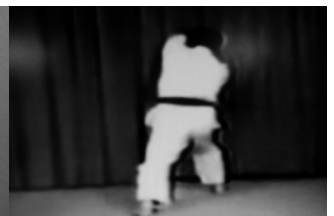
(図像 a7)



(図像 b7)



(図像 a8)



(図像 b8)



(図像 a9)



(図像 b9)



(図像 a10)



(図像 b10)

三. おわりに

沖縄空手に伝わる伝統的な型の一つである「パッサイ」について、長い間その由来は明らかにされてこなかった。「パッサイ」の由来について、金城昭夫氏は長年中国で調査し、著書の『空手伝真録―伝来史と源流型―』において、主に①発音（福州語の「バーッサイ」、或いは泉州語の「パウサイ」）、②動作（「第一動作」は「豹拳」、「第二動作」は「獅拳」）の両面から論を展開していて、結論として「豹獅」から来ているのではないかと、なっている。しかし、本稿において検証した結果、「パッサイ」に「獅拳」の要素が含まれているが、「豹拳」の要素が含まれている可能性は非常に薄いであることがわかった。そして、発音と動作の両面から「パッサイ」について考察していくと、沖縄空手の「パッサイ」は、獅子舞をいう福建方言（福州語・泉州語）の「拍獅」から来ていると考えられる。理由としては、①発音において、「パッサイ」と、獅子舞をいう福建方言（福州語・泉州語）の「拍獅」とは同じ発音である。②動作において、「パッサイ」には、福建地方に伝わる独特な拳種「獅拳」の「獅子大開口」「采球勢」「金獅朝天」「金獅双挿箭」「横攔」「獅口」などの技法が多数みられるほか、獅子舞での獅子の戯れる姿、頭を突き出す動作、脚を舐める動作、周りを警戒する姿など、獅子舞を彷彿させる動作がみられる、からである。

このように、沖縄空手の「パッサイ」は、獅子舞をいう福建方言（福州語・泉州語）の「拍獅」から来ていて、福建地方に伝わる独特の拳法「獅拳」の要素を含めたものと思われる。それゆえ、沖縄空手の「パッサイ」の拳種は、もともと「獅拳」に属さなければならないのであろう。剛柔流の「サイファー」も、もともと「獅拳」に属さなければならないのである（「サイファー」は、「獅法」の福建方言の発音となっていて、「獅拳」の技も含まれているのである）。

沖縄空手には、「獅拳」の拳種のほか、「鶴拳」「龍拳」「羅漢拳」「虎拳」など色んな拳種が存在していると思われるが、現今の沖縄空手を見渡すと、それぞれ別々の拳種であるにもかかわらず、表現様式はほぼ同じで、それぞれの拳種の特徴をあらわした動作は基本的に見当たらないのである。

「パッサイ」を一つの例にしてみると、沖縄においては「泊パッサイ」「松村パッサイ」「糸洲パッサイ」などの区別がある。日本本土においては、大正末期から昭和にかけて、沖縄空手が日本本土に伝わってから、日本本土においてさらに改変して、またちよっと異なった「パッサイ大」「パッサイ小」「パッサイ」などの型を創り出したのである。一方、どの「パッサイ」でも、「獅拳」の技法が織り込まれている。しかし、「パッサイ」の型名称の意味、また「パッサイ」に含まれていた動作の本来の意味がわかっていないためか、もともと「獅拳」の特徴である拳の握り方、「獅拳」を行う時の呼吸の仕方、獅子を表現する様式が薄れていて、他の拳種との違いが見分けられないぐらいになってきている。

このようなことになってしまったのは、明治38年に「体操式に組み立てられた」¹⁵ 沖縄空手を当時の中学校に導入したことに一つの大きな起因があるのではなからうか。もう一つの起因として考えられるのは、沖縄空手が日本本土に伝わってから、日本本土の慣習を取り入れ、拳種の違いを無視したかのように、流派名を付けたことにあるのではなからうか。

一つの流派に、いくつか異なった拳種の型を取り入れることは、武の要素から考えると、むしろ必要不可欠なものでもある。ただ、それぞれの型は、もともとどういう拳種であったかを忘れてしまうと、その流派のルーツも分からなくなってしまうのである。そういうことで、沖縄空手の全体像・ルーツを究明するには、沖縄空手のそれぞれの型の名称の語源、拳種を特定しなければならないのであろう。

注

- 1 『琉球新報』明治38年2月5日、『琉球新報』明治39年1月1日、『沖縄教育』（第31号）明治41年9月15日の記事により、明治38年に中学校では「空手」を一般生徒に課していたことがわかる。

- 2 盧姜威 2011年「近代沖縄”空手”の普及発展」『沖縄芸術の科学』23号 沖縄県立芸術大学附属研究所
- 3 盧姜威 2013年「明治期の沖縄”空手”の事象—学校教育に導入前の事例を通して—」沖縄文化協会公開研究発表会 沖縄文化協会
- 4 沖縄大百科事典刊行事務局編 1983年『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社
- 5 高宮城繁・新里勝彦・仲本政博編著 2008年8月『沖縄空手古武道事典』柏書房
- 6 金城昭夫 2001年『空手伝真録—伝来史と源流型—』沖縄図書センター
- 7 金城昭夫 2001年『空手伝真録—伝来史と源流型—』225頁 沖縄図書センター
- 8 金城昭夫 2001年『空手伝真録—伝来史と源流型—』21-24頁 沖縄図書センター
- 9 金城昭夫 2001年『空手伝真録—伝来史と源流型—』223-283頁 沖縄図書センター
- 10 金城昭夫 2001年『空手伝真録—伝来史と源流型—』241頁 沖縄図書センター
- 11 仲宗根源和 1938年『空手道大観』東京圖書株式會社
- 12 首里「頑派」の旧暦の正月十五日(明治29年2月27日)のパレード隊が首里小学の門前を通る時、生徒の嘲笑を受けることをきっかけに教員の原国とトラブルになり、負傷させてしまったことに対し、『琉球新報』では「頑固派の跋扈」、『琉球教育』では「本会々員原国政勝氏の奇難」と題して「頑派」を筆誅した。
- 13 仲宗根源和 1938年『空手道大観』239頁 東京圖書株式會社
- 14 金城昭夫 2001年『空手伝真録—伝来史と源流型—』255頁 沖縄図書センター
- 15 『琉球新報』明治38年11月13日

第5節 討論

コーディネーター：宮城篤正

中国側パネリスト：周焜民、翁信輝

沖縄側パネリスト：津波清、田名真之、嘉手苺徹、盧姜威

(●：コーディネーター発言、○：中国側パネリスト発言、△：沖縄側パネリスト発言)

●宮城：先ほどの研究発表に加え、補足説明等を行いたい方は挙手でお願いします。

△田名：補足とはいえないが、『大島筆記』の中で、「公相君」が弟子を連れて琉球にやってきて組合術をやったとあるが、(同時代の)清朝の軍隊がどのような武術をおこなっていたのか、中国側の研究者に伺いたい。

●宮城：では田名委員の質問について、周先生にお答えいただきたい。

○周：これについては歴史上の複雑な問題であり、私の知識にも限りがあるためはっきりと答えることはできない。しかしあえて私見を言わせていただきたい。

春秋戦国時代、多くの国が起こる中、中国の軍隊はそれぞれ独自の鍛錬基準があったと思われる。国家統一後、各時代の教育が歴史発展の過程で変化したように、軍隊の教育も異なる変化があったと考えられる。

例えば清朝統一後、清朝の教育と唐朝の教育が同じであったらどうか、そうは言えない。また、唐朝の教育法が宋代と同じであったか、それも言えない。宋代から元代そして清代においても同様である。特に元代、清代は少数民族が中原に入ってきた時代である。このような状況に於いて彼ら(少数民族)が漢民族の武術の伝統を取り入れたとは考えにくい。

私の熟知している泉州から考えると、宋代泉州では宰相・曾公亮が現れ、彼は『武経總要』を編纂した。それを受けて、明代の都督・俞大猷は『続武経總要』を編纂した。

宋代に編纂された『武経總要』は、中国最初の兵法書であり、これは当時、軍事界における百科事典のようなものであったと言える。

明代、俞大猷は師の著書『韜鈴内外篇』等をまとめ、檄文『続武経總要』を編纂した。

従って現在保存されている古書から、彼がこれら拳法の技法と理論を軍隊に教えていたと推察できる。彼が教えたのは『剣経』で、『剣経』は中国最初の武術専門書である。

『問念思談』という本に、「私は泉州で多くの人が棍棒を扱っているのを見た。彼らは皆、俞都督に施しを受けたと答えた。士大夫も皆、俞都督に直接施しを受けたのであった。」という記述がある。

では俞大猷が教えたのは何であったのか。『剣経』および彼の一生の事跡から分析する。

彼の師は名を趙本学といい、趙は宋代皇帝の(思想や学術の)師であり、さらに「孫子」の研究者でもあった。(彼は太祖拳の祖師である趙匡胤の直系の子孫である。)

俞大猷は趙本学の学生であったことから、彼の学んだ拳術は「太祖拳」であると考えられる。その後、俞大猷は青年山で猿拳を学んだ。

『紀効新書』には奇しくも「太祖拳」「猿拳」の両方が記述されている。

以上のことから、俞大猷が自身の率いる軍隊に押し広めたものは「太祖拳」であると推測できる。しかし、前述した内容は戦争のためにおこなったのではなく、体作りのための鍛錬である。

また棍術について、太祖棍術と五祖棍術は泉州では「軍棍」という呼び名がある。軍隊の棍術である。なぜ「軍棍」と呼ぶのか、それは俞大猷がこの棍術を軍隊、当時の兵士に教えたことを証明していると考えられる。

公相君（クーサンクー）について

●宮城：「公相君」はどの拳種であったのか、翁先生にご意見を伺いたい。

○翁：「公相君」は山東省の武官である。資料に出てくる「公相君」の型は他の南拳の型とまったく異なり、背丈の高い人がおこなうとびったりくる型である。福建省の南拳は、使い手の体が小さいことから小技が多い。

南拳の特徴は「刃手反脚」といい、足技を使う事が多い北拳に相反して、南拳は足を守る型が多くなっている。

五祖拳の中でも、五つの拳種の動き方はそれぞれ特徴がある。猿拳は猿、羅漢拳は羅漢拳の特徴がある。伝統的五祖拳の受け皿として今の五祖鶴陽拳があるが、両者は特徴が異なる。剛柔流が羅漢拳を基にしていることがわかっているが、剛柔流に羅漢拳の特徴が見えないのと同じだ。

△津波：翁先生にもう一度伺いたい。沖縄では「公相君」は、人の名前ではなく尊称だと言われているが、実名と歴史上どの書物に出てくるのかご存じであれば教えていただきたい。

○翁：私は「公相君」について詳しい研究をおこなっていないが、福建省の型ではないと言える。

△盧：「公相君」は山東省の出身と空手界で言われているが、『大島筆記』の中では「公相君」が名前であるのか出身地はどこであるのか等記載がない為、現在も特定ができていない。

しかし、金城昭夫先生の研究では「公相君」は「拳の聖君」という説を立てている。

これを特定するには、それぞれの技法について比較研究することが必要不可欠である。

沖縄の空手では、さまざまな流派があるが、流派名というのはそれぞれ特徴を表す必要があると考える。少なくとも剛柔流においては、羅漢、サイファーの獅子、クルルンファーの龍等の拳の特徴が表れており、また上地流は鶴、龍、虎等の拳と言われている。しかし、どの部分に中国武術の各拳種の特徴が表れているのか検証しなければ、沖縄空手の流派はこの拳種の特徴があると断定することが難しい。

発展の過程において、中国でも沖縄でも他の型の要素を取り入れる事があると考え。それと同時に、元の要素が薄れていくこともあり得る。

私自身、「パッサイ」を取り上げ、獅子舞が起源となっていると説を立てた。

他にも「マキワラ」等について、中国に同じものはなかったが、「木人(桩)」というものがある。「沙箱」については中国の何処からか伝わっているのは間違いない。

石垣島にはマキワラと示現流のことが伝わっている事から、沖縄の空手には日本の武術の影響を受けているのは間違いない。

今後様々な拳種の関連性を検証していく必要があると考える。

●宮城：会場から、「公相君」について、中国側の文献にその記録があるのかどうかという質問があるので、翁先生に伺いたい。

○翁：これまでの研究では、「公相君」の記述がある中国側文献の発見には及んでいない。

先ほど田名先生から質問があった兵隊と武術の関係について補足説明をおこないたい。棒術を例にあげると、兵隊と民間の棒術は異なる。例えば兵隊の棒術はまっすぐ進み、後退はしない。現在の棒術は後退する事もあるので、この点については異なる部分だと思う。武術は兵隊から伝わってくると考えられる。

五祖拳の中の獅子舞は、北京と広東の獅子舞とは異なる。福建省の獅子舞は独特であり、「チン(陣)」という動きがある。この動きは、倭寇との戦いの際、兵隊から民間へ伝わったと考えられる。

●宮城：では中国側で「公相君」に関する文献は確認されていないという事ですね。

○翁：そうだ。沖縄にある文献でのみ見たことがある。

△田名：発表資料にはなかったが、冊封使の使節団 450 人のうち、168 人が兵隊であったとされている。

『大島筆記』は土佐藩の人が書いた伝聞である。聞き書きをして残した資料であるため「公相君」について、字が正しいものか、また人の名前であるのか等を証明する物はない。しかし、型名として残っているので、意味があったものだと理解が出来る。「公相君」は弟子も引き連れていたことから、集団で演武していたことがわかる。

また兵隊について、北京から来る人もいるが、大半は福州で雇っている。福州の人は軍隊で訓練を行う際に武術なりを取り入れたと思われる。

○翁：中国武術の歴史において、兵隊が武術を行っていた等の記録はない。科挙試験をみると、その中には武術に関する試験はなかった。試験は弓や乗馬等があったが、科挙を受ける人の中には、武術を嗜んでいる人も受けたと考えられる。

薩摩侵攻と空手について

●宮城：会場から田名先生へ以下の質問がある。

「空手は士身分のものであると説明があったが、薩摩が琉球を侵略し、武器を取り上げ、代わりに農機具などを護身用にして普及したとされているがどうであるのか。」

△田名：基本的に空手は、首里・那覇などかつて町方と呼ばれた地域にしかなかったと考える。地方には棒術や差し石等の“鍛え方”は残っているが、空手については残っていない。よって、空手は町方のものであったと思われる。また現在に伝わる空手は、近世から始まったものだと思う。「薩摩が琉球を侵略し、武器を取り上げ代わりに農機具などを護身用にして普及した」とあるが、基本的にそういうことはなかったというのが答えである。琉球の進貢船が中国へ行く際には、海賊に対応するため、刀や槍、鉄砲まで装備していたと考える。空手（素手）で戦ったとは考えられにくい。

鉄砲については、薩摩に管理されてはいたが、それ以外の武器は首里城にあったということが記録から判明するので、武器を取り上げられたという話は俗説に近い。空手はあくまでも体を鍛えるものであり、戦争時に行ったものではないと考えた方がよいと思う。

△津波：沖縄に薩摩が侵入して以降、新しい武器を輸入することは禁止されたわけで、在来所持していた武具を禁止したのではない。沖縄の士族が本土の士族のように刀の二本差しをして歩くということはなかった。ただ、沖縄の久米村の士族に「家憲」があるが、例えば『四本堂家礼』の中には家の守り刀として代々刀を受け継いでいる記録がある。

薩摩の管理下での武器の制限と、空手の発達との関係をどのように考えていくべきか、今後この問題についてさらに深めていく必要があると思う。

△嘉手苺：中国の文献から明、清の時代、拳法を含め武術が戦いのために普及したと考えられているが、近世の沖縄で、戦いのために拳法がおこなわれていたのかどうか気になる。

田名先生の発表資料を見て、マキワラは士族の鍛錬の結果を披露していることがあると感じた。一方で、士族が目指していたのは文人として仕官することであり、琉球王国が武備を持っていたわけではないとも理解した。そのため徒手の武術は護身のためか、あるいは教養の一つとして行われていたのを考え比較する必要がある。また、祝宴など国事で冊封使を迎えた後、国王の前で行う芸能の意味があったと思われる。そうなると武術的な側面だけではなくと言えらる。

琉球処分後の近代沖縄では、空手は主に体操にかわるものとして取り組まれていき、武術としての目的と、離れていったのである。

今後は、空手が行われていた目的を明らかにし、日中双方の武術を比較した上で共通事項について理解をしていく必要があると考える。

- 宮城：私論であるが、文化の発達は、波のように何回も押し寄せて影響を与えるものであると考える。私自身『大島筆記』以前にルーツがあるという考えである。

周先生は、明初にルーツを求めたいとおっしゃった。沖縄で明初に並行するのは、浦添を中心とした三山時代であるが、徐葆光の『中山伝信録』では一つの王権が分立して三山になったとしており、それに対し伊波普猷は、原始時代から争った結果三山が形成されたという説を立てている。私個人の見解では伊波の考え方に近い。

最後に、国子監は古い時代は南京にあり、後に北京に移るがそれについて会場から質問があるので、田名先生に伺う。

国子監への留学と中国拳法について

△田名：「琉球では清の国子監に官生として、留学生を送っている。官生の留学期間は七年間と非常に長く、拳法を学ぶ時間は十分にあったと考える。国子監は北京にあったが、北京の拳法との関わりは調べなかったのか。」という質問ですが、明代は南京に国子監があり、清代には北京にあった。官生の留学期間は最大七年となっているが、途中国へ帰った者も少なくなかったのではないかと考える。拳法を学ぶことについて、公的な記録には残っていないが、七年という長い滞在期間中に、体を鍛えるために拳法に興味を持った者がいたかもしれない。

- 宮城：他にもたくさんの質問を客席から頂いているが、時間がございません、各委員の意見集約についても省略します。

沖縄空手が世界各国に普及している今日、空手の本場沖縄においてそのルーツを解明することは、非常に重要であり、避けては通れないことである。

今回のシンポジウムでは近世琉球から近代沖縄についての話がメインとなったが、ルーツについては、先史時代から備わっている自己保存本能や三山時代の按司たちの勢力争いの中で形成されたとも考えられる。

今回の浦添市の事業が、空手のルーツの解明についての糸口になればと考える。



空手のルーツを探るシンポジウム討論

特別寄稿

永春白鶴拳と沖縄空手道の源流 ——王打興と林世成の経歴を同時に論ずる——

苏 瀛 汉（泉州市武術協会副主席）

一. 王打興の武芸が福建全土（四府）に伝わる

（訳注：四府→福建省全体、閩東・閩西・閩南・閩北のこと）

王打興（1659 - 1736 年）は、永春蓬壺東坑の人である。彼は白鶴拳の創始者である方七娘とその夫の曾四の永春後廟辜厝における初めての弟子である。彼はまた「二十八英俊」（28 人の武術の才に長けた人）のなかで 2 番目に列せられる人物であるばかりか、「前五虎」と尊称される中の一人であり、永春白鶴拳の三代目の継承者の中で傑出した人物でもある。彼はまさにその流派の継承者であり、永春白鶴拳の発展と、伝播の歴史の中で、重要な貢献をなし、崇拝されている人物である。

『桃源東熙王氏族譜・卷七』には以下のような記述がある。

「禹興は字を貢孺といい、号は重興で、第 2 子である。順治己亥（1659 年）6 月 6 日未の刻に生をうけ、乾隆丙辰（1736 年）3 月 29 日寅の刻に江西省弋陽県にて没し、聖旨碑は汪家嘴にあり東に据えられ西向きで……」

閩南方言では、「打」と「重」は諧音（似通った音）で、「興」と「胸」は同音異字である。「重」を「打」と読み書きしたり、また「興」を「胸」と読み書きしたりしている。筆者は譜牒（家譜）及び多くの手書きの古拳譜のなかで、「王打興」・「王打胸」という文字や呼称を等しく見かけた。このように同音異字や、諧音（似通った音）だが別の文字を使っているなどの誤りは、口承伝記やあるいは幾度も伝承を書き写した手書きの古拳譜のなかで見かけられ、魚と魯を混同し、赤と紫の色が溶け合ってぼやけてしまったようなはっきりしない書き方などは多く見られる。

中国の伝統文化の儀礼（作法）では、歴代に渡って長幼の序の尊卑を重んじ、「父は子の字（あざな）を使わず、子は父の名を使わない」という戒めがある。ゆえに他人の「諱名」を称するのは、年配者のみに許される。他人の「字（あざな）」を称する者は、他人を重んずるものだからである。また、他人の「名号」を称する者は、恭敬の意を表わすもので、「王打興（王打重）」と称しているのは、すなわち後者の恭敬の意を表したものによる。

こればかりではなく、他にも例はある。現代において、同音異字や、字形が似通っている事によって、誤って呼称し、聞き誤りをし、書き間違えたりする例は良く見受けられることで、そのような誤謬は少なくはない。最も早くに見られる事例は：清末民国はじめの永春白鶴拳の宗師・潘祿詠は、字を世諷（1858 - 1931 年）と称し、広く名が知られている。だが民国時代の 1928 年の中央国術館の第 1 回全国国術考試（国家試験）の総合名簿上では、音が同じで異なる字の「潘世晃」と間違えて書かれた。また、『申報』及び永春教会の出版した『崇道報』では、インタビューをした記者の誤りにより「潘世晃」と書かれたが、これは「晃」と「諷」の閩南方言を聞き取った者が書き間違えた例である。

近年では、例えば永春白鶴拳の師・劉億は、字は翼万（1886 - 1968 年）といい、人々は「劉一」師と称している。「一」（yī）と「億」（yì）は閩南方言では似通った音であり、普通語（共通語）でも同音（訳注：声調を除く）で、即ち「劉億」師となる。また、永春白鶴拳の老拳師の鄭聯甲は、字を世冠（1891 - 1966 年）というが、人々は「鄭鵠」師と呼ぶ。この「甲」と「鵠」は閩南方言では似た音で、すなわち「鄭甲」師となる。幸いな事に、以上の三名は評判が高く人々によく知られている人物である。でなければ百年後には、後世の人々は一体これはどういう事なのかと、また

時間を費やして考証しなければならない。たった一字の違いによって後世の人々を煩わせる事になってしまうのだ。

よって、「王打興」・「王打胸」はすなわち「王重興」と誤って書かれるのも、不思議なことではなく、またよく見受けられる事で奇妙なことではない。彼こそが永春蓬壺東坑の「王重興」である。だが、ここでは、論を進めるのに都合の良いように、良く知られ俗称となっている「王打興」として論を進めたい。

清の乾隆年間の林董の著書に『白鶴拳家正法』という古拳譜があるが、その記載によると、「曾（四）の習得したその法は永春に帰する。その教えを受けた諸姓は樂・王・林・蔡・邱・呉・許・康・蘇・周・顔・鄭・張・辜・李・白などの諸家であり、号を二十八英俊とする。樂傑居はその28人の中の一人で、王打興は（また「胸」とも書くが、それは同音異字である）その2番目に位置している。蔡照（また昭・熙とも書かれるが、それは字形が似通っている為である）というその人は生れつき力が強く、林添佬は生来性格が依怙地で、白戒と鄭礼叔は鄭家の寵叔（1673 - 1755年）に伝授した。（「寵」の字は、またある人は「籠」と書き間違えている。）それぞれ上中下拳法に分かれ、後の人に教授した。」との記載がある。よって、「二十八英俊」の中には、確かに王打興という人物とその足跡があった事が分かる。

また清の乾隆年間の『永春鄭礼叔傳拳法<白練寺傳授拳法>』の初めの頁に、はっきりと「前永春の名師曾四叔が五虎に伝える：鄭礼叔（1654 - ?年）、辜喜叔（1639 - 1706年）、辜魁叔（1663 - ?年）、樂傑叔、王打興叔（1659 - 1736年）」の字句がみられる。ゆえに「前五虎」にはまた王打興という人物とその事績の記載がある事がわかる。

前述した資料に基づくと、「王打興」は即ち「王重興」と認めることが出来る。彼は前の永春の名師・曾四が初めて白鶴拳を弟子に伝えた「二十八英俊」の中で、その名を2番目に列せられたという以外に、「前五虎」のひとりとしての栄誉を与えられた。「英俊」の名を得たのが先で、後に「五虎」の名を得たのである。永春東坑には確かにその人物（王打興）がおり、また武術を学んだという事績がある。

王打興は、曾四が永春後廟辜厝における初めて教えた28人の弟子の一人であり、その名を2番目に連ねるもので、また、五虎の名を受けた者の中でも名だたる者であったことから、その資質が優れていることは言を俟たない。彼は武芸を習得し、故郷の東坑に帰り、一族や同郷の者に教えた。その地では、現在でも依然として武術修練の伝統が残存している。永春後埔の老拳師である劉翼万（劉億、1886 - 1968年）と彼らの流派は、王によって伝えられたものであると言われている。王は後に、遠く福建東部の「上四府」（福州・延平・邵武・汀州）にまで足を延ばし、各地で拳を伝えた。その流派の末裔の弟子は、王が常日頃、伝授し口述したことに基づき、それに自ら学んで体得した事を結合させて、それを記述し書として書き上げ、拳譜として後世の人々に伝えた。よって2百年余にわたり、世代を越えて王が技芸を「上四府」に伝えたという説があるが、その言説は明確であり、その来歴にはそれなりの理由がある。

永春は山間の僻地に位置し、蓬壺は永春の中北部にあり、徳化とは隣接し、大田・龍溪とも距離的には遠くなく、直接四府に行くことが出来る。山間の住民の大部分は、日の出とともに働き、日が落ちたら休み、外界との接触は比較的少なく閉鎖的である。家を出て、遠く他郷にまで出かける者は少ない。わずかな人士が学問の為に遊学するか、武人が拳を教える為に出かけるか、あるいは一芸に秀でて手に技術を持った者がこれを売りにして、生活の為に遠くにでかける。王氏族譜の記載によると、王打興（王重興）は「江西弋陽県にて没し、聖旨碑は汪家嘴にある」とあり、その地は永春から遠く千里（500^{キロ}）の外にある。拳師が出かけて拳を教え、あるいは土地を選んでその地を終の棲家にする事は、おのずと考えられることであり、彼は享年78歳でを享受して他郷で老衰の為に亡くなった。

興味深いことに、永春の『桃源儒林辜氏宗譜』の記載によると、王打興の生きていた清の康熙・

乾隆年間（1662 - 1735 - 1795 年）は、辜氏の一族には、辜良任・良昌・良百・良辰及びその後世の甥・甥孫（弟兄の孫）らが、江西弋陽・上饒の陽潭・樓村等の地に基盤を築いて創業し拳を伝授したとある。これは決して偶然ではない。当時、王は後廟辜厝で武芸を学び、辜氏の人々と親交が深かった。更に辜良喜・辜良魁のふたりも「二十八英俊」の諸家の中で「前五虎」の令名を授けられており、王とともに拳史に名を連ねている。ゆえに辜氏一族と王は互いに助け合い連れ立って他郷に行き、王と共に拳を教えながら生計を立て、その地を選び居を構えたことはまさしく整合性がある。今に至るも辜氏一族はみな辜・王姓を名乗り、江西弋陽県に於いてその一族とともに白鶴拳の名残がみられる。しかし残念なことに、筆者はこれらの人々とはまだ連絡が取れていない。

十数年前、香港の李剛、台湾台中市の頼仲奎の2氏からかつて、それぞれ『白鶴拳譜』、『拳理妙法』の影印本（複写）をご寄贈いただき、筆者はこれについて検証する機会を得た。

1997 年 9 月、日本空手道剛柔流泊会総本部館長の渡嘉敷氏が三度目の永春を訪問され、蘇瀛漢（筆者）と白鶴拳について会談した。その前に彼が二度目に永春に来られた時、王打興の史実について考証されたいとのご要望があり、その時筆者は事前に調査した結果、『王打興先賢初考』（王打興・先賢の師に関する初考）という一文を書いてあったので、そのご要望に答えた。

当時は、彼の持って来られた『武備志新釈』及び『白鶴拳譜』の文献を拝見した。その中には「白鶴拳の起源、解脱法、銅人の図、拳法の大要八句、十二时辰の部位を示す図、四不治七不打、截脈筋気取五指の堅固な手利法について論ず、古法大綱論章、藤山王甫（筆者注：府？傳？）缶登師伝授の秘訣、王缶登師が羅漢拳法に題す、経年居心存積の勸戒」等の 10 項目があり、拝読したところ、その内容は筆者が以前より良く知っているものと同じであった。その中の「白鶴拳起源」の一節及び諸論は、これまで書き写されて伝わったもので、いくらかの文字について異同があり書き改められていた。順序がいくらか調整されている以外は、その主な内容は清の乾隆年間に永春の林董某の著した『白鶴拳家正法』や、李・頼両氏の古譜の内容と、同じかあるいは食い違う点はないと思われる。

この書は確かに同一系列の物であり、即ち清朝の道光年間から同治年間に民間に伝わった永春の古拳譜の抄本で、この書に作者自身の体得した事を書き加え新たに文を作り、帰納的に凝縮したものであると筆者は考える。その書は文が分かりやすく、生活と密接に結び付いており、親しみやすいものである。また、声に出して読んでみると朗々として口になじみ易く、はなはだ貴重なものである。かつ後世に出現した「福州鶴拳」系統にみられる詞句章節の項目がある。よって、この書は清朝中後期の道光から同治年間（1821 - 1874 年）に福州等の地域（上四府）に伝わった白鶴拳の伝承者（佚名）の作で、それが再度、日本の沖縄に伝承されたと認めることができる。

この書は逆に「鶴法一家」という言い方を証明できるが、ただ当時は、まだ「福州鶴拳」系という呼び方を正式に定めていなかったために、「白鶴拳」あるいは「鶴法」と称している。

『白鶴拳譜』のなかの「白鶴拳起源」という一節で、「曾四叔が十分に拳法を習得した後、永春に戻って諸家に伝授し、ただ王を最も優秀とする」という文がある。この「王」とは何者だろうか？ 筆者はこの人はすなわち王打興（王打重）を指していると考え。本書では、作者の流派を伝承することに対する感情を十分に読み取ることが出来る。俗に「一日（の教え）は師となし、終生（の教え）は父となす」というが、作者はかくのごとく「王」を崇拜し、その宗学の流派は必ず王と直接の関係があると思われる。

「王缶登」と「王打興」・「王禹興」の福州方言の語系と閩南語系及び国語（普通語）は発音の上で、共通点や訛変するところがあるのではないかと想像するに、私たちは更に進めて検討し論証しなければならない。もしも王打興と王缶登に関連があるとすれば、あるいは同一人物であるとすれば、はたまたその流派の伝承者であるなら、渡嘉敷唯賢会長のおっしゃっているように、彼らもまた「祖師爺（創始者の師匠）と同様に王打興という先賢の師を崇拜する」というように、根も葉もない噂

ではなく、その崇拜には理由があると考え。もし、彼が即ち「王」であるとすれば、日本沖縄の空手道の源流と関連があるとの考え方は、拳を習得してその書を得たことに依拠しており、謎が解けるのであろうと考える。

二. 林世成が三度琉球に敷衍する

さらに林世成について論じてみる。福州鳴鶴拳系統の源流はただ、林世成にのみ遡る事ができる。林達崇（盤嶼八）について述べると、彼はまず、福州義序高堂庵の少林の羅漢僧に羅漢拳を学び、後にその師と技を較べた永春白鶴拳の師林世成を師として学んだ。技を演ずるたびに、羅漢拳と白鶴拳の鼓蕩の気を溶け込ませ激しくゆすぶる発声により、自ら「鳴鶴」と称した。しかし対外的には等しく「白鶴拳」若しくは「鶴法」と称した。その譜の伝承者の系統は以下の通りである。

林世成——林達崇——謝崇祥（1852 - 1930 年 如如哥）——肖鑠德——余宝炎（1907 - 2002）…。

林世成と王打興、林椎同はともに永春蓬壺郷の人である。その年代は前後して百年余の隔たりがあり、譜の継承の属例によって推算すると、その間はわずか三、四代である。王打興が故郷で武芸を伝えてから、林世成とその末裔とは三、四代の隔たりがある。古老らが、かつて言い伝えたところによると、「王打興は郷里の人々に武術を伝えたのである、また彼は四府等の地にも伝えた」というものの、それは信じるに値するが、残念なことにこれまで文字による記載は見あたらず、これはまさしく武術が「口伝身授（口伝と実技により受け継がれる）」という伝承の特徴が然らしめる所である。

もしも林世成が王打興の末裔で三、四世代の伝承者であるとすれば、手書き抄本の白鶴拳譜は世に伝来し、福州地域にまで伝わる。そうだとすれば、福州鶴拳の系統と日本沖縄空手道の源流関係は明らかであり誤りがない。渡嘉敷唯賢会長の得た、『白鶴拳譜』のなかの「白鶴拳の起源」等の書名及び内容の記述は不思議ではない。また福州鶴拳の源流は永春白鶴拳であることの証左でもあり、永春がその発祥地であることは道理にかなっている。

福州鶴拳系の伝承系譜と、インドネシアの高国恵（祖籍は福建福州）の保存したものが、王建氏の手を経て筆者に寄贈された葉の本によると、その表紙には「林珠森祖師が遺した拳法薬方書」と書かれている。2 ページ目にははっきりと「福建永春德化县（筆者注：これは誤りで、永春は当時州として置かれており、德化と大田の2 県を直轄し、蓬壺郷は德化县の境界に近かった。原作者は、ふだん蓬壺郷は德化县に属していると聞き間違えていたようで、許されるべきである。）蓬壺郷に居住し、林世成老師が黄大彭の拳を伝授し・治法部位（治療する場所）・打傷薬（打ち身の薬）を伝え、仙方妙法（良く効く妙法）は百発百中で、外に伝えることはならず、秘密にして内部に伝えるのみで、決してそれを誤ってはならない。」とある。

また「この拳の套路の鶴法は、百発百中で吞吐浮沈はすなわち虎龍雲禽の相がある。吞（息を吸う）時は猛虎が下山する如く、吐く時は青龍が一気に天にかけ上る如く、また、浮く時は白雲が一気に駆け上がる如く、沈む時は禽獣が風を見て地に迎えるが如くである。祖師の白鶴仙人が夢で方七娘に拳法の妙法を教え、その後方七娘は、永春の曾嚇四と百年の夫婦の契りを結び、この拳法を伝授した。」との言が伝えられている。これは、以後発展した福州鶴拳系の飛・鳴・宿・食・縦鶴の理念と一致しており、「福州鶴拳」の源流は永春にあることを証明している。この書は、高国恵が自ら師の手より取得したという事が言える。その伝承譜の系列は、林世成が黄大彭に伝え、黄が林珠森に伝え、林が高国恵の師祖に伝え、更に再び高国恵に伝えた（現在インドネシア在住でその一支流となっている）。

2004 年 10 月に、高はいとこの王建（その頃は筆者蘇瀛漢の同僚であり、同時に泉州市武術協

会の副主席であった)と電話連絡をとった。

彼はインドネシアから二人の息子を伴って泉州を来訪し、永春に赴き筆者とその源流を遡り、並びに伝承の問題について検討したいと願った。まさかの事態で隠された事情を明らかにする良いチャンスを逃してしまった。当時その老人は80歳を超えており、今では更にご高齢になっているが、今でもこの老人はお元気であろうか？懐かしい限りである。(王建氏を通して連絡して見ると、ご老人は御健在とのことで、今連絡中だが、喜びに堪えない。)

あと、筆者は何年にもわたり、様々な方法で林世成の経歴を調べた。永春白鶴拳の五里街鎮の鎮長・林玉品氏(現在は書記に就任)の多大なご支持ご協力を得て、『桃源美山林氏族譜』を見つけ出し、巻26の54頁を見てみると、「世」のついた家系譜の中に「攸詰若(諾)、字を世城(筆者は「成」を「承」とし、あるいは「誠」ではないかと疑っている)、号を敬忠、郷賓、三子をもうけた、乾隆庚戌年(1790年)7月13日巳の刻に生まれ、同治戊辰年(1868年)2月24日卯の刻に没した、卒年79歳、松柏崙中央に葬る、坐亥向巳(亥の場所に位置し巳の方向に向いている)」と記載されている。

突然悟ったのだが、「成、城、承、誠」の4文字は同音異字である。攸(名は行)、詰若(忌み名、「若」と「諾」は同音異字である)、名づけ、表字、冠号の文化的特性に基づく、必ず品詞の近いものかあるいは反対の品詞の語を原則とするので、「世承諾、敬忠誠」の字号が文化的要求の慣例に比較的符合する。しかし、習俗的な呼び方は時には、札記や伝承された抄本の中によく見られ、聞いた音と書いた文字には齟齬があり、言い間違えたり聞き間違えたりして今に至りっている。後世に譜を作成する際、それに従って、間違えていたものを間違えて伝え、遺留された過ちは限りがない。

さらに系譜には「林世城」は「郷賓」として記載され、即ちこれは「郷飲賓」である。『郷飲耆賓』の解釈によると「清の制度では、毎年各州県より年齢が高く声望の篤い人物一人を謹んで選抜して賓とする。次は介、その次は衆賓として督撫に詳しく報告し、郷飲の礼を挙行した。名の挙がった賓介の姓名原籍は冊子にして部に報告され、それを郷飲と称する。」「蒋抱玄は次のように言う:「郷飲」はまた「郷貢」ともいわれる。」とある。ゆえに林世成は品徳が高く、信望の篤い者で、その上博識で技量が高く、すこぶる尊敬された長者であった。ゆえに、彼の社会的地位は尋常なものではなかった。

さらに言えば、同輩で年齢がすこし高いものを「哥」あるいは「兄」と称するが、これは通常のことである。それで名を「詰若(諾)」と称する者を他人が「若若(諾諾)哥」と呼ぶとしたらどうであろうか？

福州で以前考証された「如如哥」とはどのような関係があらうか？その想像は大いに広がる。また、福州鳴鶴拳の伝承の譜系に、林世成を誤って「林世成」と書き間違えているが、これもまた伝承者の筆の誤りである。師徒孫の三代の伝承者の名前を後世の人に誤って伝えたのであらうか？これもまた我々が子細に検討すべきことである。

上述した伝承の歴史の細片をまとめてみると、以下のような推論が導き出せる。

曾四——王打興——三、四代で林世成に伝わる——黄大彭——林珠森——高国恵の師祖
——高の師父——高国恵

林世成——もう一方に伝わった福州系の林達崇——謝崇祥(1852 - 1930年 如如)

[……——肖鑠徳——余宝炎(1907 - 2002年)——余丹秋……——東恩納寛量(琉球人)]

1877 琉球(現在の日本沖縄県)人の東恩納寛量は琉球商船に乗って福州を訪れ、謝に拳を学び師友と称された。3年後に学び終えて沖縄に戻り、現地の空手道武術などの衆芸と融合させて「那覇手」を創出した。幾度か改良し吸収した後に、「沖縄剛柔流空手道」として名を定め、広く門下

生を集めて伝授し、沖縄空手道の中興の祖と尊称されている。けだしそれは、永春白鶴拳の源流と緊密な関係にあることはこれによって見て取れる。

そのほかに民国初年、また福州台江水部の呉賢貴は、1912年に琉球東町において「永光茶行」を開業し、商売の余暇に鳴鶴拳を沖縄の弟子に伝え、その後世の流派の門下生が現在は「沖縄泊剛柔流会」を組織して、引き続き武芸を伝えている。

その伝承者の系譜は大方以上の通りであり、もしもこの論述が成立するのであれば、また拳史も検証でき、それらの伝承もつなぐことが可能となり、その理由づけも充足され、その功績には多大なものがある。その伝承の歴史は長く、また燦然と光り輝いており、いささかの迷いもなく、困惑する疑いもないことは、なんと素晴らしいことであろう。

東恩納寛量の曾孫弟子の渡嘉敷唯賢氏は、20数年にわたって数10回も福建福州あるいは永春などの地を訪問し、源流を追い求め、ルーツを訪ね祖師を探し、武術交流を展開し、その力を余すところなく使った功績は顕著なものである。また林世成流派の勢い盛んな点と、永春の祖庭の凝集力をも顕彰している。

三. 歴史の断片を繋ぎ合わせ、引き続き長幅の歴史を伝承する

筆者はもともと霊験ある者でもなく、また残念なことに生まれてくる時代も遅かったので、先賢の師にまみえることもなく、警咳に接して教を請うこともなく、素晴らしい教を受けすることもなかった。しかし、例えそうであろうとも現在遭遇している事を詳細に知ることはできないだろうか？白鶴拳の伝承の歴史を研究する志がある有識者に希望を託し、漏れやミスを補い、広範に探し求めて広く検証し、歴史の断片をつなぎ合わせて、我が伝承の長い拳史をつなぎ続けたい。

兩岸の3つの地、異郷他国が互いに担当して、共に関心を払いつつ、この白鶴拳の伝承史を「富春山居図」（豊かな春の山に居る絵巻き）のように豊かなものにし、鮮やかな輝きを再現させ、額に手をやり称賛し慶賀しようではないか。

ここに感ずるところあって、筆者は次のように考える。この小論は王、林の不思議な逸事を伝えたものではないが、拳術家の筆記、宗族の符牒（家譜）および今は亡き古老による伝聞によって、整合性を推察して綴った文である。このように点と線とをつなぎあわせて書き連ねてきたのは、考証したいからであり、本来の歴史の元の姿に立ち還って、王打興・林世成ら先人賢者に対する明確な歴史的認定をし、わが祖庭に寄るべき譜なしということがないようにと願うからである。先人が考証していない事や、失われた証拠を引っ張り出し、成り行き任せに分からないことをあれこれ考え、隠れたことをはっきりさせたいからである。また、「伝聞された事柄には伝聞による誤謬があるといわれるが、文字には亥と豕のように似通ったものがある。名だたる賢人の著述といえども、典籍によっては誤りをすべて免れることは避けがたい。大体において関係のないものや理が通るものの中には次の二通りの場合があるかもしれない。つまり、一文字の誤りがあるか、衰と鉞のように異なっているものを用いている。」

ゆえに小論は一人の人間の浅薄な見識に過ぎないが、これによって諸兄のご高明な意見を賜りたいと思う。いささか他の考え方もあるかもしれないし、異端の夢想かもしれないが、ここに論をなしてこれをたたき台に、諸兄のご教示を賜りたい。

2014年12月6日 苏 瀛 汉 永春怡台軒において改筆する

永春白鹤拳与冲绳空手道之渊源——兼议王打兴、林世成之身世

苏 瀛 汉（中国泉州市武术协会副主席）

一、王打兴技传上四府

王打兴（1659-1736），永春蓬壶东坑人。他既是白鹤拳创始人方七娘与丈夫曾四在永春后庙辜厝首传弟子“二十八英俊”名列居其二，亦是号称“前五虎”尊名享其一之永春白鹤拳第三代传人中的杰出传承人物，正是他和其所传之派裔，在永春白鹤拳发展传播史上起过重要的历史性贡献，是一位备受尊崇的人物。

在《桃源东熙王氏族谱·卷七》中有：“禹兴字贡孺，号重兴，令仲子。生顺治己亥（1659年）六月初六日未时，卒乾隆丙辰（1736年）三月廿九日寅时，殁在江西弋阳县圣旨碑汪家嘴，坐东看西……”之记述。

“打”与“重”在闽南方言中为谐音，“兴”与“胸”在闽南方言中为同音异字，而将“重”读写为“打”，“兴”读写为“胸”者，笔者在谱牒及多本手抄古拳谱中，均有见到“王打兴”、“王打胸”之字样叫法。似此音同字异、音谐字别之错处，在口传笔记或几经传抄之手抄古拳谱中，鱼鲁相淆、朱紫互湮每有多见。

在中国传统文化礼仪中，历来讲究长幼尊卑，有“父不称子字，子不称父名”之诫。故称他人之“讳名”者，为长辈之专有；称他人之“字名”者，系出于尊重；而称他人之“名号”者，则是出于恭敬，称“王打兴（王重兴）者乃属于后者。

无独有偶。近世当代，音同字异，字形相近，而致误称误听而讹写者，屡见不鲜。较早前者，如清末民初之永春白鹤拳宗师潘禄詠，字世讽（1858—1931年），远近闻名。可就是民国时期的1928年中央国术馆之首届全国国术考试（国考）总榜单上，竟也为音同字异而误写为“潘世晃”；《申报》及永春教会主办之《崇道报》亦因采访记者之误被写为“潘世晃”，此又是“晃”与“讽”之闽南方言听者误写之例也！晚近者如永春白鹤拳师刘亿，字翼万（1886—1968年），人称“刘一”师，“一”与“亿”闽南方言为谐音，普通话为同音，即指“刘亿”师；又如永春白鹤拳老拳师郑联甲，字世冠（1891—1966年），人称“郑鸽”师，此“甲”与“鸽”闽南方言亦同为谐音，即是指“郑甲”师。好在以上三位，声名在耳，邑人均知均识，不然百年之后，后世不知作何究竟，而又作一番费时考证了！真是一字之差，误尽后人。

因此，“王打兴”、“王打胸”就是“王重兴”，误写之处，不足为奇，亦常见不怪。他就是永春蓬壶东坑的“王重兴”。不过下文循例俗称为“王打兴”，以便行文。

清乾隆年间林董著的《白鹤拳家正法》古拳谱载有：“曾（四）尽得其法归永春，传教诸姓乐、王、林、蔡、邱、吴、许、康、苏、周、颜、郑、张、辜、李、白诸家，号为二十八英俊。二十八人中，乐杰居其一，王打兴（亦有写“胸”者，因音同字异）居其二，蔡照（亦有写昭、熙者，因字形相近）公生平大力，林添佬生平偏性，白戒与郑礼叔传授郑家宠叔（1673-1755，“宠”字又有人误写为“笼”字），分为上中下拳法，教授后人”之记述。因此，“二十八英俊”确有王打兴其人其事。

又据清乾隆年间的《永春郑礼叔教传拳法〈白练寺传授拳法〉》首页中，写明“前永春名师曾四叔传五虎：郑礼叔（1654-？）、辜喜叔（1639-1706）、辜魁叔（1663-？）、乐杰叔、王打兴叔（1659-1736）”之字句，故“前五虎”亦载有王打兴之其人其名。

根据上述资料，可以认定“王打兴”即“王重兴”，除为前永春名师曾四首传白鹤拳弟子名列在“二十八英俊”居第二者之外，还享有“前五虎”之一的盛誉，“英俊”得名在先，“五虎”得名于后。永春东坑确有其人，亦有学武其事。

王打兴是曾四在永春后庙辜厝首传的二十八弟子中，有名居英俊第二，五虎享一之佼佼者，其资质自不待言。艺成返回故里东坑，在那里传授族人及乡邻，现在该地还保留有练武的传统。永春后埔老拳师

刘翼万（刘亿，1886-1968）就说他们那一派系就是王之所传。王后来远游福建东北部“上四府”（福州、延平、邵武、汀州）一带，在各地教拳传艺，其派裔传人弟子则根据王平素所传口授，结合自己之心得体会，记述成书写了下来，成为拳谱留给后人，因此二百余年来，故老世世相传王把技艺传至“上四府”之说，言之凿凿，其来有自。

永春地处山区偏僻之地，蓬壶为永春中北部，与德化为邻，与大田、尤溪相距不远，可直达上四府。山区百姓大凡都日出而作，日落而息，与外界比较封闭，罕有步出家门远涉他乡，仅有少数士子读书游学、武人外出教拳、或靠一技之长手工谋生者，或有时出远门。而王氏族谱记载王打兴（王重兴）“歿在江西弋阳县圣旨碑汪家嘴”，此地距永春远在百千里之外，拳师外出教拳，或择地而居终老他乡，自在情理之中，且享寿七十有八而善终。有趣的是，据永春《桃源儒林辜氏宗谱》之记载，在王打兴生活的清康熙、乾隆年间（1662-1735-1795），辜氏族人就有辜良任、良昌、良百、良辰及其后世之侄、侄孙辈，也在此时迁出在江西弋阳、上饶的阳潭、楼村等地开基创业垂统，这决非是巧合。想当时王在后庙辜厝学艺，与辜氏族人感情敦好，更有辜良喜、辜良魁二人亦在“二十八英俊”诸家之中亦享“前五虎”之名，与王齐名同列拳史，故辜氏族人与王互相援引外出，与王边教拳为生边择地而居正相吻合。于今辜氏族人也都咸以为辜、王两姓在江西弋阳县有其族人和白鹤拳之余绪，但惜未能与之建立联系。

十几年前，香港李刚、台湾台中赖仲奎二君，曾分别寄赠《白鹤拳谱》、《拳理妙法》影印件，余为之圈点并略作考鉴。1997年9月，日本冲绳空手道刚泊会总本部道馆渡嘉敷唯贤馆长第三次来永，与苏瀛汉恳谈白鹤拳。此前第二次来永时，曾要求考证王打兴之史实，时笔者事先通过调查，写有《王打兴先贤初考》一文以应。此次见到其带来的《武备志新释》及《白鹤拳谱》，见《白鹤拳谱》中有“白鹤拳起源、解脱法、铜人图像、拳法之大要八句、指示十二时辰部位、四不治七不打、论截脉筋气取五指坚固手利法、古法大纲论章、藤山王甫（笔者注：（府？傅？））缶登师传授秘诀、王缶登师题罗汉拳法、劝戒青年居心存积”等十余条目。事后拜读之下，即见内容似曾相识，见其中“白鹤拳起源”一节及诸论，历经传抄，除个别字句有所改动、次序有所调整以外，其中心内容与清乾隆年间永春林董某著的《白鹤拳家正法》等及李、赖二君之古谱所阐述的内容或雷同或并无二致。笔者认为此书确系同出一源，即是清朝道光至同治年间流传于民间传抄之永春古拳谱，而加上此书作者融入己见心得，重新行文造句浓缩归纳之作。其书文墨通俗易懂，亲切贴近生活，读来朗朗上口，甚为难得。且有出现如后世所见之“福州鹤拳”系之表述词句章节条目。因此可以认定此书是清朝中后叶之道光至同治年间（1821—1874）流传于福州等地区（上四府）的白鹤拳传人（佚名）所作，再辗转流传于日本冲绳者。此书反倒可以证明“鹤法一家”之说法，只不过当时尚未正式衍生定名为“福州鹤拳”系之诸种称谓，而是同样均称为“白鹤拳”或“鹤法”。

《白鹤拳谱》内的“白鹤拳起源”一节中，有“曾四叔学得十分拳法后，归永春传授诸家，惟王为最”之句，此“王”者何人？笔者认为就是指王打兴（王重兴）。行文之处，足见该书作者对门派传承之感情。俗云“一日为师，终生为父”，作者如此推崇“王”，则其所宗学之门派，必与王有直接关联。而“王缶登”与“王打兴”、“王禹兴”之福州语系、闽南语系及国语（普通话）是否在发音上有所通融达变之处？遐想之余，则有待我们进一步去研究探讨论证。如果王打兴与王缶登有所关联，或则是同一人，或则是其之传人，则如渡嘉敷唯贤会长所言，他们也如“尊奉祖师爷一样地尊崇王打兴先贤”之说，并非空穴来风、说说而已，其崇拜自有道理。如是者，则“王”与日本冲绳空手道渊源关系之迷思，得拳得书之由来，或许就可将谜团解开。

二、林世成三传衍琉球

再说说林世成。福州鸣鹤拳系之源流只上溯到林世成。说到林达崇（盘屿八）先从福州义序高堂庵少林罗汉僧学罗汉拳，后拜与其师较技之永春白鹤拳师林世成为师学艺，每演艺融罗汉、白鹤鼓荡之气发声而自曰“鸣鹤”，然对外则统称“白鹤拳”或“鹤法”。其传承谱系为：林世成一林达崇—谢崇祥（1852-1930 如如哥）—肖铄德—余宝炎（1907-2002）……。

林世成与王打兴、林椎同为永春蓬壶乡人，其年代前后隔有百余年，按续谱俗例推算，其间不过三、四代人。据说王打兴在家乡传艺，林世成隔世为其裔派三、四代传人。虽故老前曾相传“王打兴有传乡人，再传上四府诸地”等情可信，惜未能见诸于文字记载，而这又正是武术“口传身授”之传承特点所使然。假如林世成为王打兴之裔派三、四世传人，得到手抄白鹤拳谱而传世，流传至福州地区，那么福州鹤拳系以及日本冲绳空手道之渊源关系就明白无误了，渡嘉敷唯贤会长得到的《白鹤拳谱》中的“白鹤拳起源”等书目及内容中的说法，就不足为奇，亦可佐证福州鹤拳源出永春白鹤拳，永春为其祖庭则亦顺理成章。

根据福州鹤拳系之传承谱系表述，及印尼高国惠（祖籍福建福州）保存，经王建转赠予笔者之药册，其封面写有“林珠森祖师遗下拳法药方书”，第二页内中赫然写有“福建永春州德化县（此处有误：永春当时为州之建置，辖德化、大田二县，蓬壶乡与德化县交界靠近，原书作者平时误听以为蓬壶乡属德化县，情有可原）蓬壶乡居住，林世成老师传授黄大彭拳、治法部位、打伤药，仙方妙法，百法百中，不可外传，秘之自传，切勿悞”，并写有传“此拳套鹤法，百发百中，吞吐浮沉，即虎龙云禽之象；吞如猛虎下山，吐如青龙一起冲天，浮如白云一起冲口，沉若百禽见风迎地。祖师白鹤仙梦教方七娘拳法妙药，然后方七娘与永春曾吓四结为百年夫妇，将此拳法传授”等言。这和以后发展成福州鹤拳系的飞、鸣、宿、食、纵鹤的理念是一致的，证名了“福州鹤拳”源于永春！此书可谓是高国惠得自其师之手。其传承谱系是：林世成传黄大彭，黄传林珠森，林传高国惠之师祖，再二传至高国惠（现居印尼一支）。

2004年10月高经其表亲王建（时与苏瀛汉同事，同任泉州市政协副主席）联系电告：特从印尼带两个儿子至泉州，欲往永春与笔者追溯渊源，并探讨传承问题。詎料因人为因素所误，缘慳一面，痛失厘清个中隐情之良机。其时斯老年逾八旬，于今已臻耄耋矣，几年来未知斯老今犹康安否？念甚念甚。（经联系王建，悉高老健在，正在联系中，喜不自胜）。

无何之余多年，然笔者犹多方探寻林世成之身世。乃蒙大力宣介永春白鹤拳之五里街镇林玉品镇长（现任书记）之支持，觅得《桃源美山林氏族谱》，查见卷廿六第五十四页，世字辈中，有“攸诘若（诺），字世城（笔者疑“成”为“承”或“诚”），号敬忠，乡宾，福创三子，生乾隆庚戌年（1790）七月十三日巳时，卒同治戊辰年（1868）二月廿四日卯时，寿七十九，葬松柏崙中央，坐亥向巳”之记述。突然悟及：成、城、承、诚四字同音异字，攸（名行），诘若（讳名，“若”与“诺”为同音异字），根据取名、表字、冠号之文化特性，必须以词性相近或相反为原则，因此“世承诺、敬忠诚”之字号比较符合文化要求惯例。可俗成之叫法，有时于札记、传抄中常见听音写字而有错别之误及口误之故，致令后世修谱时因循以讹传讹，贻误无穷。

再者谱载“林世城”为“乡宾”，即是“乡饮宾”。据《乡饮耆宾》之解释为：“清制，每岁由各州县遴选年高有声望之士绅一人为宾，次为介，又次为众宾，详报督抚，举行乡饮酒礼。所举宾介姓名籍贯，造册报部，称为乡饮。”蒋抱玄曰：乡宾，犹言乡贡也。”因此林世成是一位德高望重并以文博技显而颇受敬重的长者，其社会地位非同一般。

又再者，如果平辈之人称年纪稍长之人为“哥”或“兄”者，这是常理，因此名“诘若（诺）”被人称为“若若（诺诺）哥”，又当如何？与福州前之考证“如如哥”又会有什么关系？则其想象空间大矣！况前福州鸣鹤拳之传承谱系，又有把林世成误抄为“林世咸”者，此又是传抄者之笔误了。是否会将师徒孙三代的传承名字被后人误传呢？这又是我们必须加以仔细研究的。

综观以上之传承历史碎片，我们不妨作如下推论：

曾四—王打兴—三、四传至林世成——黄大彭——林珠森——高国惠之师祖——高之师父——高国惠
林世成——另传一支福州系林达崇——谢崇祥（1852-1930 如如）

[——肖铄德——余宝炎（1907-2002）——余丹秋 ——东恩纳宽量（琉球人）

1877年琉球（现日本冲绳）人东恩纳宽量随琉球商船来在福州，向谢学拳，以师友称处。三年后学成返冲绳，融当地空手道武术等众艺，创“那霸手”，几经改进吸收后，定名为“冲绳刚柔流空手道”，广收门徒，被誉为冲绳空手道中兴之祖。盖其与永春白鹤拳之渊源缕结，于此可见。

另外，民国初年，又有福州台江水部之吴贤贵，1912年到琉球东町开办“永光茶行”，商余把鸣鹤

拳传授予冲绳弟子，其后世之派系门徒现组织有“冲绳泊刚会”继续传艺。

其传承之谱系大致如此，如果此论成立，则拳史可稽，传承可续，理由充足，功德无量矣！其传承之历史长卷，亦则烁烁有光，可无迷思困惑之憾，岂不美哉！

东恩纳宽量四传弟子渡嘉敷唯贤先生，二十余年来数十次来到福建福州或永春等地，追溯本源，寻根访祖，开展武术交流，不遗余力，成绩斐然。也彰显了林世成流派之炽盛，永春祖庭之凝聚力。

三、拼历史碎片，接传承长卷

我等本非通灵者，又憾生来既晚，无由得见先贤，聆听教益，指示迷津。但纵然于今周遭发生之事，又岂能一一详知者乎？！惟有寄望有志于研究白鹤拳传承史之有识之士，拾遗补缺，广搜博证，拼此历史之碎片，续我传承之长卷。两岸三地，异邦他国，负使担任，共同关注，俾使白鹤拳传承史如“富春山居图”画卷，再现熠熠光辉，则额手称庆矣。

有感于此，笔者认为，此文虽非王、林传奇逸闻轶事，乃是据拳家笔记、宗族谱牒及故老传闻而缀成之逻辑推理性文章。绳贯丝连，意在考辩，希望以还原历史本来面貌，予王打兴、林世成先贤一个明确的历史肯定，不致我祖庭者无谱，彼溯源者无考，引援失据，随波逐流，迷思费解，罔言非是。也“尝闻事有传闻异辞，文有亥豕相望者，虽名贤著述及通行典籍不能全免，要于大体无关及理有可通者，不妨两存，然亦有一字之差，而袞钺异用者”，故虽是一家管见，其意在抛砖引玉，庶免另类之思维，异端之遐想，遂成雷语，则斯愿足矣！

2014年12月6日 永春 苏瀛汉 重写于怡云轩

資料編

琉球空手のルーツを探る事業に関するメディア掲載記事一覧（抄）

（日本）

- ・「特集」琉球空手のルーツを探る事業『沖縄空手通信』82号（2013年4月）
（株）沖縄メディア企画内 沖縄空手道通信編集室
- ・「特集」琉球空手のルーツを探る事業『沖縄空手通信』91号（2014年1月）
（株）沖縄メディア企画内 沖縄空手道通信編集室
- ・「空手のルーツを探る 浦添でシンポ 武術者ら形披露」『沖縄タイムス』2015年1月29日
- ・「中国武術と類似性紹介 空手のルーツを探るシンポ 国内外の研究者登壇」
『琉球新報』2015年2月1日
- ・「特集」空手のルーツを探るシンポジウム『沖縄空手通信』
104号（2015年2月）（株）沖縄メディア企画内 沖縄空手道通信編集室

（中国）

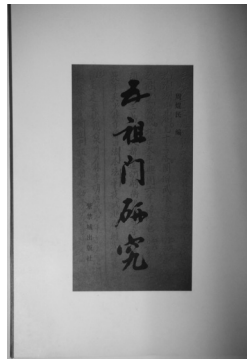
- ・「切磋武艺：永春白鹤拳 VS 日本空手道」
(http://www.qzwb.com/gb/content/2013-11/10/content_4723113.htm) 泉州網
- ・「武术盛会 追根溯源泉州武术代表出席“空手道起源国际研讨会”」
(http://szb.qzwb.com/dnzb/html/2015-02/06/content_86169.htm) 東南早報
- ・「中日两国武术家取得共识：泉州五祖拳是日本空手道鼻祖」
(http://www.qzwb.com/gb/content/2015-02/09/content_5039079.htm) 泉州網

惠贈文献一覧

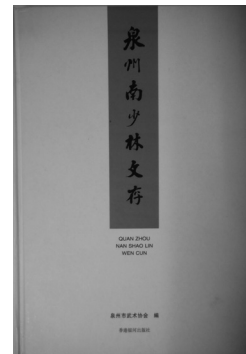
周焜民 『五祖拳譜』
天行健出版社 2009年



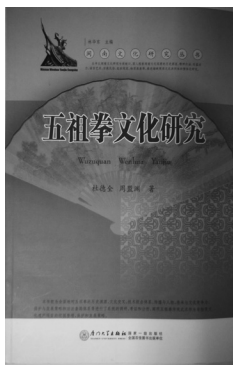
周焜民編 『五祖門研究』
紫禁城出版社 1998年



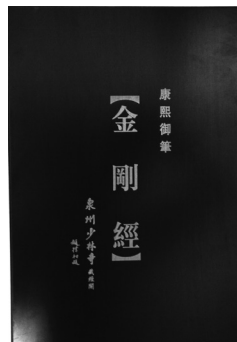
泉州市武术协会編 『泉州南少林文存』
香港銀河出版社 2010年



杜德全・周盟淵 『五祖拳文化研究』
厦門大学出版社 2012年



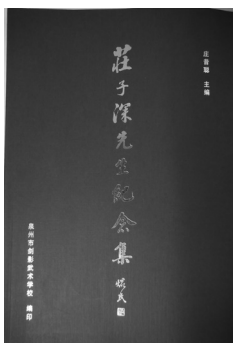
『康熙御筆 金剛經』
泉州少林寺



常定主編 『泉州少林寺旅游指南』
泉州少林寺 2012年



庄昔聰主編 『莊子深先生紀念集』 庄昔聰・庄昔義編著 『紀念庄深先生誕辰100周年泉州少林花拳』
泉州市劍影武術學校 2011年



庄昔聰編著 『中国功夫操』
人民体育出版社 2005年



庄昔聪 『儿童歌谣・成语武术操』
人民体育出版社 2007年



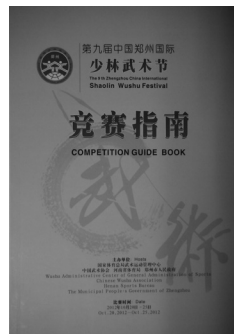
苏瀛汉主编 『鹤道魁』 泉州市教育局・泉州市体育局编 『泉州
永春恰雲武術研究会 2000年 州市中学生南少林寺五祖拳健身操』



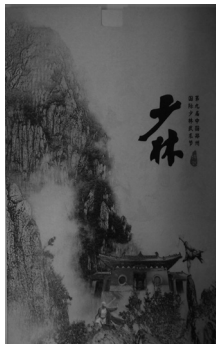
张郑峰 『郑州體育』
鄭州体育邮册编辑委员会



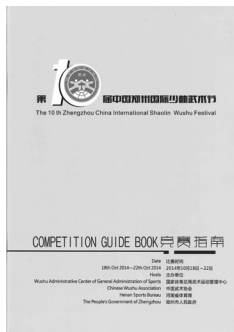
『第九届中国郑州国际少林武术『第九届中国郑州国际少林武术节秩
节竞赛指南』 2012年 序册』 2012年



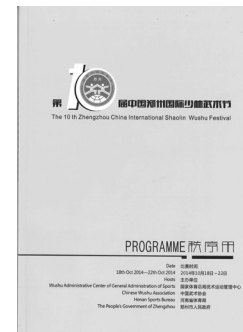
『第九届中国郑州国际少林武术节『第十届中国郑州国际少林武术
少林』



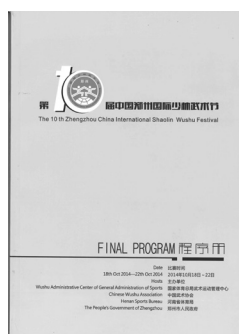
『第十届中国郑州国际少林武术节竞赛指南』



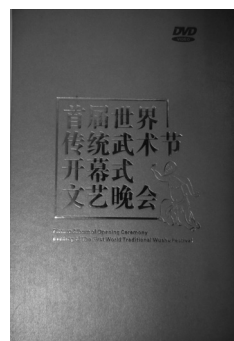
『第十届中国郑州国际少林武术节秩序册』



『第十届中国郑州国际少林武术节 郑州市人民政府『首届传统武
程序册』 术开幕式文艺晚会』 2012年



『首届世界传统武术开幕式文艺晚会』 2012年



調査票

中国武術・琉球空手調査票

<メモ欄>

調査日時 ()	実見場所 ()	調査者 ()	年齢	経験年数
演武者	性別	演武型		
流派				
型の伝承				
鍛錬法 (器具・型・その他)				
発声法・呼吸法				
技法の特徴 (攻め技・受け技・立ち方等)				
備考欄 (役職・段位・武術表彰・道場主など)				

平成 26 年度 沖縄振興特別推進市町村交付金事業

琉球空手のルーツを探る事業調査研究報告書

平成 27（2015）年 3 月発行

編 集：株式会社スペースチャイナ
那覇市天久 2 丁目 28 番 24 号

発 行：浦添市教育委員会
浦添市安波茶 1 丁目 1 番 1 号

印 刷：株式会社尚生堂
浦添市安波茶 1 丁目 6 番 3 号